
S h e i s

鳩梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sh e i s

【Nコード】

N 1 5 1 8 B

【作者名】

鳩梨

【あらすじ】

血を啜る鏡。血を捧げる鈴音。淫らに絡む異常な二人の少女。同族殺しの鮮血の姫と死ねぬ蟲の蔵。二人の少女は互いしか寄る辺が居らぬが故に異常と知りながらも愛し合う。けれど、二人を掻き乱すように人形遣いが這いまわる。伝奇を地に百合の種を植え学園という施設を設けた物語。

D a i l y l i v e s o f t h e m - 1

燃え盛る炎。

咽ぶような血の香り。

ただ呆然と座り込む裸の少女。

少女の前には血に塗れた細い体躯の、少年のような容姿の少女。
血に濡れた少女は自らの着ていた外套を脱ぐと少女の肩にそっと
かけた。それでも少女は反応しなかった。ただ呆然と座り込むだけ。
血に濡れた少女はそんな少女に、泣きそうな苦しそうな表情をす
ると、自身に付着した血が少女につかないよう気を払いながら、そ
っと抱きしめた。

——もう、大丈夫だよ、と。

少女の凍て付いた、そうするしかなかった心は、ようやく溶け出
した。

互いの名を呼びながら、二人の少女は泣いた。

炎はいまだ消えず、咽ぶような血の芳香は優しく、二人の少女を
包む。

その不快ですら、今の二人には安堵をもたらすものだった。

D a i l y l i v e s o f t h e m - 1

山一つ切り取った場所にそれはある。

まず目に付くのは重厚でシンプルな、けれど厳かで大きな門。

門の内と外には警備員の詰め所があり、24時間常時警備員がつ
めている。

その門をくぐるとちよつとした遊歩道のように整備されている石
畳の道に出る。しばらく歩くと噴水のある広場があり、空から見る
とこれを中心に十字架十字をきるようになっていて。ここを右に少
し歩くと乙女達が住む寮舎が見える。赤茶色のレンガ張りのそれは

中世のフランスあたりを連想させられる。左に行けばゴシック調の荘厳さ溢れるカテドラルがあり、まっすぐ行けば大きな建物が見える。西欧風の厳かな外観の、上流階級の貴族が住んでいそうな趣のそこそ乙女達が毎日の大半を営む学び舎であり、汚す者のいない花園である。

校舎は中等部、高等部が一緒になっており、幼稚舎や小等部はこことは別の場所に、大学部はこの下にある。つまり、ここは幼から大学までの一貫したエスカレーター式の、俗的に言えばお嬢様学校なのである。

この聖リユミエール女学院は、とある目的のため建設、運営されている。

それも、あえて少女達のみを集めて。

「はあ……。とてもいい天気だ」

ここは生徒たちもあり立ち寄らない裏庭の一角。校舎の裏に位置する図書館の、更に裏にある。

木々が邪魔にならない程度に植えられているここは、春ならば桜の花びらが舞っているのだろうが、今は幾つかの葉が風に揺れているだけで寂しいものである。

そんな場所に二人の少女がいた。一人は銀色の髪を後ろだけ伸ばして、紅いリボンを使い首の後ろあたりで括った少年のような容姿の美しい少女。もう一人は背まで届くほどの長い黒髪を綺麗に切りそろえ、その左の一房だけに、銀髪の少女と同じ紅いリボンをしている純和風のキレイな少女。

「こんな天気の時はずっと最適だと思うんだ。そう思わない、リン？」

少年のような少女はリンと呼んだ少女に膝枕をしてもらい、気持ちよさげにそう呟く。対して、リンと呼ばれたほうの少女は呆れた

ような表情で応える。

「そうですね。……けれど、今は授業中なんですよ。キヨウ様」
言っと、溜め息が漏れた。

そう、今は午後の授業中。本来ならば教室で数式と戦っていないければならないはずなのだ。

キヨウ様と呼ばれたほうの少女の名はヒナゲシ雛罌粟 鏡カガミと言い、リンと呼ばれたほうの少女の名はミネサキ峰岬 ススネ鈴音と言う。

二人はありていに言えば、サボリだった。

といっても、鈴音は休憩時間中に次の授業の準備をしていたところを鏡に、「ちよつと来て」となかば無理矢理にここまで連れてこられたのである。もつともこう言うことは別段珍しいことでもなんでもないのだが。

「授業ねえ……。あんなの退屈なだけじゃない」

鏡は欠伸をかみ殺しながら眠たげにそう言う。実際、鈴音も高等部課程で行う授業というものには退屈さを感じていた。それでも根はマジメなのできちんと授業を受けておかないといけない気がしているのだ。——学生生活など二度と行えないと思っていたからこそ。それでも、こうして膝枕なんかを頼まれるままにしてあげているのだが。

「そうかもしれませんが、学生なんだから授業はちゃんと受けな
いと」

「リンはマジメだねえ」

「キヨウ様が怠けすぎなんです」

鈴音は、はあ。と再び溜め息をつく。すると、頬に冷たい感触があった。鏡が鈴音の頬に手を当てていた。

鏡の眩しげに細められた薄氷色の目と、ひんやりとした冷たい手の感触に、鈴音はドキリとする。

「ボクはさ、ずっとこうしてたいんだけどな」

甘えるような口調。本心からそう言っているかわかってしまう、
そんな響き。

鈴音は自分の頬が赤くなるのを自覚した。鏡という少女はこう言うことを恥ずかしげも無く唐突に言ってくる。そして鈴音に向ける言葉は常に本気だということがわかっていいるから余計に照れくさい。「わ、私だって、キョウ様とこうしていることに不満は無いのです……。け、けど、私はキョウ様と楽しい、ちゃんとした学園生活をおくりたいのです……」

鈴音は鈴音で鏡に対しては常に本音をぶつけようと決めているので、恥ずかしながらもそう言う。しかし、恥ずかしさのあまり顔を俯けてしまう。今にも顔から火を噴きそうだった。

「リンがそうしたいと言うなら、ボクもそうする」

にこり、と鏡は笑んでそう言った。鈴音の意見に鏡は大抵賛同する。それでもすぐにふらりとその意見とは違うことをしだしては、鈴音にどうしたいのかを言わせる。

雛罌粟鏡という少女は峰岬 鈴音の恥ずかしがる姿がとても好きだった。かわいいな、と薄く微笑みながら思う。

「けど、後少しはこのまま……」

そう言いながら鏡は仰向けから横向きになり、体温高めの鈴音の脚に手を這わせる。鈴音の脚を鏡の体温低めのひんやりとした手が優しく撫でる。

「——っ」

「あたたかい」

ピクリと反応した鈴音に気付きながらも無視して、鏡は気持ちよさそうにそう呟いた。鈴音はその微妙な撫でかたに声が漏れそうになるのを堪えるのに必死だった。そんな鈴音の努力も知らぬ風に鏡の手は校則規定の長さの鈴音のスカートの中にまで侵入しだした。

鏡は場所を考えない。鈴音もそんな鏡を止めるそぶりは無いのだった。

そんなお二人の様子を先ほどから、仮病を使って授業から抜け出

し隠れてひっそりこっそり観ています。ワタシは冬原 フユハラ 六花 リツカ といいます。ふっふっふっ。この六花ちゃんの「なんだかありそな予感レィダー」は今日も感度はばっちりです。

……さてさて。ワタシは一体何処のどちらさんに向けてこんな思念を送っているのでしょうか。

とにかく。にしてもですよ！ あわわ。ついにお二人はあんなことまで！コレはアレですかね。「ふふ、ここがいいのかい？」「いや、そんな……こんな所で……」みたいな状況になっちゃうわけございますですかね？！と言うか、なってください。お願いします！ー！！いやさ、そう言う状況に進撃中！？ ワタシは是非ともそんな二人をこの網膜に焼き付けたいのでございますですよ！

「落ち着きなつて」

ペシつと。オペラグラスまで使い熱烈覗き隠れ見していたワタシを誰かがはたいてきましたよ。邪魔しないで下さいよ！

「もお、何するんですか誰ですか！？」

プンス力怒りながらワタシが振り返った先にいたのは、本当にいつの間にいたのか、何故だか人気の高い、これまた何故だか生徒会副会長と言う役職の杜若 カキツバタ 八雲 ヤクモ さん。いや、あの、落ち着けて……。貴女が落ち着かれてはいかがでせうか？ 乙女が鼻血だらつだらはマズイと思いますよ？

「うおつと。私としたことが……。ティッシュある？」

はい、どーぞ。ワタシはポケットティッシュを取り出して渡す。というかですね。仮にも女の子なんだからハンカチとティッシュくらいは常備してましようよ。てかてか。人のこと言いながらも自分だって想像がたくましくすぎる方向へ行っちゃてたんですね。

それにしても。生徒会のそれも副会長さんがこんなこととしていてもいいのでしょうかね？ まあ、この人のことだからそんなことはまあったく気にしないのでしょうかけれども。

——て、あああ！ 何てことでしょう！ 八雲さんなんかに構っている間にお二人がインビジブル……。

「なんかとは失礼な。にしてもホントだ。いつの間に？」

キヨキヨ口とお二人の姿を探していると、突然背後に、気配！？

「お二人とも？」

ゾワリと背筋が凍て付くような声音。ギギギと後ろを向くと其処にはホントにいつの間にか鏡さん、鈴音ちゃんの二人が……！いや、あの、鈴音ちゃん。笑顔なのに目が笑ってないですよ？怖いのですが……。幼児が見たらトラウマになりますよ？それに鏡さん？何故に貴女はそんなに愉快そうですか……。

隣を見ると其処にいたはずの八雲さんがいない。どこに行ったのかと見てみれば、そろりそろりと逃げ出そうとしていた。逃がしませんよつ。ワタシだけ怒られるのは嫌です！はい、大きな声で。

「八雲さ〜ん！どこに行くんですかー？」

「うわあ！ばかつ、ばれるだろ！」

いえ、もうばれてます。さあ、仲良く一蓮托生。

「八雲さん？どちらへ行かれるのでしょうか」

「あ、いや、その――」

「こつちにきなさいっ」

ビクッ。有無を言わせぬ勢いとはこのことを言うのでしょうかね。

逆らえない圧力があります。鈴音ちゃん本気で怖い……。

こうしてワタシ達は鈴音ちゃんに怒られました。そりゃもうこっぴどく。罰として宿題で反省文まで出されました。先生ですか……。

しかし！ワタシはめげません諦めません！

「諦めなさい」

声に出ていたようです。

鏡さんは終始笑顔です。止めるとかしてほしかったです。

「いや、自業自得だしね」

ワタシの思考はただ漏れのようにです。

授業終了の鐘が鳴ったときは心底ほっとしましたよ。なぜなら、この人達の次の授業は――。

「ホントにもう——」

「もう、いいじゃない。彼女達だって反省してるって」

「キヨウ様は、あ、いえ——鏡さんは気にしてないんですか？」

「ふふ。まあね。最初から気付いてたし」

「やっぱり、最初から気付いていたのですね。それでいきなりあそこまで大胆に見せつけるように……。嫌では無かったですけど、正直死んじゃうかと思いました。ああいうのは、その、二人きりの時に……ごによごによ。」

「はあ、それにしても……。まさか次が体育だとはね」

隣でキヨウ様が憂鬱そうに言う。そんなキヨウ様の姿もさまになっ
ていてドキリとする。

「あと一限で終わりです。がんばってください」

キヨウ様は本当に体育が嫌いな人なのだ。いや、ほとんどの授業をサボってますけど、体育は特に。私だって本当は授業なんかサボってキヨウさまと一緒にいたいんですけど、せつかく学校に通えているのだし、サボるよりも学園生活をキヨウさまと一緒に楽しみたい。別に今の状況に不満があるわけじゃない。ただ、欲張りなだけ。

キヨウ様は勉強もスポーツも他の人が追従できないくらいに出来ます。現に成績は常に一位を独占してますし。いったい何が不満なのでしょう。

「何でそんなに嫌そうなんですか？」

「いや、ちよつとね……」

聞いても言葉を濁して答えてくれない。だから、私も無理に訊くとはしない。キヨウ様はいつだって必ず、その時になれば話してくれるから。

今私たちは更衣室へと向かっている。八雲さんは先に走って行ってしまった。あの人のことですから何を考えて走って行ったのか、容易に想像できますけど。だからこそあえてのんびりと歩いている

わけ。

ちなみに六花ちゃんはクラスが別。

「今日の体育って何するの？」

「前回と同じです」

「ボク、前回サボってたからわからないんだけど」

「知ってますよ」

「……教えて欲しいな」

「気になるなら毎回ちゃんとサボらずに出席してください」

「むう。それはむづかしい」

そんなことを話していると更衣室につく。私が扉を開けようとすると先に扉が開いて中から体操着に着替えた八雲さんが出てきた。とてもいい笑顔で。

「あれれ？今からお着替え？」

「見て判りませんか？」

「んにや、判るよん。鈴音ちゃん、お着替え手伝ってあげよっか」
「なんですかその笑顔は。下心丸見えです。もう少し隠してください。」

「結構です」

私は予想通りの八雲さんの台詞を冷たく一蹴する。この人は本当に……。呆れるのを通り越して怒るのも通り越して一周して結局呆れてしまう。

「そんなこと言わずにさ」

「しつこいですよ八雲さん。いいかげんにしないと――」

「八雲？」

ほおらキョウ様がお怒りです。怒られて反省してください。……無理ですね。八雲さん反省なんて言葉知りませんし。

「――いいかげんにしとかないとボクが怒るよ。それに、鈴音はボクのなんだ。お着替えとかはボクがしてあげる」

「ちよっ――」

な、なななな何言ってるんですか！たしかに私は身も心もキョウ

様に差し上げ尽くしますけど。まずけどそんなことをこんな所で……。まだ室内には何人か残ってるのに……。嗚呼、もう。ほら何かキヤーキヤー言いながらヒソヒソしてる。

「ええー？ いいじゃんいいじゃん。いつもたくさん色々してるんでしょ？ 少しくらい私にも分けてよ」

「確かにいつもたくさん色々してるし、してもらってるけど、鈴音はボクのなんだから髪の毛一本といえど分けてあげるわけにはいかないな」

うつ……。恥ずかしくて死にそうです。まともに顔を上げていられませんが……。残ってた子達が何か言ってるけど、聞こえない振り聞こえない振り。耳には入ってくるけど意識して気にしないようにする。じゃないと恥ずかしさのあまり死んじゃう。

「ちえ。相変わらず鈴音ちゃんのことになるとケチだな」

「当然だろ。鈴音はボクのだし、ボクは鈴音のものなんだから」

「暑いな。しょうがない。ほかの子にしようかな」

やっと八雲さんは出て行ってくれました。あんな感じでいろんな人に手を出しているのに人気が高いなんて、生徒会副会長だなんてホントに理解できない。この世は不条理で満たされている。少しくらいは抜いたほうがいいと思う。

……キヨウ様の言ってくれたことは嬉しい。私だってキヨウ様を誰かに——ものみたいな言い方でイヤだけど——あげる気は無いし、私をキヨウ様以外にあげる気も無い。それでもそういうことを恥ずかしげもなく堂々と言われると私が恥ずかしい。顔から火が出て死にそう……。

「ん？ どうしたの鈴音。早く着替えないと間に合わないよ」

「へ？ あ、はい……」

俯いたまま、それでもキヨウ様の横で着替える。キヨウさまの隣は私の場所。いつでもどんな時でも。

それでもさっきのが恥ずかしくて俯きながらのろのろと制服を脱いでいると、

「……本当にボクが着替えさせてあげようか？」

キヨウ様は唐突に耳元で優しくそう呟き、ふっ、と息を吹きかけてきた。

私はそれでもう限界だった。ふらりと揺れると恥ずかしさのあまり気を失った。

ありやりや。少し調子に乗りすぎたかな。

なんてね。リンのことだからそろそろ恥ずかしさの臨界達すると思っただけ、ビンゴだね。まったく、いつまでも恥ずかしがりやなところは変わらないなあ。そこがかわいいから全然良いんだけどね。さて、このままにしておくわけにはいかないな。風引いちゃうし。「ねえ、ボクは鈴音を保健室まで連れて行くから、そのこと先生に言っというて」

更衣室内に残っていた女の子達にそう言っていると、彼女達は嬉しそうに返事をしながら走って更衣室を出て行った。校内を走るのは禁止されてるのに。校則無視常習犯な自分のことを棚の一番上にあげてそんなことを思う。

リンは服を脱いだ状態で気を失ってしまったからボクが着させてあげる。それはもう丁寧に。『お着替えはボクがしてあげる』と言うさっきの発言に嘘は無い。現に今してあげてるし。

服を着せ終わるとリンを抱き上げる。言わずもがなお姫様抱っこ。ボクの大切なお姫様はこの状況で起きたらどんな反応をするのかな？きつともものすごく恥ずかしがりながらも、降りようとはしななだろうなあ。恥ずかしがり屋でもこういうのは好きだもんね。

更衣室を出たところで授業開始の鐘が鳴った。これで、もう完璧今日の体育はサボれる。大義名分付きで。

流石というか、お行儀の良いお嬢様学校の生徒達は鐘が鳴る前には各教室に戻っている。そのため、現在廊下を歩いているのはボクだけ。

保健室についたのでスライド式のドアを両手がふさがっているから、行儀悪く足で開け中に入る。ちょうどいいことに誰もいない。そっと、ベットの上に鈴音を優しく横たえる。パイプ椅子を持ってきて鈴音の横に座るとリンの整った美しく可愛い顔を眺める。董色をしたきれいで大きな瞳は、閉じられているため見ることは出来ない。

リンの髪にはボクと同じ色の、紅色の細いリボンが結ばれている。おそろいで、同じモノ。ボクとリンを結ぶアカイト。

「鈴音。キミさえいれば、ボクには他のなにかもがどうでもいいんだ」

きつとキミはそんなことを言うボクを怒るだろうけど。けれど本当のことだよ。

誰もいない密室。唯一の愛しき人へと向けた言葉は空気に溶けた。悪戯したくなるのをガマンして、ボクも寝ることにする。同じ夢が見られるといいのだけれど……。

いつか聞いた、添い寝すれば同じ夢を見れるという言葉信じて、目を、閉じる。

D a i l y l i v e s o f t h e m - 1 (後書き)

この物語は、何があっても必ず最後までやり遂げる気でいます。いや、書き上げます。なるべく間を置かないようにもします。い

Daily lives of them - 2

Daily lives of them - 2

「起きなさい。お二人さん」

放課後である。

保健室では二人の少女が眠っていた。一人はベッドで。もう一人は椅子に座って。

この保健室の主、養護教諭の蔵原クラハラ 霧子キリコは困っていた。寝ていたのはこの学園で知らぬ者のいない有名カップル、雛罌粟 鏡と峰岬 鈴音。高等部からの転入生で転入初日に瞬く間に色々な意味で有名になった二人である。

そろそろ保健室の掃除を担当する生徒達が来てしまう。そうなればその子達を通してこの二人の、相当数存在するファンが押し寄せてくる。静寂と平穏を愛する、と言うより騒がしいのも面倒なのも嫌いな蔵原教諭としては、それだけは本気で勘弁して欲しかった。なんとかしてさっさと起きてもらい出て行ってもらわねば。と、先生として、むしろ養護教諭としてどうかと思うことを本気で考える。しかしこの二人は中々起きてくれない。鼻をつまんだり、頬をペチペチ叩いてみたりもした。それでも起きる気配が無い。そこで蔵原は備え付けの冷蔵庫上段の冷凍室から氷を一個取り出すと鏡の背中に投下した。コレで起きるはず。この方法は蔵原が養護教諭になつてから、ねばすけさんを起こすために度々使用している必殺技なのである。起床率はほぼ100パーセント。

しかし、

「……………」

無念。起きなかった。それどころか無反応だった。必殺技が効かなかったことが、若干悔しい。

次は鈴音にやってみた。鈴音は仰向けで寝ているため胸元に――

と。

「先生。鈴音にそういうこととしていいのはボクだけだよ」

鈴音の制服に手をかけたところで鏡が起きた。その状況は第三者が見たら、倒錯した性癖を持つ養護教諭が生徒の寝込みを襲っているところを、間一髪で側に居た生徒が止めていると見れなくも無いというよりも、どう考えてもそうとしが取れない。

「あ、起きた。今何時かわかってる？」

けれど蔵原はそんなことは一切構わずに、ほっ、としながらそう訊ねた。これで騒がしい事態は防げたはずだ、と。

ここは、女子校である。生徒も教師も女性。そんな状況はまず起きないし、そんな屈折したとり方をする者はほとんど居ないのだ。

まあ、同性しかいない環境において年頃の乙女達は、同性を恋愛の対象とする擬似恋愛が発生したりするのだが。

それでも蔵原はそう言ったものに自分を当てはめないで、脇に置いておく。

鏡は鈴音の腕に巻いてある時計を確認。鏡自身は時計を持っていないらしい。この場所からではちょうど良い具合に壁掛け時計が死角になっていた。

「……あー、もしかして放課後？」

「その通り。わかつたらさっさと出て行く。そろそろ掃除の子達が来るから……。言いたいこと、判るでしょ？」

「まあね」

そう言うつと鏡は欠伸をしながら鈴音を起こしにかかった。

鏡は自分と鈴音が色々な意味で有名なのを、この一年と少しで身をもって知っていた。その事実を本人たちがどう思っているかは別にして。

鏡はゆさゆさと揺さぶるのでも、鼻をつまむでも、頬を叩くでもなく、唇が触れそうになるほどの至近で耳元に優しく呼びかける。

「うん……。あれ？」

程なくして鈴音が起きた。どこかぼんやりとした目で、舌足らず

に呟くように口を開いた。どうやら寝ぼけているらしい。

「おはよ鈴音」

「え、なんで私、ここ……」

「鈴音が倒れたから保健室に運んだの。今は放課後だよ」

鈴音も大分目が覚めてきたらしい。しかしいつまでもぐずぐずしてもらっていると困る。もう間もなくしたら、時間的に掃除担当の子達がくるのだ。

「はい、お二人さん。起きたのなら早いとこ出てってね。騒がしいのはゴメンだから」

蔵原がそう言うと同時に、

「失礼しまーす」

ガラツと扉が開いて三人の生徒達が入ってきた。掃除担当の子達が来てしまったらしい。

蔵原の動きは速かった。瞬時に仕切りのカーテンを閉じて二人の姿を隠したのである。まあ、このままだどうせ掃除するときにはれるのだから、あまり意味は無い。問題を先送りにする気休め。蔵原としては、この隙にどうかして出て行けと、願うしかない。

「ん。ごくろーさん。でも悪いもだけれどもうちよつと待ってもらえる？ まだ具合の悪い子が寝てるから」

普段通りの口調と姿勢。長年の経験か、蔵原はこう言った事態にも対応にも慣れていた。

「放課後なのにですか？あの、その方は大丈夫なんですか？」

少女たちは心配そうに訊ねる。さすが育ちの良いお嬢さん方。知らない生徒のことでも心配になるらしい。優しいことは美德だけれど、今は余計なことは気にせず出て行ってほしい、というのが今の蔵原の正直な気持ちだった。できることなら強引にでも追い出したのだ。

「あ、ああ。大丈夫じゃない？だから――」

「ああー！また授業サボっちゃったんですね！？」

鈴音の悲痛な声がカーテンの向こうから聞こえた。台無しである。

「ああー……」

誤魔化すべく蔵原は何か適当なことを言おうとしたが、何かを言うヒマなどなかった。

「今のつて鈴音先輩よね！」

「もしかして、ご体調を崩して寝ておられるのは鈴音先輩なんですか？」

「大変！でも、鈴音先輩がおられるということは鏡様も！？」

きゃーきゃー騒ぎ出した。

蔵原は「あーあ」と呟き頭を抱えた。放課後と言えど校舎には生徒がかなり残っている。これだけ大声で騒いでしまつては集まるなと言つほうが無理だろう。鏡と、特に大声を出した鈴音のほうに文句を言つてやりたかつたが、蔵原は面倒臭くなりそうなので止めた。「ど、どうしよう……」

「いやあ、どうしようもないんじゃない？」

カーテンの向こうでは、鏡と鈴音も予想できていたのに招いてしまった事態に困っていた。……いや、鏡はそうでもないらしい。どうでもよさげな感がある。口調も投げやりだ。

鏡達のいる場所から保健室を出ようと思えば、位置的にどうしてもカーテンを開けて姿を晒さなければならぬ。人目につかないように脱出するなど不可能だった。——ある一箇所を除いて。

「逃げちゃおっか」

悪戯っぽくそう言つて微笑む鏡。鈴音はすぐに彼女が何をしようとしているか悟った。

「え、ですけど……」

「だいじょーぶ」

少し行儀が悪いが鏡達は窓から保健室を出ることにした。窓の向こうは図書室と校舎に挟まれた中庭。うまくいけば人目にはつかない……はず。

保健室から運良く無事に逃げ出した二人は教室まで鞆を取りに戻ってきていた。

教室には生徒たちが何人か残っていた。その中には八雲と六花の姿。

八雲は二人の姿を見つけるとニヤニヤしながら近寄ってくると、
「授業どころかHRまでサボるとはね。んふふ。で、どうだったの？ お楽しみだったのかな？」

「ただ寝てただけです。誰かさんのせいで」

戻ってくるなりセクハラ質問をしてくる八雲に鈴音は素っ気無く返す。

「だってさ、誰かさん」

八雲はそういつて鏡のほうに視線をやる。すかさず鈴音は言う。

「八雲さんのせいですよ！ 八雲さんがあんなことを言わなければ、しなければ！ …… それよりなんで八雲さんはまだ教室に残ってるんです？」

ニヤニヤしながら鈴音の言葉を聞く八雲に、どんな文句を言っても無駄だと気付きそう訊ねる。

これは当然の質問である。生徒会役員は大抵いつでも仕事がある。こんな所で油を売っているヒマは無いはずなのだ。それに信じられないことだが八雲は副会長。生徒会No.2の彼女に仕事が無いわけが無い。

しかし、八雲はにやりと唇を吊り上げ笑むと、豊かな胸を張って言い切った。

「ふふふ。決まってるじゃないか。仕事するのが嫌だからさ」

こんな人が生徒会に所属しているだけでも心配なのに、よりにもよって副会長とは。とても心配になる。

何でこんな人が生徒会役員でしかも副会長なのだろう。明らかな人選ミスではないだろうか。鈴音は心底からそう思わずにはいられなかった。

「大丈夫だよ鈴音ちゃん。さっきワタシが通報しといたから」

そんな鈴音に六花がVサインと共にそう言った。誇らしげかつ愉快げに。

「通報？」

「ちよつ、六花ちゃん！何てことを……」

首をかしげる鈴音に、目に見えてうるたえだす八雲。正直、八雲がここまでうるたえるのは珍しい。

「ワタシだってこんなことをするのは辛いのです。けれど平穩無事な学園生活を送るためにも、生徒会副会長さまにはちゃんとして仕事をしていただきたいのですよ。ええ、決して数時間前にワタシを見捨てて逃げ出そうとしたのを恨んでのことではないのです」

微妙な早口でそう言つて、ハンカチで目尻を拭うマネをする。表情や仕草が非常にわざとらしいが、仕様だろう。

「うう。六花ちゃん、私たちは同士だと思つてたのに……」

よよよ、と泣きまねをする八雲。はつきり言つて長身で、しかもかつこいい部類に入る女性がそんなことをしても全然似合わないし、ある意味不気味だ。

「同士だからこそ心を鬼にしたのです」

わかつてください、と背を向けて悲哀を感じさせる演技を続ける。やっぱりどうしてもわざとらしい。

八雲と六花がそんなくさい三文芝居をしている間、鏡は、

（早く帰りたいなあ）

とか思っていた。けれど鈴音はそれなりに楽しそうにしているの
で、そんなことは言わずに微笑みながら眺めている。

話をふられれば反応するが、それ以外はこうして一歩引いて眺
めているのが鏡のスタンスだ。

鏡は鈴音以外とはあまり関ろうとはしない。鏡にとっては鈴音こ
そが全てであり、他のどのようなことも大して興味を湧かせるに至
らないのである。

鈴音もそのことを知っているし、知っていてそのことに何かを言
うことはあまりしない。鏡も鈴音も互いのことはよく理解している

のだ。

「さて、私はそろそろ逃げるとしよう。何時までもここに居ると、こつわあい会計さんが来てしまう」

話をさつさと切り上げて、八雲はそんなことをのたまいながら逃走を図ろうとする。

「だ・れ・が・怖いのですか？」

いつの間にか扉のところにおかつぱの少女がいた。口調からは押さえきれない怒りが滲んでいる。

「うわあ！ もう来てる！」

逃げ出そうと後ろを向いた所に居た少女に、八雲は引きつった顔でそう叫ぶ。対する少女の顔は無然とした無表情である。それが逆に怒りを表している。と、八雲は知っていた。

「誰が怖いのかは道すがら聞くとして、さつさとお仕事をしに行きますよ。お姉様のお仕事は溜まりに溜まっているのですからね」

「いたいたい！ ちゃんと歩くから！ 自分の足で行くから耳引っ張らないでえ」

「そう言つてすぐ逃げ出されてはたまりません」

「逃げないから」

「信じられません」

「ひどい」

「普段のご自分の行動がこういうところで影響されるのです。自業自得です」

八雲の悲痛な言い分はおかつぱ少女にすげなくあしらわれ、小柄な子が大きな子の耳を引っ張り歩くという珍妙な状態で連れて行かれた。

流石の鏡もぼかんとしながらそれを見送っていた。

「今のつて……？」

「えーとですね。今の子は生徒会の会計で一年生の櫻井都香さん。気付いているとは思いますが八雲さんの妹です」

「今のを見ていると、逆ね」

「まあ……、人それぞれですよ」

妹とは端的に言えば寮や部活等での一人につき一人だけのお世話役みたいなもの。本当は他の呼び方が合ったのだが、何かに影響されたのか、それとも自然となのか、あるいは両方か、世話役を妹。そのお手本となり指導をする人をお姉様と呼ぶようになった。

言うまでも無いことだが鏡と鈴音は妹も姉もいない。そしてこの二人の関係を知っているために妹にしようとする者も妹になろうとする者もいない。

六花は姉も妹も持つ気は無いらしい。まあ、こんな娘の妹になる人も姉になる人も、かなりの苦勞を強いられることだろう。と言うのは鈴音と鏡の正直な感想。

「ところで、なんで六花ちゃんはここにいるの？ 部活は？」

「サボり、ですっ」

ささやかな胸をはって堂々とそう宣言する。

「コラ」

「冗談ですよ。実はですね、今日はお二人に取材をと」

ポケットからメモ帳とシャーペンを取り出す。

六花は新聞部に所属している。

新聞部の主な活動は言わずもがな校内新聞である。そのため六花は校内のことに色々詳しい。教師の弱みや生徒一人一人のアレやコレにも。部活動と言う範疇から外れたその越権ぶりもそうだが、驚くべきはそのことを上手く隠していることである。本人の気付けぬうちに聞き出しそつと胸のうちに秘め、気付かれぬうちに使ったり使わなかったり……。実は校内でもかなり底の知れない怖い存在なのだ。見た目からは想像できないのだが。

まあ、そんな明らかにも他者に不快感や恐怖感を与えるような行為、そう滅多にしないのだが。

それでも、それを知っていながら普通に付き合う鏡や鈴音、八雲もある意味ではすごい。ちなみに鏡と鈴音は美術部だが滅多に顔は出さない。鈴音に他人をとやかく言う資格は無いのだ。

「取材の件なら前に断ったと思うけど……」

「はい。ですから今回はワタシがお二人に取材を頼みにきたのですよ」

前回は新聞部の部長自ら出向いてきた。そして必至の懇願も空しく、即答で断られた。そこで今回は二人と仲の良い六花を遣わせたらしい。

しかし――

「ゴメンね。それでもダメなものはダメ」

「むむ。じゃあ鏡さん！貴女はどうでしやう？」

「鈴音と同じだよ。ダメ」

「うゝむむ。手強いですね」

そう言って考え込む六花。すると鏡が

「そう言えばさ。前回の時も思ってたけど、何の取材？」

「あれね？ 前回部長は言わなかったんですか？」

「ううん。言ってたけど……。鏡さん聞いてなかったの？」

「そうみたいだね」

「えつとですね。まあ、簡単に言えばお二人の馴れ初めとかそういうのを教えて下さいな。と言ったところですよ」

部長の時とは違い、えらく簡単かつダイレクトな言い方をしたものである。

二人は外部からの転入生だ。そして転入と同時に二人がそういう関係であることを公にした。特に鏡が。積極的かつダイレクトに。

「ああ、そういうこと。残念だけど、それは言えないんだ。諦めて」

即答かつ取り付く島も無い鏡の一言。

「うーん。まあ仕方在りませんね。しょうがない。ワタシは部長にそう伝えますか」

「ゴメンね」

「いえいえ。ではお二人とも、さようならっ」

六花はそう言つと教室を出て行った。最初から取材をすることに乗り気ではなかったらしい。六花にしては珍しく、すんなりと諦め

た。普段であれば知りたいことがあればそれを知るまで、すっぱんのように噛み付いて放さないと言つのに。

「鈴音。早く帰ろう？ボク、そろそろ――」

途端に、鈴音の耳元で甘えるような口調でそう言う鏡。息が心なしか艶っぽく、荒い。

「そうですね。じゃあ帰りましょうか」

鈴音は微笑みながらそう言った。

鏡と鈴音は今日も部活には出ないようである。

Daily lives of them - 3

Daily lives of them - 3

「ねえ、リン……」

ここは寮舎の一室。寮は二人一部屋で鏡と鈴音は同じ部屋だった。二人の姿は煽情的だ。鏡も鈴音も共に下着を着けずに薄いブラウス一枚だけ。ボタンも留めていない。

鏡はベッドに腰掛けている鈴音に、壊れ易い繊細なものでも扱うかのようにそつ、と触れるとそのまま押し倒す。鈴音は抵抗しない。ただ。されるままにしておく。

「ボク、もう我慢できない……」

「いい、ですよ」

夜である。二人はすでに夕食も入浴も済ませている。だから後は寝るだけ……とはいかない。これは毎夜行われている行為。壁で外と隔てられた部屋という結界。その内のベッドの上という聖域で行われる、二人にとっての重要な儀式。

「んっ——」

「——ん、う」

鏡は鈴音とやわらかな唇を重ねあうと、鈴音のブラウスを片側だけはだけさせる。鈴音の白い、まさに白磁のような、とても言うべき肌があらわになる。

「……いい？」

「ええ……」

たつぷりと深い接吻を堪能した後、子供が母に求めるような声で切なげに問う鏡に、鈴音は優しく頷いた。

鏡は鈴音の肩甲骨のあたりに軽くキスをする。鈴音は鏡の低い体温と、それとは逆の熱い唇の感触にピクリ、と僅かに反応し艶かし

い声を出す。

鏡はそのままぷつり、と自らの犬歯で鈴音の肌に小さな穴をあけると、そこから僅かに出てくる血液を愛しげに舐めとる。流れ出た少量の血を舐めとったあと、自らのあけた穴に再びキスをするように唇をつける。そして、ちよつとづつ、たっぷりと時間をかけて血を飲んでいく。

鏡がそういう風になっているのか、鈴音には痛みも不快感も無かった。その代わりにか絶えず言いようの無い快感が襲ってくる。鈴音は漏れそうになる淫らな声を堪えるために唇を噛んで絶えていたが、時折切なげな声がどうしても漏れ出る。

鏡は自らの左手と鈴音の右手を絡ませ、右手で自分のとそれとは違い豊満な胸をブラウスの中に手を入れ、手馴れた手つきで弄ぶ。

鈴音は空いている左手でシーツを握り締め何かに耐えるようにしている。

鏡の喉がコクリコクリと鳴り、ちよつとづつちよつとづつ赤い雫を飲んでいく。心なしか鏡の頬は紅潮し、息も荒い。

「——っ、うん」

鈴音の口からはもはやほとんど耐え切れずに快感からくる声が発せられている。

たっぷりと時間をかけて鈴音の血を飲み、最後に一舐めすると鏡はやつと鈴音の肌から唇を離れた。鏡の口から唾液と血の混じった糸が引く。鈴音は額に玉の汗をつけていた。

「……満足、できましたか？」

息を切らせながら妙に色っぽい声で問い掛ける鈴音。問われた鏡のほうは瞳がどこか定まっておらず、子供のような舌足らず口調で短く呟いた。

「……まだ、ほしい」

そのまま鏡は鈴音の血でルージユを引いた唇を重ねる。熱く、深く、長いキス。

「ん、んっ——」

「——う、うん」

鏡がまだ欲しいのは鈴音の血ではなく、鈴音であるらしい。そして鈴音も鏡を欲している。

深く熱烈な接吻を終えると、今度は鈴音の首筋に軽く舌を這わせる。

「——やつ」

鈴音はそこが敏感なのか今までとは違う反応を示した。鏡もそれを熟知しているためか、ゆっくりと首筋に線を引く。そのまま右手で豊かな胸を強弱を付けながら揉みしだく。左手では鈴音の下半身を優しく淫らな手つきで這わせている。

鈴音はシーツを握り締めて鏡の愛撫にされるがままになっている。「リン。また胸が大きくなったんじゃない？」

「……っ、ああ、そ、んな——っこと」

鈴音は波のようにやってくる快感に震えながら恥ずかしげに否定する。

「フフ。ウソは、だあめ」

鏡は言う。鈴音の豊沃な山の先端をきゅっ、とつまむ。

「ああっ——！」

いきなりの強い責めに鈴音は大きく身体を仰け反らせた。

「うゝん……。ボクは全然大きくならないのになあ」

鏡は起き上がると苦笑しながらも不満そうに、果てて目じりに涙を浮かばせ荒い息を繰り返す鈴音の、肥沃な二つの山を眺めながら、自分の小さなそれを触る。

鈴音の身体は女性らしい凹凸のはっきりした身体をしている。対して、鏡はスレンダーな、中性的な体つきをしている。それでも出ているところはちゃんと出ているのだが、同年代の少女達に比べると劣っていると言わざるを得ない。

「な・ら、」

「あっ」

身体中に玉の汗を浮かばせ目じりに涙を浮かべたまま、鈴音は紅

潮した顔に無邪気な笑みを浮かべて鏡を不意打ちで押し倒した。

「私が揉んで差し上げます」

そう宣言しながら鏡の小振りな胸を優しく愛撫する。やはり言うべきか、鈴音も馴れた手つきである。

「は、んうつ」

鈴音の絶妙なタッチに鏡はたまらず気持ちよさげな声を出す。

汗で肌に張り付き透けている、はだけた白いブラウスがとても煽情的だ。鏡にしろ、鈴音にしろ。

一転して立場の逆転した二人の戯れ、夜の秘め事は疲れてどちらかが眠りにつくまで続く。

一方、時間は少し戻り、ここは図書館の中にある生徒会室。

図書館はその通り一種の『館』のようであり、六階建てで地下には希少価値の高い古書が収められている。が、それを知る者は教師の一握りと生徒会でも会長と会長が任命した役員だけである。

図書館の外観は中世欧羅巴あたりのお城を彷彿とさせるモノであり、独特の趣と清浄さを漂わせている。通称『女神の杜』。

その最上階たる六階に生徒会室はある。いや、六階の全てが生徒会室であると言ったほうがより正しいだろう。

室内にあるのはいずれも木で出来たアンティークな机に椅子、本棚。メインである会室の隣には給水室もあり、会室の奥の部屋には会長室がある。

生徒会室には現在二人の生徒会役員生徒の姿がある。一人は黙々と書類を片付けていくおかつぱの少女。もう一人は気だるげにたまった仕事をちまちま片付けている長身のモデルのようなプロポーションの少女。

「わーん。もう嫌だー！ 眠いよー」

かれこれ二桁を軽く越した台詞が長身の少女から発せられる。文

字通りの泣き言である。肩口のあたりで適当に切られたショートカットが泣き言と共に踊る。

「はいはい。口を動かすヒマがあつたら手を動かしましょうね。お姉様」

おかっぱの少女はそんな泣き言に冷たくそう返す。

ちなみに限時刻は22時を回っている。シスターや寮長には許可を取って居残りをしているので問題は無い。いや、

「……おにー」

「誰がですか」

都香はふう、と一息ついて手を止めるとだらしなく机にだれているお姉様——八雲を見て何度目かの溜め息をつく。

問題は、駄々っ子のような八雲そのものだろうか。

「まったく、誰の所為だと思っているのですか。これは全部お姉様の今までサボってきた分の仕事なんですよ。それだつてわたしがほとんど片付けて、お姉様はちょっとしかやってないじゃないですか」「だって、多いんだもん」

子供みたいな言い訳をする。

ホントになんでこんな人が生徒会のそれも副会長なんかをしているのだろう。たしか、聞く話によると前会長がじきじきに任命されたとか……。明らかな人選ミスではないだろうか。都香にはそう考えられてしかたがない。

都香も理解してはいるのだ。この杜若八雲という自らのお姉様が有能であることくらいは。そうでなければこんな人の妹にはならない。

けれどどうも怠けクセというかサボリクセというか、そういうのがある気がする。いや、実際あるのだろう。いくら有能でもこれでは生徒会という責任ある仕事は向かないのではないだろうか。そう思ってしまう。

そつえば。

ふと、都香は思い出す。自分がこの人の妹になったのは何故だっ

たか。考えてみると以前の八雲は、少なくとも生徒会の中ではどこか冷たい雰囲気を放ちながらも、副会長としての仕事をきちんとこなしていた。現在もなお空席の二名必要な書記、会計の二人分の仕事も八雲が片付けていた。それも全て迅速に。その不満一つ漏らさず全てを淡々とこなす冷たい雰囲気はこの人の役に立ちたくて、妹になったのではなかったか。

「ん？どしたの都香。なんかわかんないとこあった？」

「……いえ」

考え事に夢中で手の止まっていた都香を八雲が心配そうに声をかける。

考えてみればたしかわたしが妹になってからではないだろうか。

お姉様が今のようになってしまったのは。

考えれば考えるほどそうとしか思えなくなってくる。

自分が重荷になって、それでお姉様は生徒会の仕事嫌になつてサボっているのではないだろうか、と。

その考えに至ると八雲に申し訳ない気持ちとかいろんな気持ちがごちゃ混ぜになって、都香はまともな思考が出来なくなってきた。

櫻井 都香という少女は根が真面目すぎる分一度思い込むと收拾がつかなくなる傾向があった。

考えれば考えるほど自分の所為に思えてくる思考にいつしか、ポタ、ポタ……と、都香の頬を伝った涙が書類を濡らしていく。自分でもわからないうちに涙が出てきていた。

——嗚呼、役に立ちたかったのに、これでは……。

そう考え、いけないと思っても涙は止まらない。

「都香、どうしたの!？」

がたん、と音を立てて八雲は都香に駆け寄る。

「どうしたのさ?——ああ、もうこんな時にハンカチが無い!」

突然のことに八雲は軽くパニック状態。

ハンカチを探すも結局無かったため八雲は、指で都香の涙を拭いてやる。それに驚いて都香は顔を上げる。見れば八雲は指についた

都香の涙を舐めとっていた。

「しよっぱ。……で、どうしたのさ。何か悩み事？」

都香はしばらくの沈黙の後、胸中に沸いた疑問を投げかけた。

「……わたしのせいですか？」

突然のわけのわからない質問に八雲は首を傾げた。

「わたしが、妹なんかになつたから……、それが重荷になつて、生徒会も嫌になつたんですか？」

真剣な面持ちで思いもよらぬ質問を投げかけられた八雲は、一瞬息を飲んだ後、なぜ都香がそんな考えに至つたかを思い、目線を椅子に座っている都香にあわせて言った。

「違つよ。ごめん。そんな風に思わせてたんだ。ホントにゴメン」

「けど——」

都香は思っていることを、その考えをぶつけた。黙ってそれを聞き終わるとやはり八雲は否定した。

「違つよ。あの時はさ、まあ、色々あつてむしゃくしゃしてたから。それでやつあたり気味に冷たくなって、忘れたくて仕事に取り組んでたんだ。けどね、そんな私に都香みたいな子が妹になりたいって役に立ちたいって言うてくれた時はとても嬉しかった。最初は鬱陶しいと思つてたんだけどね。けど、すぐマジメな姿に惹かれてね。仕事なんかよりも、都香と一緒にいたいなあ、って思うようになったんだよ。けどさ、仕事は毎日たくさんあるし、いまだに私のほうに書記と総務の仕事が回ってくるし……。このままだと都香と一緒にの——二人きりの時間なんてほとんど無いじゃん。って思つたらさ。逃げちゃえ、って。マジメな都香のことだから、多分、サボつてたら仕事をさせるために探すだらうなつて思つて」

その長い告白を都香は黙って聞いていた。表面上はいつものマジメな顔だが、心中ではとても安堵していた。

「——私もまだまだ子供だね。好きな子にいじわるして気をひかせちゃえ。みたいな心理がはたらいてたのかも。けど、そんなに思い悩んでるなんて知らなかった。ホントにゴメンね」

八雲はそう言つて話を終えると、頭を下げた。ごめん、と。

「あ、頭を上げてください！」

「ゆるして、くれる？」

不安そうに言う八雲に都香は「許しますから顔を上げてください」と必死に言つた。こう言うことになれていないらしい。

「あの、本当にわたしはお姉様の重荷ではないのですよね？」

それでも不安なのかそういう都香に、八雲は何かを思いついた、閃いたような顔になる。

「信じられないなら、証拠見せようか？」

その口調はどこか楽しげで、いたずらっ子が何かを思いついたようでもあつた。

「証拠？」

「そ。証拠。私が都香を重荷なんかに思つてなくて、むしろ大好きだつて言う証拠」

訝しげに聞き返す都香に、八雲は笑いながらそう答えた。

よくわかつていない様子の都香に八雲は、流れるような動作ですばやく、それでいて自然に唇を重ねた。

突然のことに都香は全く動けず、目を見開いて頭の中が真っ白になつた。

たつぷり十秒くらいそうしてから八雲は唇を離れた。

「えへへ。ふぁーすときす」

頬を朱に染めて、照れくさそうにそう言う八雲に対し都香は、

「――」

ぐらりと傾いたかと思うと椅子から転げ落ちた。

「わあ！み、都香！？大丈夫！？」

突然のことに都香は気を失つて倒れたらしい。

八雲がその後再びパニックに陥つたのは言うまでも無い。

さらに蛇足として、パニック状態の八雲は纏められた書類を床にぶちまけた。

彼女達の一日はこうしてそれぞれに閉じていく。

ちなみに冬原六花は

「——えーと……、今後ワタシ、冬原六花は、隠れて覗き見る際にばれないように、細心の——」

健気にも鈴音に出された反省文をがんばって書いていた。

「ねえ、まだ寝ないのー？」

「うーと、……。すみませんー。もう少しで終わります」

同室の子に迷惑をかけないように、電気はスタンドだけにしているが気になるらしい。謝りながら書くスピードを上げる。

「あーと……、しかし、あの後どという展開になる予定だったのが、大変気になり——」

本人はまじめに書いているのかもしれないが、どう考えても『反省文』でないことは明白だろう。

本気でこれを鈴音に提出する気だろうか？また怒らせないことを願うばかりである。

……………無理か。

D a i l y l i v e s o f t h e m - 4

D a i l y l i v e s o f t h e m - 4

小さな女の子が泣いている。

女の子は独りぼっちだ。

寂しいと、ずっと泣いている。

周りに人はいる。けれど、誰も気に止めない。

女の子だけ見えていないかのよう。存在していても空気と同じ扱い。

——ああ、これは……。私だ。
幼いころの私だ。

突然、両親も、友達も皆いなくなつて、知らない場所に連れて行かれて、一人で寂しくて、いつも泣いていた。私だ。

『どうしたの？』

誰も気にもとめなかった女の子——私に、声をかけてくれた人がいた。

優しい声だった。

『どうして、泣いているの？』

泣き止まない私にそう言つて優しく声をかけてくれる。

泣きながら顔を上げると、そこには幼いながらも整った顔立ちをした、キレイな銀髪の女の子がいた。

『だれ？』

私が泣きながら訊くと、少女は笑顔で答えた。

『ボクはね、かがみつて言うの。キミは？』

ああ、そうだ。この時だ。この時にキョウ様と出逢つて、それ以来ずっと私の——寂しがる私の側にいてくれたんだ。

『ひっく、……すすね』

しゃくりあげながら言つた私の名前を、彼女はきれいな名前だね、

って言ってくれたんだ。

嬉しかった。目の前の少女は泣いて言葉に詰っても、ちゃんと聞いてくれた。優しく微笑んでいてくれた。とてもあたたかくて、やさしかった。

『どうして泣いていたの？』

『お、お父さんも、お母さん、も……。みんな、いなくなっちゃったの』

言っていると涙が溢れ出した。ぼろぼろと涙が止めどなく流れて、目の前の少女顔がにじんだ。

『つく……。わ、わたし、ひとりぼっちに、な、っちゃったの』

泣きながらそういう私を、彼女は抱きしめてくれた。強く強く。

少女の体温はほんの少しひんやりとしていた。

『だいじょうぶ。もう、泣かないで』

『……。え？』

『独りぼっちじゃないよ。ボクが、すずねちゃんのお姉ちゃんになつてあげるから』

彼女はいきなりそんなことを言った。

『おねえ、ちゃん？』

『そう。……。いや？』

嫌じゃなかった。この女の子が自分のお姉ちゃんになってくれるのなら、もう、独りぼっちじゃないと、一人ぼっちにはならないと、何故だか判った。そう思った。確信した。この女の子はきっと、何時だって私の側にいてくれる。

『ううん！ いやじゃない！』

いつのまにか涙の引いていた私は、少女に一生懸命にそう言った。『ほんと？』

『うん！』

少女は、よかった。と微笑んだ。その笑顔がやさしくて、きれいで、かわいくて。私はすぐに女の子のことが好きになった。

『……。かがみお姉ちゃん』

私はお姉ちゃんにぎゅうつ、と抱きついた。最初驚いたみたいだったけどお姉ちゃんもぎゅうつ、と抱き返してくれた。もう、ひとりぼっちじゃないよ、って。

うれしくて、また泣いた。

「……う、ん」

小鳥の囀りと朝の陽の光に、私は目が覚めた。

目が覚めたといつてもしばらくはぼくっ、としていた。ちゃんと目が覚めたのはそれから五分後だった。

見れば私もキヨウ様も裸だった。何も身に付けていない。シーツも乱れていた。どうやら果てて二人ともそのまま寝てしまったらしい。珍しいことではないとは言え、むしろ茶飯事とは言え、どうしてもそのときのことを思い出してしまい恥ずかしくなる。

私は急いで下着と制服を身に付けると、顔を洗った。鏡面に映った自分は耳の先まで真っ赤だった。

キヨウ様はいつものように目覚める気配が無い。朝はすごく弱いのだ。

私はキヨウ様とお揃いの紅いリボンを髪の一房に結びながら声をかける。

「キヨウ様、起きてください」

ひんやりとしたキヨウ様のきれいな肌に触れ、揺らす。

「ううん」

そんな声を漏らしながらキヨウ様は丸くなってしまった。朝のキヨウ様は常とは違ってすごく可愛い。

「キヨウ様」

だからと言っていつまでも眺めているわけにはいかない。ホントは起きるまで朝の眠っている可愛いキヨウ様を眺めていたり、ちよっただけ悪戯してみたいけれど、ぐっと思える。

以前そんなことをしていたら色々あって、結局丸一日学校をサボってしまふはめになった。先生に言い訳するのにすごく苦労したのを覚えている。

「起きてください」

「やあだあ」

いつもとは違う可愛らしく幼げな口調。……こういうギャップがたまらない。

——ハッ！いけない。危うく湧き上がる欲望のままに行動してしまつところでした。

そんな自分を恥じながら、湧き上がる欲望を我慢しながらキョウ様を起こす。

「朝ですよ。ご飯食べ損ねちゃいますよ」

朝食は寮内の食堂で取る。食堂は朝は6時から7時40分までしか受け付けていない。現時刻は7時を少し回ったばかり。実際に閉じるのは8時だが、40分を過ぎてしまつと朝食は取れない。あまり余裕はないのだ。

「うつ……」

「え、——」

ゆさゆさと揺らしていた私の腕をキョウ様がいきなり引つ張る。

「きゃっ」

突然のことに倒れこむ。ぎりぎりでキョウ様の上に倒れこむことは無かった。

「あたたかい……」

キョウ様は私の腕を抱え込むようにしている。体勢的に起き上がるに起き上がれない。私の腕がキョウ様の小振りな胸に当たっている。

——『私が揉んで差し上げます』

夜の一場面が思い出される。

私はキョウ様を押し倒し馬乗りになりキョウ様の胸を揉みあげていた。強弱を付けたり色々していた。キョウ様の反応が楽しくて可

愛らしくて、弄んでいたことが思い出される。頬を紅潮させ目じりに涙を浮かべながら切なげな、気持ちよさげな声をあげていたキヨウ様。

私はブンブンと頭を振る。せつかく整えた髪がぐしゃぐしゃになった。けど気にしない。もお、恥ずかしいったら。

「――くすくす。昨夜はとても楽しかったね」

抑えたような笑い声と共にいきなりそんな台詞が聞こえた。見ると何時の間に起きていたのか、昨夜のことを思い出して取り乱す私を、キヨウ様が楽しげに眺めていた。

「昨日のリンは激しかったなあ」

しみじみとそう呟くキヨウ様。

かあつ。と顔が赤くなっていくのが自分でもわかった。

「おはよ。今日も可愛いね、リン」

それがキヨウ様の朝のあいさつだった。私は顔を俯けたまま声が出なかった。

――キヨウ様、お人が悪いです……。

結局、朝食は取れないまま私とキヨウ様は寮を出、校舎へと石畳を歩いている。

「ごめんね。そろそろ機嫌直してよ」

「知りません」

何度目か判らないキヨウ様の謝罪の気持ちに欠けている言葉に、ブイツと顔を背ける。

別に私は本気で怒っているわけじゃない。キヨウ様が朝に弱いことも、いたずらっ子のような悪癖を持っていることも熟知している。けれど、こうやって怒っているようなポーズでもしていないと、昨夜のことをありありと思い出してしまいそうなのだ。それは、ちよつとどころでなくまずい。

キヨウ様もそのことをちゃんと理解している。そんなことがわか

らないほど私とキヨウ様の付き合いは短くないし、浅い関係でもない。

そんなことを考えていると、ふと夢のことを思い出す。なんだってあのときの事を夢に見たのだろう。夢なのだからそう言うこともあるかもしれないが、何故だか私には気になった。これは何か起こるという伏線なのだろうか。

「そうだ！」

キヨウ様の何かを思いついたような声に考え事を止める。

「ねえ、鈴音。今日は久々に部活に出よう」

「珍しいですね。鏡さんがご自分からそう言うなんて」

私とキヨウ様は一応美術部に所属している。この学園では部に参加しないということは認められない。もし気に入った部活なり同好会なりがなければ生徒会に申請すればいい。よほどふざけたもので無ければたいして受理される。ただし一人でも受理されるが三週間以内に、規定である六人に満たない場合、それは白紙にされる。

「うん。ちよつとね」

キヨウ様と私は授業を終えると大抵すぐに寮の自室に戻って二人きりでお茶していたり、カテドラル傍にある花園や図書館裏でデートをしている。キヨウ様が自ら部活にでよう、などと言うのは大変珍しい。

「鈴音、いや？」

「いいえ。いいですよ。ご自分からそう言うなんて大変珍しいです。すこし、うれしいです」

本心だ。お茶したりデートしたりするのもいいけど、たまには部活に出るのもいい。

放課後のことを思い、待ち遠しくなる。いつの間にか私は昨夜のことを気にしないようになり、夢のことも忘れた。

「鈴音ちゃんっ、鏡さんっ」

後ろから呼び声がしたので振り返ると六花ちゃんが走ってきていた。

「おはようございますっ」

「おはよう。六花ちゃん」

「おはよ」

六花ちゃんは大きく深呼吸すると、鞆の中から5枚の原稿用紙を取り出した。

「ちゃーんと反省文書いてきたんですよ。さあどうぞ」

ああ、本気にしてたんだ。そう思いながらもそれを口にするのは悪いような気がするので、渡された原稿用紙を黙って読みながら足を進める。

——が、すぐに止まる。

「六花ちゃん？」

「はい？」

なんですか？と六花ちゃん。どうやらわかってないらしい。ホントにこの子は……。

「これはなに？」

「なにつて……。反省文ですよ。酷いですね。忘れたんですか？」

「酷いのは貴女の内容よっ！」

思わずそう怒鳴る。

この自称反省文はどこをどう呼んでも感想文である。反省の色が全く見えない。いや、感想文ですらない。後半は妄想文になっている。

どれどれ、とか言いながらキョウ様は私の手から原稿用紙を取り読んでいる。

「あつはは。さすがは六花ちゃんだ」

なぜかそう言って笑い出した。笑い事じゃありませんよ。

六花ちゃんは自分が何故怒られ笑われているかわかっていない様子だ。はあ、どうしたものでしょうね。

このあと疲れた気分になりながら席に着くと、いつも通りに私と

キヨウ様の机の中には手紙が。

特にキヨウ様宛ての手紙の多いこと。

女子ばかりの学校においてキヨウ様のような中性的な美人は、擬似恋愛の対象になりやすい。それに加え成績や運動方面も抜群。素行が少し悪いがお嬢様たちにはそこがまたたまらないのかもしれない。そして、キヨウ様はちゃんと全部読んでから一人一人に断りを継げる。名前のないものはどうしようもないにしても。

私とキヨウ様の関係を知っていても、こうして手紙を出してくる人は多いのだ。ただ想いを伝えるだけでもいいらしい。

私もキヨウ様もそれをどうこう言うつもりは無い。それで本人が納得するのならそれでいい。私もキヨウ様も他の誰かを好きになることはないのだから。

ちなみに八雲さんも人気がある。長身とモデルのようなプロポーション。明るい性格や面倒見の良さなど、他にも色々評判があるが、特に下級生達から人気が高い。ただ、

「いやあ、困ったなあ。こんなに貰っても皆とは付き合えないよね。うーんどうにかして夢のハーレム天国に出来ないかなあ」

とか言ってるのはどうかと思うけれど。

八雲さんは本気で年下の女の子が好きらしい。前に自分で言っていた。そして大の男嫌いでもある。

しかし、その八雲さんが今日はいない。いつもは朝早くから教室にいるのだけれど……。

「たまってる仕事でもやらされてるんじゃない？」

キヨウ様がどうでもよさげに言う。

ありえそうだ。昨日の子、確か櫻井さんだっけ。マジメそうだなあ。

八雲さんはHRギリギリに教室にきた。酷く疲れたような様子で。

そうして、一日が始まる。

Daily lives of them - 5

Daily lives of them - 5

「あらあら。珍しい人が来てるわね？」

放課後。第一美術室。

そう言つてボクとリンにやわらかな笑顔を向けてくるのは美術部長、稲沢^{イナザワ} 李里^{リサト}。笑顔以外の表情を知らないんじゃないかと思うくらいにいつも笑顔でいる。この人との付きあいも一年近くになるが、笑顔以外の表情を見たことがない。何故か語尾を疑問形にするクセがある。

「こんにちは部長」

「すみません部長。いつも勝手に」

ヒラヒラと挨拶するボクと違ってリンは申し訳なさそうに言う。そんなに申し訳なさそうにしないで、この人は気にしないのに。いいよ。皆適当だし？」

部長が言う通り美術部員の参加率はまばらだ。美術を本気で好きな人は、部長を含めいつも美術部に顔を出しているが、そうでないものは各自参加したいときに参加している。部長もそのことに何を言つてもないので美術室にいるのはいつも大抵7人くらいだ。今もそれくらい。ボクもリンも一度として全員がそろっているのを見たことが無い。そもそも部員の総数がわからない。

その美術好きな女の子達はボクたちが来ていることに気付いたらしく何事かヒソヒソと言いつ合っている。

「それで？ 今日はどうするの？」

「そうですね。人物画でも描こうかなって」

「そう？ また二人で？」

「たまには誰か違う子を描こうかと」

これはお昼に二人で話して決めた。いつもいつも互いに描き合う

ばっかりなのは変わり映えが無いし、そんなのは二人きりの時に好きにだけできるとリンが主張したからだ。ボクはリンを描きたかつたんだけど、リンがそうしたいと言っただけならボクもそれに倣おうと思う。たまには、そんなのもいいだろう。

「ふうん？ 珍しいね？」

そう言うとか何を閃いたような顔になり（笑顔だけど）こちらを伺っていた部員達に嬉々として声をかけた。なんとなく嫌な予感がある。そして、李里部長はこちらの嫌な予感をいつも裏切らない。

「この二人が貴女達の誰かを描きたいって？」

きゃーとか黄色い歓声を上げながら、わたしがわたしが、と詰め寄ってくる美術部員。適当に選ばうと思ったのに……。嫌な予感の中ってしまった。

「ちよつと、部長！」

リンが何かを言おうとしたが、部長はさっさと退避していた。

「がんばるのよ、みんな？」

聖母のような優しさと温かさを含んだ声でそう言い、笑顔で傍観に徹している。まったく、たきつけないで欲しい……。

「鏡さま。よろしければあたしをつ！」「鈴音先輩！あたしを描いて！」「鏡先輩お願いします！」「おねがしますう鈴音さま」等々。

誰でもいいのになあ……。正直にそう思う。リンはどうしよう困っている風であった。リンは適当に決めるなんてことはしたくないのだろう。

自慢ではないがボクもリンも絵画は胸を張れるくらいには上手いと思う。けど、だからと言ってここまで描いて欲しいものだろうか？

なんにしる決めないことにはどうしようもない。うーん。適当当。

「……ね。キミ、名前は？」

「え、あ、はいっ！ど、堂面ドウメン 詩織シオリです」

ボクが選んだのは髪を緩くおさげにしている瞳のパッチリした、
なんとなく雰囲気の子犬みたいな少女。

「詩織ちゃん。描かせてもらえる？」

「は、はい！むしろこちらからお願いしたいって言うかお願いして
ましたのでわたくしなんかでよろしければ是非にお願いします！」

マシガンのように喋る子だ。頬を朱に染めなが一生懸命に話す
感じが見てて微笑ましい。うん。嫌いじゃない。好感が持てるね。

「あ、いいなあ詩織」「何で詩織があゝ」等々残念そうに他の子た
ちが言う。

「次の機会には君たち描いてあげるから、今日は我慢してね」

しかたないので苦笑しながらそう言うボクに「絶対ですよ」とか
「鏡さま優しい」だとか言っているけど、ボクは胸中でこう思わず
にはいられない。

（次があればね）
と。

ボクは自分の画材道具を一通りそろえると椅子を二つ持ってくる。

「じゃ、そこ座って」

「はいっ」

ボクが適当な距離をとって詩織ちゃんにそう言つと彼女は、びし
つと椅子に座った。軍隊じゃないんだから、と苦笑してしまう。

「もつと楽にして」

「は、はいっ」

ダメだ。緊張してるのかな。うゝん……。あ、そうだ。

「そうだ。詩織ちゃん。キミはボクを描いて」

「はいっ。……え？ ええ！？」

元気よく返事してからボクの言った台詞の意味を把握したらしく
ワタワタと慌てだす詩織ちゃん。見てて楽しいほどの狼狽ぶり。

「そ、そそんな恐れ多い！わたしなんて絵の腕なんか全然で鏡セン
パイを描かせてもらうなんてとてもとても！」

手と首をぶんぶか振って早口で無理ですと言う。

「上手いとか下手は関係無いよ。一生懸命に描いてくれればいい。

……それとも、詩織ちゃんはおくを描くのはイヤ？」

「そんな滅相も無い！」

「じゃあ、描いてくれる？」

「う、あ……うう。……はい」

一通り意味のなさない呻き声を発したあとはつきりと彼女は返事をした。

詩織ちゃんは自分の筆とカンバス等を持ってくると描く態勢になる。

（へえ）

それを見て思わず感心する。先ほどまでの緊張や狼狽振りが嘘のように今の彼女は別者になっている。

真剣な眼差し。適度な緊張感。僅かに張り詰めた空気。彼女の絵画が好きなのだという気持ちがよくわかる。伝わってくる。今日の前に座るのは一人の画師だ。

そんな彼女を見てボクも集中する。初めて描くリン以外の人物としては申し分ない。詩織ちゃんを選んだのは間違いじゃなかった。

お互いに無言で互いを描いていく。

鏡が詩織を選んでからしばらくして、鈴音のほうもモデルを決めた。

「よろしくお願いしますね、鈴音さま」

そういつてぺこりと頭を下げたのは、髪をアップにした、見た目は年下にしか見えない同年の少女、皆瀬^{ミナセ}唯^{ユイ}。

鈴音が彼女を選んだ理由は簡単。六花と同じクラスの彼女と互いに少しだけ面識があったからだ。わたしもわたしも言うってくる少女達に、流石に困り果てていたところで偶然彼女と眼が会ったのは、鈴音としては運が良かった。

「もう、『さま』付けはやめてよ、唯ちゃん」

「いいえ。全校生徒の憧れのお人ですよ。さま付けは当然です」

これだけは譲れませんかばかりにそう言う唯。鈴音としてはそんなことは無いのにと、騙しているみたいで申し訳なくなる。

「あたしはモデルに徹しさせてもらいますので」

鏡と詩織がお互いを描きあっているのを見て、唯は鈴音が何かを言う前にそう宣言しておく。

鈴音が自分の画材を揃えている間に唯は椅子の準備をしてもう座っていた。本当にモデルに徹する気にいるらしい。

「どうして？」

「鈴音さまが私を見つめてくれるのを楽しみたいです」

胸の前で手を組みどこか恍惚とした表情でそう言う唯に、鈴音は苦笑するしかなかった。

やりにくいなあ、とか思いながら鈴音は描き始めた。

「はい。今日の部活はここでお終い。皆、手を止めて、お片づけしてね？」

鐘が鳴ると同時に部長がそう言うのと部員達は返事と共にかたづけにはいる。

部活は１８時半までと決められていて、４５分を過ぎてもまだ部員が校舎にいた場合、その部は一週間の活動停止処分を受ける。この学校は時間に対しては厳しい校則がそこそこに存在するのだ。

かたづけをしながら鏡は詩織の描いていた画を見ようとするが、詩織はそれを必死に隠していた。

一方で鈴音は何故だかとても疲れた気分だった。

鈴音の描いている様子を熱い眼差しで見つめてくる唯。たまにほぅ、と溜め息をついたりもしていて、すごく描きにくかったのだ。人選を誤っただろうかと真剣に悩んだが、書き始めている手前そんなことは言えない。

鏡も鈴音も一応描けてはいたが完成には至らなかった。いつもな

ら次の日も参加して仕上げる二人だが、この次の日、二人は部活動に参加できなかった。

彼女達の日常はそれぞれに小休止に入る。

Interval - secret meeting -

Interval - secret meeting -

暗い場所。

そこはいつであろうと清浄さを失わない場所だが、今はその清浄さが逆に不気味で、陰鬱としたものを感じさせる。

「——本当なんだろうな？」

「うふふ。嘘は言いませんわ」

暗いといってもそこには薄ぼんやりとした、青白い明かりが灯っていた。他種の色彩で表された天使と聖女の絵。ステンドグラス。そこから入る月明かりだけが、この場所を照らす唯一の光源。ぺらり、と頁を捲る音がする。

僅かに照らし出されたそこには幾列も長椅子が並んでいることが辛うじて確認できる。そして、二人の少女が居るということも。

片方の少女からは、もう一人の少女に対して刺すような敵意が向けられている。だというのに、もう一方の少女はそんなものは感じてないかのように手元の薄い本に目を落としている。

「貴女はただ、わたくしの言う通りに動いて下さればいいのですわ」
「……」

そうするのが当然だというかのような傲慢で高飛車な物言い。

「貴女にとってもこれは、重要なことですよ？」

「あの子のこと以上に重要なことなんか無い」

ふざけているとしか思えないことを言う少女に、もう一方は強くそう吐き捨てる。

「ふふ。そうでしたわね。けれど、彼女のいるこの学園の秩序と平和のため——と言えば、その意見も変わるかしら？」

「なに？」

「食いつきましたわね？——くすくす」

悪戯っぽい笑みを零す少女をもう一方の少女が睨みつける。けれどそんなものは怖くないとも言つようにくすくすと笑いつづける。他人を苛立たせるのが楽しくてしょうがないかのようだ

「いい加減にしろ！」

「——まあ、こわい。そんなに怒らなくても良いではございませんの」

ぺらり、とまた頁を捲る音がする。

発しつづけられる敵意が鬱陶しくなったのか、溜め息を吐くと、しかたないですね、と本題に入る。

「ここには、とても怖いモノがいるんですよ？」

知っているかしら？ と、問い掛ける。その言葉に、ぴくり、と僅かにだがもう一方の少女が反応した。けれどそれは普通は気づかないはずの反応。しかし、少女はその反応を見逃さなかった。

「貴女ほどの人でも気付かなかったのはしかたありませんわ。ここはそう言う場所なのですから」

その反応を馬鹿にするでもなく、ただ優しく微笑みながらそう言う。その対応がまた不愉快なことこの上ないが、今度は何の反応も示さない。

無言で先を促す気配だけが伝わってくる。

「この学園の正体はお気づきかしら？」

「……『檻』、だろ」

「ええ。けれど、それだけではありません。それは表面だけ。すべての物事には『側面』と『背面』があるのを忘れてはなりませんわ」

「……」

「この学園の『側面』は——そうですね、簡単に言えば保護施設、とでも言えばいいのかしら」

「保護？ なんの」

「決まっていますでしょう？ 本来『檻』に入れておくはずのモノのですわ」

「馬鹿げてる」

鼻で笑いそう切り捨てる。

ぺらり、とページが捲られる。

「まったくですわ。けれど事実ですよ？——現に『鮮血姫』と『蟲の蔵』と呼ばれる二つの存在が保護されていますわ」

「なんだそれ」

「先ほどわたくしが言った怖いモノ、ですわ」

「ふざけた名前だな」

「名前ではありませんわ。ただの呼び名ですもの」

「恥ずかしいやつ等」

そう言つてまた、バカにするように鼻で笑う。

「あら？貴女がそれを言えますの？——『白鬼』さん」

言つた直後、瞬きの間すらおかずにバガンツ、という音と共に少女の腰掛けていた長椅子が真つ二つになる。

「その名で私を呼ぶな」

「ふふ。怖いですわね」

少女はいつの間にか教壇と思われる場所に腰掛けていた。背後にあるステンドグラスから入る月光が後光のように映え、ブロンドの髪が煌く。

ぺらり、とページの捲る音。

「……何でその名を知っている？」

「調べましたの。簡単ですわよ？——ここにはそう言う方もおられますもの」

再びくすくすという笑い声。何が面白いのか知らないが、『白鬼』と呼ばれたほうの少女としては苛立つばかりだ。

「とりあえず、貴女には後ほど連絡いたしますわ」

「今すぐ行動しないでいいのかい？」

「ええ。急いではことを仕損じるだけですわ。じっくりといきませんと」

「——っ」

それはつまり少女にとっての愛しい子がこの底意の知れぬ奴に長時間拘束されるということだ。ギリツ、と歯が鳴る。強く噛み過ぎたために唇の端から血が一筋流れる。その痛みに気付かぬほど胸中では怒りと焦燥が渦巻く。

「安心なさいな。貴女の愛しい人はちゃんと大切にしておきますわ」
「当然だ！ 何かあってみろ！ そのときは貴様を八つ裂きにするぞー！」

「うつふふ。まあ、怖い。けれど、忘れてはダメよ？あの子をわたくしの意のままにできることを」

「――下衆が」

「下品な口調ですわね」

侮蔑と不快を込めて吐き捨てられた言葉に、眉をしかめてそう呟く。当然言われたほうは聞こえていても気にしない。

パタン、と開かれていた本が閉じられた。

「待っていなさい『鮮血姫』『蟲の蔵』」

そう言うてくすくす笑いをする少女。そこにはもう、もう一人の少女の姿はなかった。

ただただ少女の笑い声が静かに、響くことなく、暗くは無い闇に呑み込まれていく。

日常の中に潜む影が、脈動する。

Their ways - 1

Their ways - 1

暗い場所。

何も見えない。視えない。

音が聞こえる。

何かの蠢く音。

硬質的な音。

羽音のような音。

不快感だけを与える音。

恐怖感をつのらせる音。

燃えるように痛い。身体が。心が。なにもかもが。

痛い。

とても痛い。

寂しい。

誰かの、何かのいる気配がする。

視えない。痛い。寂しい。つらい。助けて。どこ？お姉ちゃん…

…。もう、いやだ——！

「……………んっ！リン！！」

焦燥感を含んだキョウ様の声と冷たい手の感触に私は目を覚ます。

「よかった。大丈夫？」

ホっとしたような、安堵の浮かんだキョウ様の顔。声には私を心配する成分が含まれていた。けれど、私には何がどうしたのかわからない。

もう朝になったのだろうかと窓に目を向けるが、カーテンで遮つ

た外は暗かった。まだ夜のようだ。

「……どうしたんですか？ キョウ様」

「リン、うなされてた」

「え？ そうなんですか？」

そう言われても私には何か夢を見ていたという記憶は無い。起きると同時に忘れてしまったのだらうか。

キョウ様はいきなり私の顔に手を伸ばしてきた。体温の低いキョウ様の指が私の顔に当たる。

「んっ」

キョウ様が手を伸ばした先は私の目じり。そこを軽くなでたキョウ様の人差し指の先は濡れていた。

「涙？」

「リン、泣きながらうなされてた」

泣きながらうなされていた？ 何か嫌な夢でも見ていたのだらうか？

やっぱり……おぼえていない。それに、まだ、眠い……。

「リン……。大丈夫だから」

キョウ様はそう言う私の手を両手で包み込むように握り、そのまま横になった。私もそれに倣い横になり、眠ることにする。ホントに、眠い……。

リンが寝静まったのを確認するとボクはゆっくりと身を起こす。

リンはすぐに眠りについた。昔から、リンは寝つきが良い。愛しい少女のその無垢な寝顔を見ていると自然と笑みが零れる。

リンは覚えていなかったただけど、ボクにはリンが何の夢を見ていたのか、なんとなく察しが付く。わかってしまう。

きつと、昔のあの忌まわしい雛罌粟の家でのことを夢として思い出してしまったのだらう。

雛罌粟。ボクの名字であると同時に忌み名。自らの欲望のためには如何なる犠牲でも喜んで払う狂気の名。

今思い出しても怒りが湧き上がる。ギリツと齒が鳴り、口の端から血が流れる。この怒りは雛罌粟と言う一族とそこに含まれる自身に向けられた怒り。たった一つの約束すら守ることのできなかつた自分に向ける怒り。

——今は雛罌粟の名を持つ者はボクを除いて存在しない。そして、リンがいる限り雛罌粟の名の持つ狂気は意味をなさない。

しかし、ボクがいる限りボクの名に与えられた呪いは憑いて廻る。今までは昔のことを思い出すことの無かつたリンが昔のことを思い出してしまったのもその前兆なのだろう。

安らかに眠るリンの寝顔を眺める。

まあ、いいさ。狂気であれ、呪いであれ。ボクとリンを脅かすというのなら幾らでもかかってくるといい。その全てを捻じ伏せてやるさ。

だからリン。安心して。もうあんな思いは二度とさせないから。

ボクはもう、二度と、何があってもキミから離れないから。独りにはしないから。約束は永久に果すから。

可愛い寝顔を見せてくれているリンの額に軽く唇を当てると、横になり眠るために目を瞑る。リンの手を離さないまま。愛しい少女の温もりを感じながら。

「ああもう！わたしはとんでもないおばかさんなのです」

そんなことを呟きながら駆け足で寮から校舎へとかける一人の少女。

空は暗く黒く。月とまばらな星がささやかに、それでいて美しく自己を主張している。

少女は放課後の部活で鏡と互いを描きあつた堂面詩織だった。おさげ髪が走る足にあわせてパタパタぴよこぴよこはねて踊る。

時計の針は夜中であることを示している。現に今起きているのは

彼女くらいのもだろう。

彼女は今、校舎へと忘れ物を取りに向かっていた。普段ならば忘れ物をしてもしかたないと翌日早く登校するのだが、今回はそうもいかなかった。全校生徒のほとんどが恋焦がれる銀髪の王子様、雛罌粟 鏡。いつもひっそりと隠し持っていた大切な彼女の写った写真を、あるうことか部室に忘れてしまったのである。

いつもなら肌身はなさず持っているのだが。持っているのがばれたら恥ずかしいとか、はしたない子と思われるかもしれない等の理由から、自分の画材道具を取りに行った時にひっそりと隠しておいたのを、浮かれていてすっかり忘れていたのである。

こんな時間になるまで思いつかなかったのだからさうとう浮かれていたのだろう。そして、彼女がそれだけ鏡にあこがれていたという事実でもある。

生徒たちが『レ・ペタル』と呼んでいる中央噴水の所までくると、詩織はある不可解なことに気付いた。

最初は見間違いか何かと思っていたがそうではなかった。

「こんばんは。良い夜ですわね堂面 詩織さん？」

噴水の縁のところに誰かが腰掛けていたのだ。その誰かは読んでいた本をパタン、と閉じると詩織に微笑みかけた。

こんな時間にこんな所に居るだけでも異常だと言うのに、月と星しかまともな明かりが無いこの場所でこの誰かは今しがたまで読書をしていたのだ。

「あの……こんな時間にどうしたんですか？」

詩織は気付いたらそう声をかけていた。身体は何か気味の悪いものを感じているというのに頭がそれを理解せず、口が勝手に言葉を紡ぐ。

「人を待っていましたの」

その誰かの声を聞いたことがある気がした。それも頻繁にはなく割と定期的に。

誰かはゆっくりと上品に立ち上がると詩織に近づいてきた。

逃げたほうが良い。そんな気がするのに身体は自分の意志を無視して立ち尽くしている。

「あらあら。怖がらなくてもいいんですよ」

そう笑いながら優しさを含んだ声で言う。その声に何か甘い匂いがすると詩織は思ったが、その直後、思考するという事が出来なくなった。瞳からは輝きが失せ焦点の合わないかのように呆としたものになる。

「ふふ。可愛い子……」

誰かは詩織の頬に手を這わせるとやさしくなでる。詩織はピクリとも反応しない。ただ立ち尽くす。

「まずは……一人」

誰かは妖艶に微笑むと詩織を伴って夜の闇に消えた。そこに誰かが居た痕跡は消えていた。

Their ways - 2

Their ways - 2

朝の陽の光に目を覚ます。時計を見るといつもよりも少し早い。当然のことだけどキヨウ様はまだ寝ている。手は握られたままだ。この冷たさと触れ合っているという温かさが心地良い。

私はそつと、キヨウ様の手を解くと洗面をし、制服に着替える。着替え終わると、戸棚からカップとポットとサーバー、ドリツパー、ペーパーフィルターを、冷凍庫からコーヒー豆を取り出す。

寮の各部屋には簡単に小規模だけどキッチンが備わっている。この学園の寮はとても大きく、各部屋も広々としている。ある意味、流石といえる。

私はポットの中に水を入れコンロにかける。コーヒー豆をその横に置いておき、お湯が沸くまでにサーバーにドリツパーをセットしペーパーフィルターをセットする。

コーヒー豆は酸化しやすいので密封容器に入れて冷凍庫で保管するのがいい。そして使うときは豆が冷えていると美味しいコーヒーにはならないので、コーヒーを入れる際に常温に戻しておくのがポイント。

ペーパーフィルターの端の部分は圧力だけで接着しているのでそのままお湯を注ぐとはがれやすい。だから、必ず互い違いの方向へ折り込み、強度を持たせてからセットする。

そうして数分するとお湯が沸いた。

ペーパーフィルターに豆を入れる前に、ペーパーフィルター、カップなど使用する器具類を熱湯で温める。これにはペーパーとドリツパーをなじませる効果もある。

ペーパーフィルターに豆をいれる。一杯分で約15グラムが目安。数杯分の場合は、一杯分あたり10グラムで計算する。必要なのは

当然、私とキヨウ様の二人分。

お湯を全体を湿らす程度に注ぐ。このとき美味しく入れるには、中央から“の”の字を書くようにまんべんなく。キヨウ様にはとびつきり美味しいのを飲んでもらいたいので、些細なことも注意する。本当は、豆も全部自分でやりたいけど、ここではそれは高望み過ぎるから市販品で我慢する。

「うん……？」

コーヒーの香りにつられてかキヨウ様が目を覚ます。

「おはようございます。キヨウ様」

「……うん」

キヨウ様はベッドの上に脚をMの字に開くようにしてぺたんとして座っている。目は半開きで眠そうにこしこしと擦っている。髪も所々寝癖がついており、幼い少女のようでとても可愛らしい。

「キヨウ様、顔を洗ってきてください」

「ん……」

微笑んでそう言う私に、キヨウ様はわかっているのかどうかかわからない返事をした後、のろのろとベッドから降りて、ふらふらと洗面に向かった。足取りが危ない。

少しの心残りと共にキヨウ様が洗面所に消えたのを見送ると、私は続きに入る。

次は豆を蒸らす。この工程により豆の中のスポンジ状の細胞が膨らみ、コーヒーのエキ스가十分に出やすい状態になる。お湯は細い線になるように注ぐのがコツ。お湯が全体に行き渡れば、そのまま15〜20秒待つ。

再び、“の”の字を書くようにお湯を注ぐ。一回目より大胆に、カップ数に見合う分量を一気に。ここで注意しないといけないのはペーパーフィルターの部分に直接お湯をかけると、コーヒーを通らずにお湯だけ抜けてしまうということ。そうなると美味しいコーヒーは入れられない。

「ボクのコーヒー、砂糖とミルク忘れないでね」

「わかっていますよ」

制服に着替えながらのキョウ様の言葉に私は微笑みながらそう返す。朝のふにやふにやなキョウ様も可愛いけれど、やっぱりこうちやんとしているキョウ様のほうが素適だと思う。

……味覚は子どもみたいですけれど。

そう思い、クスリ、と笑みをこぼす。

カップにコーヒーを注いで、キョウ様の分にはスティックシュガー三本とミルクを入れ、私にはミルクだけを入れる。

座っているキョウ様にコーヒーを手渡すと、私はそのまま感想を待つ。

「いい香り。……うん。おいしいよ、リン」

「ありがとうございます」

私もカップに口をつけコーヒーを飲む。程よい苦味が我ながらとても美味しい。

私たちは少し早く起きると、いつもこうして僅かな時間を二人だけで堪能する。この学園にいて二人だけの時間というのは、すごく限られている。

とても甘いだろうコーヒーを美味しそうに飲んでいるキョウ様を眺めながら思う。

今日も一日いい日であればといいな、と。

早朝。ここは寮内にある一室。

この学園には生徒組織が二つ存在する。

一つは生徒会。

もう一つは生徒自治会。

生徒会が学園内の権力を握っており、自治会は寮内での権力を握っている。

生徒自治会室は寮内に設けられており、自治会長の意向により一般生徒にも広く公開されている。

「そう……。わかりましたわ」

金色の髪にゆるくウェーブをかけている西洋的な容姿の少女はそう言って頷いた。

彼女は生徒自治会会長、三年生の十条寺茉莉。煌く金髪と切れ長の翡翠色の瞳、前時代的な喋り方が特徴的な生徒だった。西洋的なその容姿は整っており、美しい。

自治会室には現在、茉莉と茉莉に相談をしにきた一人の生徒しか居ない。他の会員はまだ自室でまどろんでいるのだろう。

「このことは口外しないほうがいいでしょう」

「……わかりました」

一睡もしていないのだろう。少女は酷く憔悴しきっていた。そんな少女に茉莉は優しく微笑みかける。

「安心なさい。貴女のお友達は、きっと見つかりますわ。大丈夫。要さんの——生徒会長の方にもわたくしのほうから話しておきますわ」

何かがあったときの相談相手としては、生徒会長よりも自治会長のほうへ生徒は来る。

生徒会室は一般生徒の出入りを原則として禁止されているということもあるが、それ以上に、生徒会長そのものに謎が多すぎるというのもある。近寄りがたい。それが一般生徒の生徒会長に対する印象だ。

それに対して自治会は会室を広く生徒に公開し、定期的に茶会なども開いていたりする。それに会長である茉莉はどんな些細な事柄でも親身になって話を聞いてくれる。頼れる先輩として信頼度も人氣も高いのだ。

そして、本来は仲の険悪な生徒会と自治会を良好なものにしたという功績も茉莉にはある。

「さあ。今日はお部屋に戻っておやすみなさい。一睡もしていないのでしょうか？ シスターにはわたくしが言っておきます」

少女は礼を述べると自治会室を退室した。

茉莉は一人になった会室で、冷めてしまった紅茶を飲む。見るともうひとつのカップには手がつけられていなかった。あの少女に出してあげたものだが、飲むことは無かったのだ。喉を通らぬほど心配だったのだろう。

それを見て茉莉は、悲しげに目を伏せた。

Their ways - 3

Their ways - 3

「珍しいことがあるものだ」

そんな呟きが聞こえた。

見ると、何時からそこにいたのか要会長が扉に背を預けて立っていた。

クジュークイン

カナメ

九十九院 要。この学園の生徒会会長の三年生。掴みどころがなく謎が多い人。氷のような、刃物のような美しさをもつ女性。正直言って私はこの人が苦手だ。

「おはようございます。会長」

それでも、礼儀として挨拶をする。嫌いだからと礼を欠くというのは何か違う。

「ああ、おはよう」

そう返すと扉から身を離し、自分で紅茶を入れるらしくカップ類を用意しだす。私はそれに気付いても何もしない。

「で？　なんだってこんなに朝早くからキミはここに居るんだ？

八雲」

カチャカチャと音を立てながらそう訊く。男性のような口調。ハスキーがかった声。

「別に。たまってる仕事をそろそろ片付けようかと思いましたが」

嘘ではない。現に私のデスクの上にはたまっている仕事が増えられており、そのうちのいくつかは片づいている。

「ふうん」

だというのに、この人は言外に嘘だろう？　と返す。

「なにか？」

意識して不快げにそう言う。実際、見透かされてるようでとても不快で不愉快だ。

「いや。あたしには関係無いことだからな」

それに対して笑みの成分を含ませながら要さまは紅茶の準備を続ける。

「会長こそ何でこんなに早くから？」

「紅茶が飲みたくなってるね」

なら自分の部屋で飲めばいいじゃないか。この人こそ嘘を言ってるんじゃないだろうか。

「あたしの部屋に紅茶は無いんだ。それにここには一通りそろって
いるからな」

私の心中を見透かしたかのように口にも出していないことにそう答える。

「うーん……。オレンジペコを飲もうと思っただが、八雲もいるか？」

「結構です」

「なら煎れよう」

「……知らない、と言う意味なんですか？」

「結構という言葉には是と否の二通りの意味がある。あたしは是と取った」

「勝手な」

「言葉とはそんなものさ」

私は起きてから何も口にもせずずっと仕事をしていたから、ある程度喉は渴いているし、オレンジペコも好きだが。この人に煎れてもらったものを飲みたいとは思わない。まだ青汁を二杯飲んだ方がマシだ。

実を言うと、本来ならば後輩が紅茶等の準備はしなければなら
ないのだが、今の私にはそんなことをする気は無い。……正直言うと、
要会長にも出て行ってほしいと思ってるくらいだ。

かちやり、という音共に私の所にティーカップが置かれる。オレンジペコの柑橘系のいい香りが鼻腔を刺激する。

要会長は私の向かいに座ると自分の分のティーカップに口をつけ

る。

「やはり、あの子ほど上手くは煎れられないね」

ことり、と音を立ててティーカップを置くとそう感想を口にした。私はそれらを見せず手元の仕事に専念する。

「そう言えば昨日から都香ちゃんを見ないな」

シャーペンが紙面の上を走る音が響く。

無視と言う姿勢をとる私に構わず要会長は続ける。

「あの子の煎れるお茶が今の所一番美味しいのだが。……お姉さまであるキミは何か知らないか？」

私は答えず聞こえてなどないかのように、手を動かし続ける。

無視しつづけるが、要会長からは答えを要求する無言の圧力が発せられている。いや、それは圧力というほどのものではない。ただ、眺めているだけのようにも感じられる。

なんにしたって、居心地のいいものじゃあない。

苛立ちが募る。

カリカリ、カリカリ……。

「飲み干してしまった。……飲まないならキミのを貰うけど、いい？」

「ご勝手に」

カリカリ、カリカリ……。

ペンが紙面を引っ掻き走る音を止めなず、そう言う。

「じゃ、もううよ」

そう言うって私のほうに手を伸ばしティーカップを取る。冷め切ったのなんかを飲まず、新しいのを煎ればいいのに。

しばらく無言の声寂のなかに紙面の上を走るシャーペンの音だけが室内を支配する。

要会長からは依然、居心地の悪い何かが感じられる。ちらりと窺うと自らの長いワンレングスの髪を、退屈そうにいじって遊んでいた。

「何故まだここにいますか？」

苛立ちながら私はそう訊ねていた。訊こうと思って訊いたわけではなく、何をするでもない要会長を見たら自然と口を開いていたのだ。

本来なら、私みたいに溜めていない限りは朝から生徒会室に来る必要はない。人数が足りていないとは言え、役員は皆優秀だ。何かの行事の前以外は仕事はその日のうちに終えている。それでも毎日仕事はあるのだが。

大体、要会長が会室に顔を出すことなんて滅多に無い。要会長は常に会長室で全ての業務をこなしている。顔を見せても紅茶を飲むため、飲み終わるとまた、すぐに会長室に消える。

「まだ答えを聞いてないんだが？」

「何のです？」

「都香ちゃんの欠席について」

「……私は答ええないという返答をしたはずですが」

私は苛立たしげにそう答えた。意識してとかじゃなくて自然とそうなった。ただ、事実苛つく。

だというのに、この人はクスクスと笑いだした。

「なんです？」

「——クク。いや、キミは中々面白いことを言うな。それでは何かがあると言ってるのと変わらないじゃないか」

「……………」

「何があつたか当ててやろうか？」

前髪に隠れていない片目を細め、射貫くような視線でそう言う。

私はそれにただ、無言を返す。是でも否でもない。

「都香ちゃんが行方不明なのだろう？」

「……………」

「さつき自治会長の茉莉さんから連絡があつた。何人かの生徒が居なくなつたと。……その居なくなつた生徒達の中に都香ちゃんの名もあつたよ。しかも都香ちゃんが行方不明第一号らしいじゃないか」

「……………」

私は無表情に無言で無動作で要会長の話を聞く。

要会長は続ける。

「それをキミが知らないとは思えない。最後に彼女と一緒にいたのはキミだろう」

「……」

「……都香ちゃんに限って言うのであれば、キミはそのことで何かを知っている。そして知っていながらキミは何かをすることは出来ない」

「……………」

私はがたり、と乱暴に音を立てて椅子から立つと自分の荷物をもつて扉を開ける。

「おや？最後まで聞いていかないのか？」

話の途中なのだが、と要会長は言うが関係無い。私はこれ以上ここに、いや。要会長と同じところにいたくない。

「貴女がどこまで何を知っているのかしらないが、そのことについて何かをしようとは思わないでほしい」

私は要会長に背を向けたままでそう言う。手はノブにかかって扉を少し開けている。

「当たり前」

「では。失礼します」

私は要会長の言葉を見殺しに会室を出た。

彼女は多分全てを知っている。知っていて何も知らないフリをしながらをやる気もない。

それでも彼女はヒマを潰すかのように、知っていることを知らないかのように言い、私の反応を見て楽しんでた。

私はそんなことに付き合ってるほど穏やかな心の持ち主じゃない。あのまま聞いていたら何をしてくすかわからない。

「今日はもう生徒会に顔を出さなくてもいいぞ」

扉越しに要会長がそう言ったのが聞こえた。

一人になった生徒会室で、要は、笑っていた。声を出さず、ただ、気配だけで。

「『惑乱侯』は徐々に動き出した。しかも『色鬼』の宗主まで使う気らしい。『鮮血姫』と『蟲の蔵』はまだ動いてはいないが、時間の問題だろうな」

聞く者の居ないなか、自らの長い髪を弄びながら独り言にしては大きすぎる声でそう話す。

「宗主の力があれば『惑乱侯』の力如き、ここではどうとでもできるはずだが……。さて、『惑乱侯』はどこまでできるか……」

要は椅子から立ち上がると自分の座っていた椅子と八雲の座っていた椅子を直し、カップ類を洗う。

「この遊戯、なかなか楽しくなりそうだと思わないか？」

誰にか、そう問う。当然誰からも返答はない。

蛇口から流れ出る水の音と、カップを洗うカチャカチャという音だけが空しく響く。

「……問題はあの人がどうするかだな」

ふいに楽しげな気配を消し、真剣な表情になる。

「心配は無いと思うが……、あたしも少し動いたほうがいいだろうな」

要はそう呟くと、夜色の瞳を伏せ溜め息をついた。

その一瞬後にはまた、愉快げに、気配だけで笑った。

Their ways - 4

Their ways - 4

授業中、鏡は常のように居眠りをすることも無く、だからと言ってマジメに授業を受けているわけでもなく、静かに考え事をしていった。

様子がおかしい。と。

今日は朝から学園内の、正確には高等部の雰囲気がおかしい。

心配事。不安。焦燥感。それらが静かに、隠そうとするから余計に際立って渦を巻いている。

鏡はこういった異常に敏感だった。

——いや、敏感でなければいけなかった。自らの雛罌粟という姓と力ガミという名故に。

雛罌粟という姓を持つ一族は古くから存在し、しかし突然に現れた得体の知れない一族のことである。

自らの欲を第一と考え、それを得るためには手段を選ばず、如何なる犠牲も厭わず、確実に、執拗である狂気。歴史の表にも出ず、誰の噂にもならないが、確かに雛罌粟は様々な欲望を満たしていた。

時には『破壊』という他でも補うことの可能な単純欲求のためだけに一つの村を壊滅させた。当然村人は一人残らず殺された。幼子も女も老人も、抵抗の有無も関係なく平等に。

時には『食欲』という生物としての根源的欲求のためだけに、人も動物も植物も関係なく気の向くままに喰らい、人間社会に飢餓と徒な混乱を与えた。

雛罌粟にはそれをするだけの力があつた。智があつた。

討伐のために義勇軍が立ち上がったこともあつたが、完膚なきまでに殺された。当然その親兄弟、家族、友人知人も同様に。それで

すら怒りからではなく、暇つぶしに。

狂気と絶望と破壊の象徴、雛罌粟とは不幸の代名詞だった。

鏡はその雛罌粟を、自分を除き全て葬った。けれど、それで雛罌粟の姓のもつ力が消えることは無い。雛罌粟のやった様々な行いは無かったことにはならないし、雛罌粟 鏡という少女がまだ残っている。

鏡がいくら強固で強靱な精神の持ち主であろうと、雛罌粟の歴史は憑いて廻る。

それに、鏡の“カガミ”という名の呪いがある。

それらは姓名を変えたところで意味が無く、死してなおどこまでも憑いて廻る。

鏡にはどうしても、何に変えても守りたいものがあつた。

峰岬 鈴音という少女。雛罌粟の名に冒され汚された少女。鏡の唯一の愛しい少女。誓い合つた存在。

鈴音を守り続けるためには常に気を張っておかなければならなかつた。何があつても、どんな些細な異常でも即座に感知し、それを退け、守るために。

その張り巡らされた鏡の気が告げる。

——クルゾ。

と。

これはその前兆だぞと。

けれど、それだけだつた。どれだけ考えようと具体的に何が起ころうとしているのかはわからなかつた。

学園内のことなら、クラスメイトで生徒会の副会長でもある八雲に聞けばすぐにでもわかるのだろうが、その八雲が今日に限っていない。欠席らしい。

このことも何か関係しているのだろうかと考える。どんな些細なことでも疑う必要がある。

どんなものでも些細なことから綻びることを鏡は経験として知っていた。

「鏡さん。この文を倒置系で――」

「Such was Linda's disappointing moment that she burst into tears!」

「は、はい。ありがとう鏡さん」

突然当てられたにもかかわらず鏡はちらつと、黒板を見ただけで即座にそう答えた。予想できたこととは言え、その完璧なよどみの無い発音と正確さに、教師は一瞬たじろいだ。

しかし、鏡にはそんなことはどうでも良い。思考は続いていた。

――唯一つ、ある考えが脳裏をよぎったが、鏡はそれを否定した。いや、出来れば否定したかった。しかし、そう簡単に否定は出来なかった。

思考は続く。

~~~~~

「どおです? 『惑乱候』さん」

「これは……一体どういふつもりなんですか?」

“彼女”が仕事を終え一息ついて椅子に座っていると、何時からそこにいたのか彼女が悪意のなさそうな無邪気な笑顔で立っていた。

彼女は、現れるや否や“彼女”のことを『惑乱候』と呼んだ。“

彼女”がソレであることを知っている者はこの学園ではそう多くない。むしろ、極々少数の限られた者たちだけだ。“彼女”が知っている限りだけで僅かに三人。その中に、彼女は入っていない。

『惑乱候』は警戒しながら相手の動きを窺っていたが、彼女はそんなことを気にもとめずに後ろ手に隠していたらしい一冊のノートを差し出した。普通の授業で使うようなB4サイズのノート。

『これを『惑乱候』さんに贈呈しましょう』

そう言って彼女はノートを手渡した。

『惑乱候』は彼女のこと知らないわけではなかった。この学園の生徒であり全校生徒のことを把握することの容易なポジションに居る“彼女”は、『鮮血姫』と『蟲の蔵』それに『白鬼』の事を調べるときに彼女のこと調べた。しかし、彼女は何の異常も無い唯の人間であつた。――ハズだつた。

『惑乱候』が警戒の意味と、自らの困惑を隠すために睨みつけても、彼女は笑顔のままだった。“彼女”はその笑顔からは何も感じ取ることは出来なかつた。

それどころか、先ほどから自らの『惑乱候』という名故の力を行使しているというのに、彼女にはまるで効いていないのだ。

“彼女”の『惑乱候』の力は、徒人であるなら絶対の効果を發揮する。いや、たとえ徒人でなくとも自らの位が相手に勝っているのならば、効果を發揮する。

なのに、目の前の彼女にはまるで効いていない。

これは彼女が徒人ではなく、『惑乱候』――侯爵位の自分よりも位の高い存在であることを示している。つまり爵位階級で言うのであれば最高位たる公爵位。

この事實は“彼女”にとって大きな誤算だつた。

自然と“彼女”の顔が強張る。

彼女からは悪意は感じられない。害意も敵意も。――何も。

しばらくして、“彼女”はやつとノートを受け取つた。何時までもこうしていた所で意味がないと言うのと、ニコニコと笑みを浮かべる彼女に対して警戒心を抱き緊張していることに馬鹿馬鹿しくなつたのである。それでも、警戒は緩めない。

ノートにはびっしりとこと細かく様々な文字が書かれていた。それも、女の子らしい丸っこい文字で。

それを見て『惑乱候』は実に複雑そうな表情をした。

だが、それも一瞬。ノートに書かれた事柄を読むにつれ段々とその表情が驚愕に彩られていく。

ここで、最初の会話に戻る。

ノートに書かれていたのは『鮮血姫』と『蟲の蔵』の過去のデータとその能力の詳細。繋がり。名の持つ意味。

「欲しかったんですよね」

その通りだ。これらは全て、“彼女”が欲してやまず、しかし手にすることの出来なかった情報。

『惑乱候』は彼女を見る。彼女は笑顔を絶やさない。

「どういうつもりですか？」

『惑乱候』は困惑を潰すほどの敵対心を隠しめせずあらわに、険しい目つきで睨みつけそう言う。

“彼女”はプライドが高かった。ソレは本人も自覚していた。『惑乱候』という称号を異例の若さで継承し、自らの家の、侯爵家の主であるということに絶対の自信を持っていた。

その“彼女”が如何なる手段をもつても手にすることの出来なかった情報を、目の前の得体の知らない少女はここまで確実に入手し、拳句それをくれるという。丸っこい文字のクセに。

“彼女”の中には未知に対する恐怖は無かった。ただ、プライドを傷つけられた怒りがあった。それは静かに“彼女”の中で渦巻いている。

それを察しているのかいないのか、あえて無視しているのか、彼女は笑顔を笑みを消さない。

「……一方的なゲームなんてつまらないですよ。はっきり言って『惑乱候』さんの力では『鮮血姫』さんにも『蟲の蔵』さんにも及びません。『白鬼』さんを引き込もうとしているみたいですけど、あの人の力だと何時敵に回ってもおかしくありませんよ」

「なんですって!？」

その台詞に『惑乱候』は激昂した。

「本当にそうなのか、貴女で試して差し上げてでもよろしくてよ？」

言い終えるよりも先に、彼女の周りを数人の少女、幾体にも及ぶ人形が取り囲んでそれぞれに凶器を突きつけていた。

「これが『惑乱候』さんの『お人形劇』ですか。知ってましたけど、マリオネット・トラジエティア

はじめて見ました」

しかし彼女はそれに対してそう呟くだけで、動揺も驚愕も恐怖も見せなかった。ただ少しだけ、表情が動いただけ。

空っぽの笑顔から、珍しいおもちゃを見て喜ぶ子どもの顔に。

それを受け動揺したのは『惑乱候』だった。しかしそれを表に出すことは無かった。変わりに、より険しく睨みつける。

「貴女は——」

「けど、ダメですね」

“彼女”が何かを言おうとしたのを彼女は無視し、遮るようにそう言った。その台詞は聞き逃せるものではなかった。

「なんですって？」

眉を吊り上げらせ、怒りと殺意を隠さず静かにそう呟く。

「ダメですよ。こんなのじゃ。読んで貰ったらわかりますけど」

そう言っただけ渡したノートに目をやる。『惑乱候』は目だけは彼女に意識だけをノートに向ける。

「——最凶と呼ばれた同族殺しの『鮮血姫』に、いまだ謎多きただ不死身とだけ称される『蟲の蔵』を相手に、こんなのじゃあお話になりませんよ」

そう言っただけクスクスと嘲笑う。

『惑乱候』はもう我慢の限界だった。何も言わず自らの可愛いお人形たちに蹂躪の命令を与える。

少女が、人形が、いつせいに、同士討ちになることすら厭わず、けれど一切互いを傷つけることなく、正確に彼女に襲い掛かる。

しかし——

「だから、ダメなんですって」  
「なっ——」

彼女はそこにはいなかった。

声はする。気配はする。存在感もある。しかし、この場所に存在しているという事実だけが、なくなっている。

——いったい、どうということなんですの？

思っても、答えなど出るわけが無い。

室内を見渡す、気配を張り巡らす、全ての少女と人形に自らの意識を分離移殖して搜索する。それでも、先ほどまで確かにそこに居た彼女の存在が感じられない。

「ふふ。がんばってくださいね『惑乱候』さん。ワタシは貴女のことを応援してますよ」

そう言うと言みの気配だけを残し、完全に存在が消失した。

疑問と困惑とやり場の無い怒り。そしてノートだけを残して。

## Their ways - 5

Their ways - 5

今日は土曜日です。

土曜日の授業は午前中だけで、午後は部活動や各々好きなことが出来ます。

いつもなら私はキヨウ様と『レ・ペタル』や花園でデートを楽しむのですが、このごろのキヨウ様はいつも考え事をしているようです……。

私が話し掛けるとその考え事を中断して私のほうに意識を向けてくれるのですが、そうでないときはいつも真剣な顔で考え事をしています。

けれど、それに対して尋ねるようなことはしない。キヨウ様は何時だってちゃんと話してくれる。今までだってそうだったし、これからもそう。

私たちは午前中の授業を終えると、そのまま寮の自室に戻ってきた。キヨウ様はいま、私の煎れたレディグレイを飲みながら、やっぱり何かを考えているみたいだ。

そんなキヨウ様のために私は簡単なお菓子を作ろうとしている。考え事をしているキヨウ様のためにと甘いお菓子を作つてあげたいのだ。糖分は考えごとをする時には必要だろう。それに、キヨウ様は甘党ですし。

戸棚を空けるとチョコレートとコーンフレークスが目に入った。それを見て私は何を作るか決めた。即決だ。オレンジがあったかどうかを確かめる。……うん。一個だけだけど前に貰った奴が残つた。

私はチョコレートとコーンフレーク、オレンジ、バターに砂糖を取り出すと、鍋とおろし金を用意する。これで作る準備は万端。

あとは、と愛用のエプロンを装備する。さあ、愛しのキヨウ様のために作るぞ！　そう気合を入れ取り掛かる。

まずはオレンジを塩を使ってきれいに洗う。ワックスなどが使われていると良くないからだ。洗い終わるとチョコレートを細かく砕く。細かく砕けたらそれをバターと一緒に用意した鍋に入れる。鍋は底の厚いのを使う。薄いと焦げ付いたりするから大変なのだ。

鍋を火にかけ弱火で溶かす。沸騰させるとバターとチョコレートが焦げてしまうので注意する。

完全に溶けたところで砂糖を加える。そしてかき混ぜる。

火を止めて、オレンジの皮をすりおろす。この場合使うオレンジは二分の一個。オレンジの皮をすりおろし終わると、スプーンでコーンフレークスと混ぜ合わせる。

混ぜ合わせ、チョコとコーンフレークスが絡まると今度は、平らな場所にアルミホイルを敷き、スプーンでコーンフレークスを適当な大きさに纏めながら置いていく。

後はもうそれを冷蔵庫で冷やすだけ。

「キヨウ様。お茶のおかわりを用意しますね」

「うん。ありがと」

ポットの中はもう空だったので茶葉を取り替えて煎れ直す。

そうしていると、ちょうどいい頃合になったので、作ったお菓子と一緒にレディグレイを持っていく。

「キヨウ様、お茶とお菓子です」

「わ。チョコだね。ありがとう、リン」

私の作ったお菓子は「ローズ・ド・サブレ」という、簡単に言えばコーンフレークにチョコの味のお菓子。だけど、「ローズ」の名前の通り形は薔薇の花の形に似ている。そういう風になっているのではなく、自然とそんな形になるのだ。あくまでも似ているだけだ。

キヨウ様はサブレを美味しそうに食べている。成功のようだ。私も一つ食べる。……うん。チョコレートの味の中に僅かにオレンジ

の風味が出る。即席の割に美味しく出来てると自分でも思う。

私もキヨウ様もコーヒ―は朝だけと決めている。特に理由は無いのだけど、強いて言うのなら私もキヨウ様も紅茶の方が好きだからだ。それに、コーヒ―は身体にあまりよくは無いとどこかで聞いたことがある。……本当かどうかは知らないけど。たしか、胃によくない。

「リンはホントにお菓子を作るのが上手だね」

「ありがとうございます。けど、キヨウ様のためなんですよ？」

「ふふ。うれしいよ」

キヨウ様はそう微笑むと美味しくそうにサブレを食べていく。

その食べ方がとてもちまちましていて、見ていると顔がほころんでしまう。かわいいですキヨウ様。

キヨウ様は性質なのか、あまり食事を摂らない。小食と言えなくも無いがそれでも、摂る量が少ない。けれど、こう言った甘いお菓子は好んでよく食べる。偏食な子どもみたいに感じるときもあるけど、そうではない。キヨウ様は本来食事を必要としないらしい。それでも食事をある程度摂らないといけないと言う。甘いものは好きだから食べるらしいけれど、それでもたくさんではない。精々普通の小食程度だ。

「ねえ、リン」

私は美味しくそうにサブレを食べているキヨウ様を眺めながらぼーっ、とそんなことを考えていた。だから、キヨウ様がいきなりそう声をかけても反応が遅れた。

「……あ、はい」

「後で、ボクに付き合ってほしい」

キヨウ様は真剣な表情だった。なんだろう。いつもならわざわざそんなこと言わないのに。あえて私の確認を取らないといけないことなのだろうか。

なんにしたって、私はいつだってキヨウ様と一緒にいると決めている。キヨウ様がどこかへと行かれるのなら、私もついていく。無

論、ついてこないでと言われれば、悲しいけれどそれに従う。けどそんなことはまずありえない。ありえてもそれは、私はそうしたほうが良いというキヨウ様の心遣いだ。

「わかりました。けど、どちらへ？」

そう訊くと、キヨウ様は若干苦い表情で

「被害者達の所」

とだけ答えた。

私はそれ以上は何も訊かず、食器類を流しにおいて出かける準備をする。

出かけると言ってもこの学園の敷地内から出るわけでもないし、特別な準備をするわけではない。

この学園。部屋の中では基本的に服装は自由にしていて構わないが、部屋を一步でも出るとたとえ寮内でも、ちゃんと制服を着ないといけない。私もキヨウ様も制服を乱していたのでそれを整えなければならぬのだ。……何故乱れているかは秘密。

被害者。そう言われて私が想像できるのは一つだけだった。

キヨウ様がなぜそこに行くのかはわからないけれど、何か意味があるのだろう。それもかなり深刻な。

## Their ways - 6

Their ways - 6

「そう。ありがとう」

ボクはそう言って三人目の部屋を後にする。

「……どれも夜中ですね」

リンの言葉に頷く。

二日前、ボクが呪いの事を気にしだしてから翌日のことだ。高等部内ではある噂が囁かれていた。

「二年生以下の子たちが行方不明になる」

これはこの学園ではまずありえない。

この学園は“結界により隔てられた異界”と言っても過言ではない。むしろそこそが真実の姿であるといえるかもしれない。

外部からも内部からも人をもらさないよう24時間体制で内と外に常駐している警備員。

山一つを切り取った人里から離れた敷地。そこに作為的と思えない十字架型になるよう整えられた建造物の配置。

生徒が外出するにはシスターと寮母の許可を受けねばならず、夏季及び冬季休暇以外の外出は年に二回まで。その外出許可自体がよほどのことが無い限りまず出ないという徹底振り。

そんなこの学園で生徒が行方不明に——それも九人もなるというのは、はつきり言って異常だ。

ボクはこの異常をただの偶然と軽んじることができるほど楽天家ではない。この学園がどういう意図により創られたか知っているからこそ。そして、ボクという存在ゆえに。

しかし、考えた所で何を思いつくわけでもない。

当然だろう。この学園内でこういうことが起きたのは、ボクが知っている限りではないのだから。

雛罌粟やカガミの名で何かが起きたということは今までも何度かあったが、それはほとんどがボクにダイレクトに害を与えてくるものだった。ボク以外に害を与えたのはリンの時だけ。それも一度だけだ。まず予測なんてできるわけが無い。

それでも、この噂が無関係でないということは言い切れる。確証も何も無い。ただの勘だ。けれど、この噂にボクの警鐘は鳴り止まない。

“カガミ”が言うのだ。

——アト、スコシと。

「キョウ様……」

「ん……。なに？」

リンの声に思考に埋没していた自分の注意をサルベージする。

見るとリンの表情が浮かない。まだ三人しか訪問してないけど、きっと、リンも気付いたのだろう。この噂の被害者の——消えた子たちの示すある事実。

「これって、もしかして……」

「勘がいいね」

不安そうな表情のリンにそれだけ言うと、ボクはいつの間止めていた足を再び動かす。リンもそれに倣う。

四人目の子の部屋の前についた。ボクがノックをすると、少しの間、後にドアが開いた。

「誰——っ！ か、鏡さま！？ それに鈴音さままで！？ ……えっと、ど、どういうご用件でしょう……？」

その子も今までの子たちと同じ反応だった。

最初は酷く憔悴した表情。そしてボクたちを見ると慌てる。なんだかボクたちが悪者のような錯覚を受けるが、しかたない。ボクもリンもこの学園では色々有名ならしいから。

ボクはにこりと微笑んで話し掛ける。

「こんにちは。唯さんの妹だよね」

「は、はい」

うん。すごい緊張してるね。ボクは姉と妹のギャップに苦笑を零す。

この子は美術部の皆瀬 唯の妹だ。学園内でのよくわからない制度での妹ではなく、真正正銘血の繋がった。

姉の唯が大人びた印象でつかみ所のない性格なのに対して、妹の——咲ちゃんは、幼くてどこか子犬のような印象を受ける。

「唯さんがいなくなった時のこと、わかる範囲で良いから教えてくれる？」

ボクがそう言うと、咲ちゃんは顔を俯けてしまった。

唯さんと咲ちゃんはかなり仲が良かったと聞いている。きっと、最愛の姉が消えてしまったことがとても悲しいのだろう。

ボクだって突然リンが消えたりしたら、……考えるだけでも恐ろしい。

咲ちゃんは泣くのを堪えるように、声を絞り出すように話し出す。見ていて痛ましい。

「わからないんです。一緒に寝ていたのに、起きたらいなくなつて……」

「……………」

ここもか。

今まで話を聞いた三人、これで四人全員が同じことを言っていることになる。

別に、この証言に疑いを持っているわけではない。ただ、思うのだ。

——なんともソレらしいじゃないか。

と。

とにかく。これだけで十分。

「わかった。ありがとう。ごめんね」

そう言って、立ち去ろうとすると咲きちゃんに唐突に呼び止められた。

「何で、鏡さまがこんなことを……？」

最もな質問だ。ボクは生徒会にも自治会にも所属していない。そのボクがこんなことを訊いて回るのは、不自然でしかないだろう。

「……生徒会長に頼まれたんだ」

勿論嘘だ。

「今回の行方不明者の中にはボクとリンのお友達が何人かいたからね。いても立つてもいられなくて会長に調査する許可を取りに行ったら、会長からも頼まれたんだ」

嘘で無い部分もあるが大半が嘘だ。嘘というのは真実を微量に含ませると真実味を帯びる。ボクとリンは唯さんとも多少仲は良かった。ボクとリンが美術部員なのは高等部生徒なら大抵知っている。当然この子は自分の姉が美術部員であることは知っているのだから、こう言えば人を疑うということ滅多にしない温室育ちのお嬢様のことだ。ほぼ確実に信じる。

「そうだったんですか」

ほらね。

騙していることに多少罪悪感が無いでもないが、仕方がない。情報も少なく、ただ事が起きるのを徒に待つわけにはいかないのだ。これくらいは許容されてしかるべきだろう。

それに、あの会長のことだ。きつと確認を取られても口裏を合わせてくれる。気に食わないが。

ボクは元気の無い子犬と化している咲ちゃんに優しく言ってあげる。

「だから安心して。きつとすぐにでも見つけてみせるから」

その台詞に、咲ちゃんは力なく、それでも微笑んでお願いしますと、頭を下げた。

姉と同じで礼儀はしっかりしている。

ボクとリンは今度こそ立ち去った。

「キョウ様。やっぱり全員、美術部員なんですか？」

ずっと黙っていたリンがいきなりそう口を開いた。

ちょうど、六人目の話を聞き終えて次の子の部屋に向かう所だ。五人目、六人目も今までと同じだった。

——夜寝るまでは一緒に、起きたらいなくなっていた。

まったく、ホントに出来すぎてると思う。

ここまで律儀に行動が一貫されていると、何かがありますよと言ってるのと一緒にじゃないか。

「そうだよ。今日までに噂に上がった九人全員が、美術部員」「やっぱり」

そう。この噂の行方不明者は全員が美術部員だ。このことはリンも気付いていただろう。それでも今あえて訊くのは、自分の知り合いたちが突然行方不明になったことを心配して、不安になっているからだろう。しかも、四日前にボクたちが美術部に顔を出した時に居た部員を筆頭にしているのだし。

考えるのは二つのこと。美術部員を狙っているのならボクとリンも行方不明になるのだろうか。それとも、ボクとリンが居る美術部の子達を狙っているのか……。

今の段階ではわからないが、四日前に参加していた子たちがまず行方不明になっているのに、今の段階では部長は行方不明にならずちゃんと居る。これだけだと部長が怪しくなるけど……。

だが、行方不明者は今の所「二年生以下」のみだ。その選定から三年生という理由で行方不明にならずにいるというのなら、部長が健在なのは別段問題ではなくなる。

わからないことだらけだな。

中途半端に情報を手にしてしまったから余計に。

まあ、とりあえず後三人。九人分の情報が手に入れば何か掴めるかもしれない。もしかしたら、かぎまわってるボクとリンに直に何らかのアクションを起こしてくるかもしれない。可能性は薄い、無いわけじゃない。

そして、この時期に八雲が三日続けて休学しているのも気になる。

さっさと姿を現してくれないものか……。

## Their ways - 7

Their ways - 7

「なんですって？」

自治会員の少女の言葉にわたくしはティーカップをおき、眉をかめてそう聞き返す。

「ですから、鏡さまと鈴音さまが行方不明事件の被害者生徒と同室の生徒たちに、話を聞いて回っているらしいのです」

再びのその台詞にわたくしは目を閉じ、大きく溜め息をつく。やれやれ、という感が出るように。

「これは由々しき自体です会長！せつかく生徒たちに徒に混乱を与えないようにと、生徒会長と会長が事を表に出さずに秘密裏に解決しようとしているのに！」

「そうです！これでは他の生徒たちに徒に不安感を煽るだけです！」

熱っぽくそう言い募る自治会員の——わたくしの可愛く無垢な少女達。

この子たちはホントにいい子たちですわ。わたくしが事を表に出さない理由を本気で混乱縮小のためと信じているのですもの。ああ、けれど、違うんですのよ？そんなたいそうな理由ではありませんの。こんな従順でわたくしを信じきっている子たちを騙すのは心が痛みますけれど……。

そう思っても、わたくしはそんなことを一切表面には出さずに、今まで通りの生徒たちのことを心から思う厳しくも優しい自治会長として振舞う。

「鏡さんも鈴音さんも、何を考えているのでしょうか」

愁うようにわたくしはそう呟いてみせる。

「わたしは、鏡さまも鈴音さまももっと思慮深い方だと思っていま

した……」

「わたしもです。こんなことをするなんて、幻滅です……」

眉を下げ目を伏せて、彼女たちは悲しそうに言う。

「そう悪く言うものではありませんわ。お二人にはお二人なりの理由があつたのでしょうか」

「ですけど……」

なおも不安そうな、悲しそうな表情の女の子達。その常では見れない表情に愛しさを感じつつも、あの二人に対する嫉妬めいた気持ちには禁じえない。あの二人には、学園の生徒たちに一喜一憂させるだけの魅力があるということなのだから。

当然、わたくしにだってそれくらいの魅力はありますわ。けれど、あの二人には及ばない。あの二人がお付き合いをしていることは周知の事実。知らない人などまづいない。それなのに人気が高い。本当に高い。

気に食わないですわね。

「どうしますか、会長」

わたくしは危うく外れそうになる思考を切り上げて、その言葉に答える。

「お二人を注意するしかないでしょう」

溜め息と共にわたくしは椅子から立ち上がる。

「会長自らですか？」

「ええ。お二人にも、ちゃんと理解してもらわねばなりませんでしょう？」

そう言つて上品に微笑む。留守の間のことを頼むと、わたくしは鏡さんたちに会うために会室を出た。

細かい模様の入った豪華なつくりの扉を背にして、わたくしはさて、と意識を集中させる。いつもは閉じている感覚をそつと開く。

瞬きの間もなくすぐにどこにいるのかわかった。

徒人ではけつして気づくことの出来ない、とても美味しそうな香りがしていたから……。

「鏡さん。鈴音さん」

強い口調で名前を呼ばれ、私とキョウ様は振り返った。

九人全員から話を聞き終えても結局、何の手がかりも得られなかった、という事実を手にしたただだったので一度部屋に帰ろうとしていた所だ。

振り返ったそこにいたのは生徒自治会長三年の十条寺茉莉さんだった。なぜ彼女が？とは思わない。生徒たちが最初に頼るのが茉莉会長だということを知っているから。そして、この噂が表におおっぴらに出るのではなく影で囁かれていることを考えれば、彼女が他言無用に、と言ったであろう事は想像に難くない。

それでもこの事件が噂として囁かれてしまったのは、ここにいるのが皆噂好きの女子で、人の口に戸をたてることができなかったからだろう。

「こんにちは、茉莉会長。私たちに何か御用でしょうか？」

何の用か察していながら、それでも私は白々しくそう言う。

私ははつきり言っこの人があまり好きではない。嫌いというほどでもないが、はつきりと好きではない。それはきつと彼女も同じだろう。

「白々しいですわね。貴女たち、自分が何をしているかわかっていて？」

時代がかった喋り方だが口調は丁寧だ。ただ、高圧的で高飛車な感が否めないだけで。

睨み付けるようにしてそう言う茉莉会長に、私はあくまでも微笑んでわかりませんという風に返す。ここで、自分たちが何をしていたか認めてねちねちとお説教されるのは嫌だし、この人に言われて認めるというのが私には我慢できない。

「さあ……。茉莉会長が何を仰っているのか……。私たちにはわかり

かねるのですが」

「嘘おつしやい。貴女たちが行方不明事件の被害者生徒と同室の子達のところへ行き、話を聞いて回っていることは知っていますのよ？」

最初の時も思ったのだが、なんだってこんなやたらと上からものを言ってくるような偉そうな態度の人が、皆の頼りになる自治会長、として人気があるのだろう。私なら、こんな偉そうな人のところには絶対に相談になんか行かない。

それに、私にはキヨウ様がいてくれるので、悩みがあってもキヨウ様に相談すればいい。

そのさつきからずっと黙っているキヨウ様を横目で窺うと、なにやら睨みつけるように目を細めて茉莉会長を見ていた。さつきから茉莉会長がぴりぴりしているのはその所為もあるのかもしれない。

しかし、これは決して睨んでいるのではない。

私だからわかる。これは、必死になって誰だったか思い出そうとしているのだ。

私は苦笑しつつも、キヨウ様にこっそりと誰だったか教えてあげる。

「キヨウ様、あれは自治会長の十条字茉莉さんですよ」

「……………ああ。あの人か」

しばらく黙考した後をやっと思い出したのか、そう呟いた。

別にキヨウ様の物覚えが悪いわけではない。私もキヨウ様も、この人との面識が極端に薄いだけである。

茉莉会長に会ったのは過去に一度だけで、それも一年前だ。それ以来一度として会っていないのだから、覚えていなくても仕方がないだろう。

「お喋りはもうよろしいかしら？わたくしは貴女方とくだらないお喋りをしにきたわけではありませんのよ？」

苛立たしそうにそう言う。だったら用件だけさっさと行ってどこかにいって欲しい。いや、部屋に帰らせて欲しい。私は心からそう

思うが口には出さない。私だってこんな人とお喋りをしたいわけはないのだ。

「わかりました。で、ご用件は？」

これはキヨウ様だ。なぜだか、そのお顔には穏やかな笑みが浮かんでいる。

「貴女方にはもう少し思慮深く行動して頂きたいのですわ。わたくし達が徒な不安感を与えないようにと、わざわざ秘密裏に事を解決させようとしていますのに……、こんなことをされては生徒達に無用な不安感を募らせるだけですわ！」

本気で激昂し愁いているかのような口調と台詞。けれど、キヨウ様はそれをきいて小さく笑った。笑みではなく、声に出して笑ったのだ。

茉莉会長は当然、眉を吊り上げた。会長にしてみれば不審で不快でしかないだろう。私にも何故笑ったのかはわからない。

「何がおかしいのかしら？」

口調にはありありと不快感と怒りが感じられる。それを聞いてもキヨウ様は笑みを消さずに、おかしそうに口をひらいた。

「はは。いや、すいません。そうですね。ボクたちが浅はかでした。すでに九人全員から話を聞き終えてしまいましたが、もうこんなことはしないと約束しましょう」

「キヨウ様？」

キヨウ様の言葉に訝しげに聞き返すが、キヨウ様は微笑み返すだけだった。

茉莉会長も訝しげにしている。当然だろう。笑い出したと思ったらこんどはあっさりと、自らの非を求めたのだから。

「さ、帰ろう鈴音」

そう言つて茉莉会長に背を向けて颯爽と、軽やかに歩き出す。私はなんだかよくわからなかったが、とりあえずキヨウ様の後を追う。「お待ちなさい！」

茉莉会長はこちらを睨みつけていた。キヨウ様は立ち止まると半

歩分だけ振り返った。

「次の被害者が出たら、今度は犯人の所に行くことにします」

「……っ」

「早く戻ってくるといいですね」

目を見開き、絶句している茉莉会長を無視して今度こそキョウ様は一度も止まらずに部屋へと歩き出した。

私もしばし絶句してキョウ様の後姿を呆然と眺めていたが、すぐにその後を小走りで追った。

部屋に帰ったら必ずキョウ様の考えを聞かせてもらおう。

## Their ways - 8

heir ways -

彼女たちが去った後、わたくしは予想そうだになかった事態に思考の海へと没していた。

そこへ突然、背後から愉快げな押し殺す気のないクスクスと言う笑い声が聞こえた。没していた意識をサルベージし振り返る。

「何の用ですの？」

わたくしの口から出た言葉には、不快感と言うエッセンスが塗りにまかれていた。意識してのことではない。むしろ、そうならないように気をつけたくらいだ。それでも、自分で意識できるくらいに不快感あらわな口調。きつと表情も不快感に歪んでいるのだろう。

「ばれてしまったな、茉莉さん？」

わたくしの口調など気にしていないかのように、その人は愉快げに言う。その心底から愉快げな口調が、今のわたくしにはたまらなく腹立たしい。ああ、本当ならこの人にはこんな顔、見せたくありませんのに。

「失礼しますわ」

不快感を表した表情を見せたくないのと、このままではこの人に酷い言葉を投げそうだと思い、わたくしは足早にその場を後にしようとする。

けれど、

「カテドラルが利用できる」

突如発せられたその言葉にわたくしは足を止める。その言葉には先ほどまでの愉快げなものは含まれていなかった。いや、そうじゃない。何も含まれていなかった。

「あそこならたとえ姫の力と言え満足には発せられない」

「……何のつもりですの？」

「黙って聞け。——たとえ学園と言う場所の中にあるうともカテドラルが聖域であることに変わりはない。当然キミの力も満足には行使できなくなるだろうが、キミ本来の力を鑑みればこれはむしろプラスだろう」

そこで一度台詞が切られる。

静かな瞳でわたくしを眺め見やるその人に、頷いて先を促す。

「キミがどういう采配でいく気であるかは知らないが、あまりそのノートに頼らないほうがいいとおこう」

その言葉に少し驚く。わたくしは今ノートを手には持っていないけれどそれをもっていることをこの人は見抜いた。

驚愕に目を見開くわたくしを無視しその人は言葉を続ける。

「そのノートに書かれていることはおよそ正しい。しかし、完全ではない。どう書かれているかは知らないが、『白鬼』と『蟲の蔵』を当てる気なら止めておけ。意味がない。『白鬼』は姫に当てる。

そして『蟲の蔵』にはキミの人形を当てるが良い」

「なぜですか？」

「言っただろ？意味がないからだ。『白鬼』の力は『蟲の蔵』には意味がない。アレはそういうのとは違う。せつかくの良い舞台だ、駒は上手くつかえ」

「どういうことですか？ 違う、とは……」

「言葉通りの意味だ。アレは根本から違い、異なり、外れ、ずれている。だが、それでも頑なに人の側にあるうとしている。ならば、キミの人形のほうがアレには効く」

それだけを言うのと当てていた壁から背を離し、身を翻す。

「話は以上だ。信じるか否かはキミしだいだ」

そう言っ立ち去ろうとするその人に私は疑問を投げる。

「お待ちを！ 何故そんなことを？」

この人には今回のことはおよそ関係のないことのはずだ。むしろ、迷惑なだけでしかないはず。

「つまらない劇は嫌いなんだ」

振り返りも、足を止めることすらせずにそれだけ言い、去っていく。

再び一人になったわたくしは、今度こそこの場を立ち去る。何時までも長居をするにあの子達が心配するだろうし、何より懷疑と言う名の魔物が鎌首をもたげそうだったからだ。

「——わたくしは、貴女のそういうところが嫌いです」

知らぬうちにそう呟いていた。

それは徐々に消えていく。

夜になった。

あの後、部屋に戻るとリンはボクに真相がわかったのかを聞いてきた。当然、というか、ボクには真相がわかっていた。いや、真相などではない。未だに犯人の目的はわからないし、どうやったのかもわからない。けれど犯人が誰かはわかったと言うお粗末なものだ。ボクはそれを説明する手段をもっていなかったし、説明する気もなかった。だからと言ってリンに適当なことを言う気もなく、嘘を言う気もなかった。それにリンもそんなことをしたって納得しないだろうし、すごく怒るだろう。

だから、リンを少々強引なやり方で黙らせた。

ベッドのほうを見る。ベッドの周りには衣服が散乱している。ベッドの上ではリンが裸で白い肌に汗を浮かべ眠っている。その寝息は安らかなものですし、安心する。

ボクの勘と、“カガミ”の言を信じるのなら、焦った彼女は今夜にでもやってくるだろう。

理由はわからない。

考えられるありとあらゆる理由がボクにはある。ボク自身にその覚えがなくても雛罌粟が関係すれば、それは全て、唯一の雛罌粟であるボクのほうに来る。

あるいは“カガミ”にあてられたのだとしても、やっぱりボクのほうに来る。

ボクは、リンにはこういったことに関って欲しくはない。関った結果、昔のようなことにならないと言う保証はない。たとえならなくとももしかしたらと言うことがある。

そう思いながらも、ボクはリンを必要としている。だから、これはボクの傲慢。それでも、絶対にリンを関らせたくない。

ボクは座っていた椅子から立ち上がると、果物ナイフを手にしてリンの眠っているベッドへ向かう。

静かな寝息を立てるリン。その顔はすぐ安らかだ。白い裸体にはボクのつけたキスマークと、首筋と鎖骨あたりの小さな傷跡がある。僅かに濡れ光る恥丘と乱れた長い髪。とても卑猥で、また欲しくなるが、ボクはぐっと我慢する。そんなことをしているヒマはないし、これ以上はリンの負担になる。

ボクは手にした果物ナイフを首筋に押し当てると、力強く一気に引く。

ちゃんと動脈も静脈も切ることが出来たらしく、すごい勢いで血が飛び散る。部屋の中が徐々に鉄錆のような血の臭いで満たされていく。吹き出た血はリンの綺麗な白い裸体を紅く染め出し、ベッドのシーツを紅く侵食する。

急激に減る血の量に多少の倦怠感が訪れるが、苦になるほどではない。

生暖かい悪血に綺麗な白い肌のほとんどを冒されたリンと、鮮血に染め上げられたベッドの様を見て、これくらいで十分だと納得すると血を停める。そして止まった血を今度は留め、傷口を無理矢理にふさぐ。

その簡単な作業を終えると、今度はリンの白い肌を冒す血をベッドのシーツに落としていく。ベッドのシーツを侵食した血を浮き上がらせる。流れ落ちる血と、浮き上がる血は広く薄い、水黙りと言うにはあまりにも足りていない面となる。その面をさらに薄く延

ばしリンの身体を覆わせる。

それを終えると、一息つと同時に軽い眩暈が襲ってきた。流石に、急激な能力の行使に身体が耐えられなかったようだ。消耗が激しい。事が始まる前にこれでは先が思いやられるが仕方がない。絶対にリンを傷つけさせるわけにはいかないのだから。

ナイフについた自分の血を舐めとるとテールブルの上に置き、クローゼットを開ける。多分、あのナイフはもう使い物にならないだろうな。とどうでもいいことを考える。

クローゼットの中には制服の夏服の他に幾つかのトランクが収められている。その中から黒いのを取り出す。

黒いトランクにはボクの服が入っている。その着ている服を脱ぎ、中の服に着替える。ノースリーブとホットパンツと言う露出の多いモノだが、それでいい。いや、ボクにはこれがいい。

トランクのポケットに入れていたナイフを数本、腰のベルトに刺す。

さあ、これで、準備は整った。

あとは素適にエスコートしてくれるマドモアゼルを待つだけ。

それにしても、ボクはふと思うことがあった。

——“カガミ”の呪いにしては質が低い。

と……………。

## Their ways - 9

Their ways - 9

さて、

「そろそろかな……」

小さく、蝋燭が灯るような声音でそう呟く。

扉の向こうから聞こえてくるのは静寂と言つ名を借りた異常。

廊下から漂うは人の姿を使う異貌の気配。

いくら時間管理が厳しく消灯時間の早い、皆の寝静まった寮内と言えど、静寂という音が響くわけがない。部屋の中にまで侵食しているそれは、向こうの過剰なまでの慎重さを表しているのだろう。

——なんだ。わかつてるじゃないか。

ボクはそう嘲笑せずにはいられなくなった。

リンを起こすことは絶対に避けたいので、ただ、口元と気配だけで嘲笑する。たったそれだけのことで、室内の静寂が霧散する。

ああ、なんて。

——脆弱。

廊下からは幾体かの人のような気配。けれど、それはあくまでも「人のような」であり、人ではありえない。

喜怒哀楽、緊張、殺気。考えつく、ありとあらゆる人が発する気配を押し殺すでもなく隠すでもなく、存在していないという違和感だらけの気配。

どう来る気かは知らないが、ボクから出て行ってやるよ。

嗚呼、なんて久しぶりの感覚だろう。

リンとの交わりとはまた違う、高揚感と興奮。認めよう。どれだけ嫌悪感を示し、憎悪を抱こうとも、ボクにも確かに雛罌粟の血が流れている。この言い表せれぬほどの歓喜。ああ、早く、振るいた

い。ボクと言う存在の全てを。ボクだけに赦された生命の冒涇を！  
さあ、ご対面だ。素晴らしい舞台を用意してくれているのだろうか？

——興ざめなんて、させないでくれよ？

がちやり、と、あえて音が鳴り、響くようにノブを回し、扉を開ける。そのまま警戒心も危機感も何もなく、無防備に姿をさらす。

「リンを起こすのは止めてもらえる？」

ピタリ、と人形の動きが止まる。

そう人形だ。目の前に居る数人の少女達の顔は見覚えがある。数日前にも見たばかりだ。同じ美術部の、行方不明になった、生徒たち。

その姿には生気が希薄で、瞳は虚ろで、ボクが出てきたことにも停止と言う反応以外まともな反応を見せていない。操り人形、という単語が思い浮かんだ。

「さあて、どうするのかな？」

拍子抜けなことに、あの後人形達は何もせずに踵を返した。ゆつたりと。ボクはとりあえず無言で踵を返しどこかへと歩いていく人形達についていくと、普段は絶対に入らないカテドラルへと辿り着いた。

なるほどね。

ある程度は考えているらしい。たしかにここならばボクはまともに行動できない。けれど、些細なハンデだ。その小賢しさは微笑ましくもある。

重厚な扉を開けて中へと入ると、行方不明になっていた生徒たちが居た。皆、ボクを連れてきた人形と同じ状態になっている。唯一の違いは、その手に銀色の凶器を持っていることだけだ。そのボクをつれてきた人形達も、何処からか凶器をとりだし、だらり、と構える。

剣、槍、斧、どれも銀製だ。本気でボクを殺す気で居るらしい。

「ク、クク……。クフフ、ハハハハハハハ」

嗚呼——。嗚呼、いいよ。とてもいい。

ボクはこれから起こる久しぶりの舞台に、これ以上ないくらいに興奮していた。はやく、はやく踊りたい。

「……話には聞いていたけど、すごい変わりようだな」

呆れたような、感心しているような、そんな声が聞こえた。それは聞きなれた声だった。その声はなぜか上から聞こえた。

「やつぽー鏡さん。三日ぶり」

見上げると教台奥の聖人が貼り付けられている十字架像の上に、行儀悪くあぐらをかいて座る八雲がいた。なぜか笑顔でぴらぴらと手を振っている。

「……居ないと思ったら。こんな所で何してるの？」

ボクの呆れた言葉に彼女は、うーん、とか腕を組みながら唸る。

彼女の予想していなかった参加に、ボクは徐々に冷めていく。きつと、彼女のこの舞台への参加は、最初から決まっていたのだろう。それに気づかず、あえてその可能性を考えから省いていた自分に、多少の困惑と怒りから、正気を取り戻す。

——ボクを侵食するな……！

強く自分の中の“カガミ”にそう言うと、急速に頭が、感情が、身体が、クールダウンしていく。

それでいい。ボクは雛罌粟とは違う。狂気に染まり、狂喜に浸るなんて事はしない。したくないっ……！

「……私さあ、脅迫されてるんだ。『馬車馬のように働かないとどくなってもしりませんわよっ！』てさ。だから——」

よいしょ、とか言って立ち上がりながら、彼女は

「ここで倒れて」

一瞬でボクに肉薄し、凄まじく勢いのある回し蹴りを放った。

「っ！」

ボクはそれをとっさに腕を上げてガードするが、鉄バッドで殴られたかのような衝撃によるめく。

予想以上だ。此処に居て正気を保っているのだから、普通ではないのだろうとは思っていたけれど、これは普通とかそんなレベルじゃない。明らかな異常だ。

「あれ？骨くらいはぶち折れると思ったのに、結構平気そうなんだな」

「いや、結構痛い……」

呆れたように漏らす彼女に、ボクは苦笑気味にそう返した。

確かに異常だ。けれど、その程度だ。骨を折る？この程度で？誰の？ボクの？ふざけるのも大概にしてほしい。

「さあ、て。じゃあ、はじめようか」

ぽつり、とそう呟き、ベルトに刺していたナイフを二本取り出す。それを見て、警戒するように構える八雲。ボクのクラスメイトにして友人だと思われる人物。対照的にいつせいに動き出す人形達。

同じ部活の、つい数日前に顔を合わせた。その中にはボクと互いを描きあった詩織ちゃんの姿も、リンと結構な仲の良い唯さんの姿もあった。

ボクはナイフを自分の腕に押し当て、すつ、となでるように引く。強く、深く。勢いよく噴出す鮮血。

同時にそれぞれの銀製の凶器を繰り出す人形達。

剣が切りつけてくる。

槍が刺し穿とうとする。

斧が叩き切ろうとする。

けれど、

硬質的な音とともにそれらはボクの肌に触れることすらなく、停止する。

「へえ、それが……」

八雲の感心したような呟き。

無表情に、数と力だけで押し切ろうとする人形達。

それらを受け止めるボク。その手には飾り気も何もない無骨な直剣。その色はどす黒い赤。血臭を放つそれこそボクの、異能の顕現。

血を自在に操作する。

血には鉄化合物が含まれている。操作とは『自分の都合のいいように手を加える』ことを指す。ボクは血中の鉄を都合よく増加させることにより、自らの血を、刀剣類と同等の高度を持つ武器にまで変質させた。

銀製品は柔らかく傷がつきやすいため普通ならば、純粋な状態では使用しない。けれど、それだとボクには、ボくらには全く意味を為さない。

だから、この人形達の持つ凶器は、純銀。ボクには一撃重傷の凶器でも、武器としては劣悪。硬度を鉄と同等まで引き上げたボクの鮮血を押し切ろうとして、勝てる謂れはない。

ボクは停止した状態から一気に身体を旋回させる。押し込むように。引き裂くように。

人間とは違う力で行われたそれに、人形達はたまらず吹き飛ぶ。無理に力で押し切ろうとしていた銀の凶器の幾つかは、それで中ほどから折れていた。

「うーん。流石だね」

感心したようにそう言う八雲からは、敵対心や警戒というものが感じられない。

「聞こえているよな。無意味だから彼女たちを使うのはもう止める。目障り」

虚空に向かってそう言うと、悩むような間を置いてから、起き上がり再び攻撃しようとしていた人形達が、糸が切れた操り人形のようにくず折れた。

「一人で向かってくる気？」

「私はあいつとは違うからね。無関係な子達を巻き込むのは避けたい」

「さすが。優しいね」

「それはアンタもだろ。鏡。得物をにしかダメージがいかないように力を抑えていた」

「誰かを無駄に傷つけるのを鈴音は嫌がるから。下手なこととしてバシたら、後で怒られるし。泣きながら」

「ああ……。それはちよつと、いやかなり、効くな」  
「でしょう？」

そう言つて苦笑しあうと、無駄口は終わりとばかりに、ボクも、八雲も、互いのスタイルで構える。

なぜ、彼女がボクの前に立ちふさがっているのか。脅迫とは何のことなのか。そんなことはどうでもいい。

ただ。踊りたい。

そのためなら、その相手として申し分ない働きをしてくると言うのなら、ボクは誰が相手だろうと構わない。

聖なる場所で二つの不浄は軽やかに動き出す。

——精々楽しませてくれ……！

果たしてそれは、ボクの意味か“カガミ”の意味か。

## Their ways - 10

Their ways - 10

「ハアッ!!」

裂帛の声と同時に、寸前までボクが立っていた床が穴をあけて碎けた。

バックステップで軽やかに交わしたボクは、拳を床に繰り出した状態の八雲が体勢を立て直す前に、鮮血で襲撃する。

ヒュッ、という空気を裂く音と同時に、八雲を切りつけるはずだった剣は、逆立ちのような態勢で蹴りを放った八雲の足によって軌道をずらされた。ものすごい力だ。手がびりびりと痺れる。

「すごいバカ力」

「そう? まだまだ全力じゃないんだけど?」

そう言っただけを一言づつ交し合うと、再び幾度目かの激突をする。

剣を薙ぐ。拳で迎撃する。突き穿つかのような拳が放たれる。それを剣を直に立てることで防ぐ。

綺麗な、ガラスの割れるような音と共に剣が中ほどから碎ける。

硬質化を解き、剣を血液へと戻す。ビチャビチャという音と共に液体へと戻った血が床を汚す。

八雲はこちらが動くより速く動き、薙ぐと言うよりも斬りつけると言ったほうがいいかのような蹴りが放たれる。それを足ごと叩き切るような勢いで、残った一本の剣で防ぐが、蹴りの強さに負け、逆に叩き折られた。それも硬質化を解き血液に戻す。八雲の足と床を血が汚す。

「うわっ! 血なんか付けないでよ!! うあー……生暖かい」

心底嫌そうにそう零す八雲に苦笑しながら、

「うまくよけなよ」

止めていた腕の血を解く。一気に出すと負荷が大きいので少しだけ。それを腕を振るうことで飛び散らす。

「おっ！」

散弾純のように乱れ飛ぶ血の飛礫。八雲はそれを大きく横に跳んでかわした。もともと八雲がいた場所の後ろの長椅子が、蜂の巣になった。追撃すべく間断なく幾回か行うが、全てをかわされた。

「血を自在に操れるって、なんでもあーりか!？」

追撃が来なくなると八雲はそう言つて怒鳴つた。いつもと変わらない八雲の口調に、少し笑みが零れる。

「ホントに、何でもありだよ」

ボクは笑みを零しながらそう言うと、初めて無手で八雲の懷に飛び込んだ。瞬きの間さえおかず距離を詰め、手刀を放つ。八雲はそれを上半身を少し逸らすだけで避けた。

— と思い込んだ。

「つゝ……」

八雲の頬を薄くではあるがボクの鮮血を纏った爪が切りつけた。人外の腕力により振るわれたそれは、軟鉄くらいであれば用意に切断可能だ。それに追加で薄く引き延ばした、刃物と化した血による斬撃。長くなり間合いも延びたそれを、上半身を逸らすだけで避けられるはずはない。

八雲は、やられた、という風に顔をしかめる。即座に体勢を立て直そうとするが、ボクがそれを許すわけがない。

肉薄した状態で極小さな動きだけで、薙ぎ、突き、払い、斬りつける。膝蹴りを放ち、肘鉄を撃つ。それをかわすでなく迎撃する八雲。けれど、

——ボクのほうが速い。

八雲の鳩尾にボクの放った膝蹴りが当たる。八雲はその威力を使って後ろに大きく跳び去った。膝蹴りは当たっただけだった。

「……いったあ。そう言えば、鏡も鬼なんだよね」

忘れてた。と八雲はぽつりと呟いた。

鬼。それは別に、昔話にあるような肌が赤だったり青だったりする、頭に角のあるあの鬼のことではない。『鬼』とは人の姿形をした、人から外れた異貌の総称だ。けれど、

「それは勝手にそう呼んでるだけだろ。ボクはあんなのとは違う」  
憎々しげにボクは吐き捨てた。確かにボクは人から外れている。  
肉体的なことだけじゃない。思考も精神もそのありようも。それでも、ボクは、『鬼』なんていうのといっしょにはされたくない。あいつ等とは違う。

——なら、お前はなんだよ？

嘲笑うかのような、侮蔑するかのような、呆れるかのような、むしろそれら全てを含んだ台詞。胸の奥。頭の奥。心の深。響くかのようなそれをボクは無視する。

ボクにはまだ、それに対する答えはない。

「そうだな」

ぽつり、と消え入るかのような小声で八雲はそう呟いた。とても悲しそうで、哀れな感じの声だった。

——八雲も……

「——けど、そんなこと言ってるヒマはないんだ。悪いが、そろそろ全力で行かせてもらう」

そう言うと、八雲の気配が変わった。

ドクン、と身体が震えた。

——やばい

誰の意思だろうか。その考えが、思いが、何かを思っひまも、考えるひまも与えず、八雲へと攻撃を繰り出していた。

腕を振るい、鮮血の散弾を。

それに続くようにして、血を纏った爪で襲い掛かる。

狙うは一撃必殺。必ずしとめない。殺さないと。今。

八雲はただ突っ立て居る。殺せる。殺れる。首をはねれば終わる。殺せ。殺れ。早く。速く。疾く。

けれど、

ビチャビチャッ——バシヤッ。

そんな音がした。

手首をつかまれた。

両腕に生暖かいものが伝う。

三半規管が急激な負荷を訴える。

腰に痛みが走る。

「っ……」

「すまないね。こつちにも色々事情があるんだ」

ものすごい勢いと力で投げ飛ばされたらしい。長椅子の幾つかを巻き込み破壊しながら、ボクはその残骸に埋もれていた。

身体の上に乗っている椅子だった木の残骸をどけながら起き上がる。腕に生暖かい感覚があった。見ると、留めていた血がなぜか流れていた。ホントになぜ、だ。ボクの鮮血操作はボクが一度命じれば、次の命が出るまではそのままだ。ボクは、『留める』という命を解いていない。『流せ』なんて命は出して——

「ガハッ——オエッ………ゲホッゲホッ」

な——！？

そこまで考えたところで、ボクは盛大に吐いていた。異の中のものごとく逆流する。苦いような、すっぱいような味が舌を刺激する。胃液まで吐いたらしい。気持ち悪い。

「きついだろ？これで諦めてくれると助かる」

そう言う八雲の哀れみを含んだ声。顔を上げ、見ると、そこには八雲だった者が居た。

いや、あれは八雲だ。立ち位置も同じ。姿形も同じ。声も同じ。ただ、気配と、色が違うだけ。

「お前……」

「……私も、人じゃないんだよね」

寂しげにそう言う八雲の気配は、とても不快で、すぐにでも殺したくなるものだった。怒りや憎悪ではなく。不快さと不愉快さと、

存在そのものを脅かす恐怖。それから逃げたいから、排除したいから、殺したい。

今の八雲は普段とは明らかに違う。肩口までだった髪は、腰あたりまで長くなり、色は病的なまでの白。瞳は蒼く輝いてすらいる。「鏡も、聞いたことくらいあるだろ？極東最強と謳われ、同種殺しと蔑まれる異貌討伐一族、『色鬼総衆』を」

『色鬼』。数種ある鬼の中でも群を抜いての稀種。極東のこの地にしか存在せず出来ず。それでも極東最強と噂され、同種殺しと忌み嫌われる。存在するあらゆる『鬼種』と異なり、人の世の守護者として存在する。

『色鬼』は六色からなり、色によって能力は違うが、色ごとの能力は固定されており代を重ねることにより強くなる。色は身体に出るため判別はしやすい。八雲はきつと『色鬼』の中でも性質の悪い『白鬼』だろう。

困ったことに、ボクはここまでしか知らない。雛罌粟は『色鬼』とやったことがあるらしいが、珍しく『二度とやりあいたくない』と漏らしていたのを覚えている。狂気に浸っている奴らがそう表面で言うのだ。それだけの力を持っているのだろう。

——厄介だな。

そう思いながら、血に命令するが、まったく反応しない。もしかしたら、と思っていたが、案の定、八雲に何かされたらしい。

「無駄だ。私は一切の不浄を浄化する」

ボクのしようとしていることを悟ったらしい。八雲は冷たくそう言い捨てた。

「それに、ここはカテドラル。聖域だ。アンタは力をまともに出せないんだろ？」

だから、もう諦めると、そう言う。けれど、はいそうですかと引いてやる気はない。八雲自身にこちらに対する敵対心が希薄でも、八雲を脅迫している奴は——今回の犯人は、そうではないのだ。

——さて、どうしたものか。

八雲をどうにかしないことには、後ろの奴に辿り着けない。  
——殺せたら楽なのに……。  
危険な思考をしている自分に、ボクは気付かなかった……。

## Their ways - 11

Their ways - 11

「そろそろ諦めないか？」

冗談。

唇が笑みの形につりがる。

鮮血を使えなくされたボクは先ほどからほとんど防戦一方だった。

『白鬼』と化した八雲は先ほどまでとは段違いの強さを表している。腕力、速さ、そのどれもが強くなっているのだ。けれど、裏を返せばそれだけだった。

確かに、『白鬼』の『浄化』の力は鬱陶しい。ボクの鮮血が使えないということもそうだが。それ以上に不快感も恐怖感も、そのどれもが拭えない。マイナス感情がボクの枷となって思った通りの動きをさせてくれない。

けれど、それだけ。それだけなのだ。『色鬼』の能力はそのどれもが強力なのだろう。だが、『色鬼』の力とは一つだけだ。その色が意味する力それ一つ。一つだけだから強い。その一つだけを延々向上させればいいのだ。他に回すべきを全てそれに回せる。

先ほどから鮮血を行使しようとするが使えない。最低でも、このカテドラル分くらいは力が及ぶということなのだろう。普通なら、ここを出て戦おうとするだろう。だが、ボクにそんな気はない。カテドラルそのものの聖浄さもボクにとってはマイナスだ。八雲がそう簡単にここから出ることを許す筈が無い。

だが、それ以上に。

—— 楽しい

あの雛罌粟を皆殺した時でさえボクの力は圧倒的だった。誰もが及ばなかった。なのに、今はどうだ！ 互角どころか押されている。

八雲の長い腕が蛇のような軌道を辿りながら拳を放つ。その変則的な動きと素早い突きを、ボクは八雲の足に払い気味の蹴りを打つことで無力化を狙う。ゴリツ、という音共に痛みが走る。アバラを何本か折られたようだ。クリーンヒットしたはずのボクの蹴りを受けも八雲は動じない。それどころか、さらに攻撃を仕掛けてくる。鮮血を使えず、ただ人より強いだけの力しか使えないのがこんなにも不便で、弱化することだとは。

『白鬼』の『浄化』。たしかにすごい。けれど――

何本もの軌跡を描きながらの鋭く、疾い、蛇のように不規則な連撃。腕でガードしながら耐えるが、そのうちの何発かは、ボクの腕を通過していく。八雲の優しさなのだろう。首から上にはまったく打ち込んでこない。

――殺したければ心臓か首を持っていくしかにというのに笑い出したくなるのを堪えながら、ボクは始めて八雲の腕を掴んだ。

「――っ!？」

八雲の先ほどまでの無機的な顔に初めて驚愕の色が浮かぶ。何をそんなに驚いているのかがボクにはわからない。これくらい、当然だろう？

グイッ、と掴んだ腕を無造作に引っ張る。ボクは肩膝を上げ、突き出す。突如加えられた力に八雲は抵抗したが虚しく、いいように引っ張られ、ボクの膝が八雲の腹に突き刺さる。そのまま腕を放して蹴り上げる。

八雲の力は確かに強い。けれど、一つしかネタの無い奇術師に何ができる？

「いい事を教えてあげよう。八雲」

ボクは腹を抑えて苦悶の表情を浮かべる八雲に優しくそう語り掛ける。顔を狙わないという、乙女に対する紳士的行為のささやかなお礼として。

「キミの『浄化』は確かに『不浄』を浄化する。現にボクの鮮血が

まったく使えない。けれど、ね。それだけなんだよ」

何を言ってる、みたいな疑問の表情の八雲。

「キミは『不浄』とは何を指して言うか正しく理解しているかい？  
キミはどうも不浄とはボクらのような人外そのものとそれに連なるモノを指すと考えているようだが、それは誤りだよ。不浄とは、罪や穢れを言う。確かにボクみたいなのは罪深く、穢れきっているだろう。なんたつて、血を分けた一族を殺しているし、他人の命を利用して生きている。けれどね。本来、生まれ出命に罪も穢れも無いだから、罪も穢れも生きるという過程で否応も無くついてしまうものだ。そのため、命に存在そのものに罪も穢れも無い」

「——っ！？うあああああ！——」

「煩いよ。顔に裂傷が走ったくらいで。」

……ボクのこの鮮血も、不浄であることには変わらないだろう。血とは、『血液とは命そのものであり、生命の象徴である』だと言うのに、ボクの鮮血はそれを簡単に操作する。神ですらそうそう都合よく生命を弄ばないというのに、ボクはそれを容易にやってのけてしまう。傲慢もいいところだ。まったく罪深い。傲慢は、オリジナリ・シンの筆頭だというのに。——けれど、血そのものには不浄も何も無い。それを操るボクが罪深く、その能力が穢れているだけなのだから」

ボクは長々とした話を終えると、ふう、と一息ついた。今は、それだけの余裕がある。

八雲を見ると、端正で綺麗な顔に醜い裂傷が走っていた。そこからは、およそ顔から出ているのだとは思えないほどの鮮やかな赤い血が、止めどなく流れ出ている。

それだけではない。よく見れば、服のあちこちが赤く汚れている。ボクは八雲に歩いて近寄ると、八雲の着ている服を引き千切って、肌を露出させた。『白鬼』と化しているためか真白い肌には、乳房といわず腕といわず醜い裂傷が走っている。そのどれもから、おびただしいほどの血が流れ出ている。

八雲は息も絶え絶えで、ボクを睨みつけこそくるが、もはや動く気力も無いらしくされるままになっている。それでも女として恥ずかしいのか、腕で胸は隠していた。――ちよつとだけ意外に思い、苦笑が零れた。

「ふうん。さすがだね。この程度ですむなんて。けど、もう動けないでしょ？そのまま居てよ」

ボクは冷たい声でそう言う。八雲は睨みつけたまま、動こうとしてはいるが動けないでいる。

ボクは別に何かをしたわけじゃない。ただ、八雲が少しだけ不注意だったにすぎない。

ボクらはまず『人間』ではない。姿形は似ているが、明らかに違う。ボクを例にすればまず、ボクは『人間のような食事』を必要としない。あんな肉隗や、植物を摂取したところで意味が無いのだ。ボクが必要とするのは『生命の象徴』。それを他者から摂取することがボクの食事。確かに、中には例外として『異食症』の患者で血を食すものがいるが、あれは病気であり、それを食せねば死ぬというわけではない。ボクたちの場合は生命の象徴を摂取せねば死ぬ。他の物で代用など出来ないのだ。

これだけで、人間とは違つと十分に言える。存在としても。その在りようも。

八雲は『白鬼』化する前に、一度ボクの血を摂取してしまった。いや、厳密に言うのなら、摂取させた。それはとても微量であったが関係無い。血は身体を廻る。廻れば体中を周る。その結果が今だ。

人間でも違う血液型の血を摂取すればそれは毒となる。それがちがう生物の血ともなれば尚更。

ボクは人間とは違う。

ボクは他者の命を必要とする。人間のそれよりもより正しい意味で。

そんなボクの血が、猛毒でないはずは無い。

確かに、八雲も人間ではない。むしろボクたちよりだと言える。けれど、明確には違う。ボクなんかよりはよほど人間的で、綺麗だからこそ、彼女は気をつけなければならなかった。

綺麗なもののほど汚れやすいという事実を正しく知らなければならなかった。

「安心しなよ。別にこれ以上傷つけるつもりはないから。キミは、鈴音にとっても大切な友人だ。あまり酷いことをすると、後で怒られる。泣きながら」

「……そりゃ……、きついね……」

ボクの軽口に八雲は息も絶え絶えにそう言っただけ苦笑した。

「けどさ、……ここで、終わるわけには……いかなのよ」

「そう。けど……」

よろよろと立ち上がろうとし、それでも立ち上がることの出来ない八雲。その声には苦々しさと、強い思いが込められているようだった。

けれど、

「悪いけど、そんな状態のキミと踊る気はボクにはもうない」

八雲とのダンスは愉しかった。それをまたできるのだと思うと心が踊る。ここまでボクと互角に踊れた相手もはじめてなら、ここまですぐボクが傷つけられたのも初めてだ。ここで、こんなつまらない終わり方するのはつまらない。できることなら、まだ踊っていたい。もっとももっと愉しみたい。けれど――

ボクは、睨みつけ、立ち上がろうとする八雲を

「――っ、が」

蹴りつけて、黙らせた。

持ちネタが一つしかない奇術師のネタがわかってしまうと、途端にしらけるものだ。たとえそれがどれほどすごいのだとしても。

あまり力をいれずに蹴ったのだが、八雲は弧を描いて吹き飛び、床に激突するとそのまま動かなくなった。

――これ以上傷つける気は無いとか言いながら、蹴り上げてしま

った……

そう思い、なんとなくばつの悪い気分になるが、とりあえずその事実は無視した。

ふいに、流れていたボクの血は突如に止まった。

見ると八雲の髪は元の長さで色に戻り、あの不快な気配も消えていた。『白鬼』化が解けたことにより『浄化』の力は消え、ボクの鮮血が力を取り戻したようだ。そのため、鮮血に出していた命令が再度実行されたのだろう。

同時に、幾つか出来た打撲や骨折も修復されていく。切り傷だけは修復させない。まだ終わっていないから。

「——お、と」

不意に立ちくらみに襲われる。ただでさえ力を消耗したところにさらに力を消耗しダメージを負ったのだ。当然だろう。傷は治ってもダメージまで消えるわけじゃないのだ。

——餌が在るだろ？

今まで以上に強くはつきりと“カガミ”の声が聞こえた。はやく終わらせないとマズイ。

## Their ways - 12

### Their ways - 12

苦悶を浮かべたまま気を失っている八雲を、邪魔にならないように脇にどかしておく。黒幕との対面が穏やかに終わるとは思えないからだ。きっと、八雲以上に物騒なことになるだろう。きっと、うれしいダンスになる。

八雲はいたるところに醜く痛々しい裂傷を負っている。血は中途半端に固まりそれが余計に酷く見せる化粧になっている。

ボクは留めていた自分の血を八雲の傷口に少量ずつ垂らす。ボクの血は八雲の血と強引に混ざり、固まった血を溶かして行く。解けた血は傷を覆い徐々に八雲の身体に侵入していく。

集中しろ。

そう自分に命令する。念じるのではない。命令する。自らを只にして唯の『命を弄ぶ』装置としてのみ認識する。操作する。行使する。

血は酸素や栄養を細胞に運搬するためだけの媒体ではない。機能だけを見るのなら臓器の一種と言っても過言ではない。

血は『生命の象徴』。故に血は使い方しだいでは命を奪うことも修復することもできる。命の造作以外は。

血には傷の修復機能がある。本来それは時間をかけて徐々に行うものだ。だが、ボクはそれを無視して、血を操作することにより、傷を治す。

血小板を凝集。血管収縮による止血。壊死組織をマクロファージに取り込ませる。繊維芽細胞が肉芽組織を分泌。それによる収縮。組織が安定していく。コラーゲンが傷を修復していく。

それら通常数日かかる治療を瞬時に行う。肉体に負担がかかるが

仕方がない。早いうちにこの傷は治療する必要がある。でないと、取り返しのつかないことになる。いや、それならまだいい。最悪感染する。それだけは避けたい。

八雲の顔や身体から、全ての傷が消えた。完全に修復したようだ。傷跡も残っていない。そうなるように注意してやったのだから当然か。

今度は八雲の体内に侵入させた血を、一箇所に集めさせる。八雲の体内を廻る血液から独立させる。

「ガッ、――」

八雲の口から血が吐き出される。これで、完全とは言えないものの最悪の事態は避けることが出来た。あとは、八雲しだいだが、まず死ぬことはないだろう。

――もったいない

「黙れっ！」

くすくすという哄い声が内に響く。身体がだるい。若干、意識が危うい感じがする。

手近な長椅子に手をつき、息を整える。知らず、息が上がっていた。

「――流石ですわね」

傲慢で高飛車な感じのするつい最近、いや、数時間前にも聞いた声がした。

声のしたほうを向くと、ステンドグラスから入る月光を背に、優雅に佇む茉莉会長が居た。月光をうけて煌く煌くブロンドの髪が美しく映え、一枚の絵画のようでもある。

ボクはようやく現れた今回の犯人に、特に何かの感情を抱いていない。

今回のことで利用された生徒たちや、彼女等と同室だった子達は気の毒だが、それだけだ。リンに手を出さないのであれば、ボクはどうしようとも思わない。

――あるいは、ボクに何かをするというなら、それに乗ってやる

が。

「ソレが噂に聞く雛罌粟の『四花弁』ですね」

“四花弁”か。久しぶりに耳にした。

“四花弁”。それは雛罌粟の使う異能の総称。いや、『雛罌粟』という存在そのものといっても過言ではない。独自に手に入れたこの異能故に、本来の名を捨て『雛罌粟』という花の名を得たのだから。

「やっと出てきてくれたんだね。八雲なんかを使わずに、さっさと出てきてほしかったな」

ボクは、本心とは真逆のことを口にする。現状ははっきり言って最悪だが、満たされた、というにはあまりにも足りないが、八雲とのダンスは愉しくはあった。

ボクのこの状態で満足に踊れるかどうか、多少心配ではあるが、まあ気にしない。この疲労感もぼやけたような意識も、なにもかもひっくるめて今のボクは機嫌がいい。

——嗚呼、まずいな。“力ガミ”の意思に冒されかけてる。

そう思うが、だからと言ってどうこうすることはできそうに無い。精々最後まで足掻いて自分の意識を保ちつつけよう。

はあ、という溜め息が聞こえた。あからさまでわざとらしい。

「八雲さん。意外と使えませんでしたのね。——予想の範囲内とは言え、早過ぎますわ」

八雲の方を冷たい視線で一瞥してそう漏らす。その声には言うほど落胆は感じられなかった。むしろ、どこか嬉々とした感じが感じられる。

ボクはゆっくりと手をついていた長椅子から放し、八雲から離れ、茉莉会長に近づく。

「結構お辛そうですね」

「そうでもないさ。意外と、気分がいい」

「あら、そうですのか？けれど、満足に力は使えないのでしょうか？」

「いいハンデじゃないか『惑乱候』。それとも、ヴィスコンティエ

侯家が令嬢、メルデイス様と呼んだ方が良いかな？」

そう言って恭しく貴族相手の礼をしてやる。その嘲笑を含んだ態度に、しかし彼女は以外に冷静に返した。

「あら。知ってらしたのね、わたくしの本名。嬉しいですね。まさか鏡さんに知ってもらえてるなんて」

そう言って心底から嬉しそうに浮かれ出す茉莉会長。

なんだ？

そう思うが彼女の奇行の理由がわかるはずがない。

「けれどね、鏡さん。現在侯爵の位はわたくしが正式に継いでいますの。だから、令嬢というのはやめてくださいましね。それに、五家しかない公爵位の貴女に様付けで呼ばれるなんて恐れ多いですね。御戯れは、ほどほどにしてくださいな」

「……………」

ほんとに何なんだ？上機嫌だったボクは、段々とこの不可解な茉莉会長の奇行でイラついてくる。興醒め、とはこのことを言うのだろうか。

ボクはこの熱が冷め切ってしまったといううちに、と茉莉会長へ向け跳躍し血の散弾を撒き散らす。

硬いものが硬いものに当たる音が連続的に鳴り響く。ガラスの碎ける音、木の爆ぜる音がそれに、瞬きの間すら置かずに続いて響く。「乱暴ですね」

茉莉会長の呆れたような声が左手側から聞こえた。向けば、茉莉会長は腕を組んで壁に背を預けて立っていた。どうやら、一発も当たっていないようだ。

そうだ。それでいい。

「噂に違わぬ狂気ですね。普段の面影がほとんどありませんわ」ほとんど、か。と言うことは普段のボクラしさがまだ残っているということか。さて、喜ぶべきか落胆すべきか。……今のボクにはどうでもいいか。ただ、愉しくなってきた。心が弾む。

今度は血を刺突剣へと変じて疾駆し突き刺す。狙うのは頭でも心

臓でもない。愉しむなら一度にではない。ゆっくり、じっくりと。  
だから、まずは、その綺麗な腕を。

風ですら穿つほどの速さの刺突を、茉莉会長は

「なっ——」

人形——詩織ちゃんを使って、……止めさせた。

詩織ちゃんは無反応だった。ただそこに居るだけ。その目には生気がない。いや、詩織ちゃんそのものに生気がない。目の前の詩織ちゃんを生きていると言っても誰も信じないだろう。どころか、死体だといっても通用しないだろう。

人形。目の前に居るのは、生物としての自由すらをも奪われた人形だった。

「うつふふ。危なかったですわ。危つく、傷ものにされるところでしたわ。わたくしも、この子も」

そう言つて、詩織ちゃんの頬を愛しげになでる。陶醉したような目。優しく語りかける口調。

惑乱候の名が示す通り、彼女は他者の心を惑わし、自由を奪い、尊厳を踏み躪り、完全なる隷従を強制する。そこから徒人が抜け出せる謂れはなく、己の命すら賭して主に傳く。

「お氣をつけ下さいまし。下手をすると、貴女や鈴音さんのお友達をその手に掛けることになりますわよ」

そう言つて、詩織ちゃんの頬から手を放し、先ほど自らが立っていた場所を指差す。

「——彼女たちのように」

ボクはその言葉に言い知れぬ不安を抱いた。

——なぜ、氣付かなかった。

ボクはそう自らの迂闊さと愚かさを悔いた。

茉莉会長の立っていた場所。そこには、人形と化した美術部の少女二人が居た。

その身のいたるところに穴を空け、血を流し、折り重なるように、糸の断ち切られた人形の如く倒れこんでいる。

その下に、夥しいほどの量の血溜まりを作って。

惑乱し、茉莉会長に、いや、メルデイス・ヴィスコンティエに隷従を強いられた彼女たちは、その身を呈して己が主を守ったのだ。盾となることで。

「さあさあ、早くあの子たちを治療してくださいませ。急がねば、死んでしまいますわよ？」

その言葉に弾かれるようにボクは彼女たちの元へ跳ぶ。

—— いやだ。 いやだ。

ボクの心を占めて、絞めるのは絶望にも似た恐怖だった。

ナイフを取り出す。首に押し当てる。引き裂く。強く。速く。

噴出する鮮血。送れて訪れる激痛。

集中しろ。

鮮血が少女達を汚し染め上げる。少女達の血に混ざりボクの血が彼女たちの傷口を覆い侵入する。

直せ。治せ。癒せ。修復しろ。

マクロファージの放出にする物質により繊維芽組織が呼び出されしゅうふくの主成分たる、コラーゲンが生産される。

遅い！

早く。速く。

急激に、急速に。瞬く間さえ惜しむかのように、身体治療サイクルが加速する。傷を修復していく。治療していく。治していく。消していく。

その際にかかる身体への負荷も、血を操作することで軽減させる。  
「——っ。ハアツ……。ハアハア」

少女達の治療を終えると同時、ボクは滝のように汗を流し、超長距離を全速疾走した後のように息をつく。

押し寄せる倦怠感と疲労。

明らかな今の鏡のスペックオーバーな一連の行為に、身体と言わず精神と言わず悲鳴をあげる。後先を考えず全力でやったのだ。当然だ。

「素晴らしいですわ」

そう言う惑乱候の声が、アタシには、この上なく不快だった。

——さて、あのキレイなお顔をどう碎いてあげよう？

## Their ways - 13

### Their ways - 13

やれやれ、と。アタシは流れ出る鮮血を手にとり眺めやる。

首から止めどなく流れ出る赤い水。命の象徴。温かく、錆臭い。

ぬめつとしたその感触が、たまらなく愛しい。

それにしても、と。先ほど“鏡”が修復した女達を見る。余計なことをしてくれた。無駄なことをしてくれた。もったいないことをしてくれた。ただでさえ足りていないと言っのに、これでは満足に踊れない。

ぬめり、とした感触が胸を汚すのを感じた。見れば、止めどなく流れ出る血が、服を汚して赤黒く染め上げていた。生暖かい、なんとも心地良い感触。それは腹を伝い、下半身へと流れていく。女として大事なところまでも血で汚れていくその感触がたまらない。恍惚とした陶酔感すら覚える。

ああ、けれど。足りないんだ。これじゃあ。

アタシは修復されたばかり女二人を両手に抱くと、歯で制服を引き千切り、露となった美味しそうな色の首筋に、熱く、長く、深いベーゼをする。

ビクン、と女が反応する。気を失ってはいるが、自らの身体から命の象徴が次第に奪われていく背徳感と、嫌悪感と、一度覚えると二度と戻れない陶酔に、呼吸が荒くなっている。

ごくり、ごくり、と喉がなる。口腔を通り、舌を汚し、喉を刺激して臓腑へと血が流れていく。

ある程度飲み終わると、その女を捨て、もう一人の女の服を引き千切り、首筋へとベーゼを。

「ど、どうということですよ!？」

驚愕と、困惑。それら自らでは量りえないことへの恐怖から来る感情を隠しもせず、声に出す、ヴィスコンティエの人形好きにアタシは優しく微笑みかけてやる。

「何を驚いているんだ？アタシだって、コレくらいのことはするだろう？」

用済みとなった女を邪魔にならないように放り投げる。

まだ十分とは言えないが、これ以上飲んじゃうと女達は死んでしまふ。それは、アタシにとっても“鏡”にとってもよろしくない。

本当なら、リンちゃん以外の血を飲むのもご法度なのだが、それは“鏡”が勝手に決めたことで、アタシには関係無い。だいたい、こんなむちゃくちゃな使い方をする“鏡”が悪い。

人と違うとはいえ、アタシたちだって血を急激に失えば死ぬんでしまふ。まあ、それでも飲めばいいのだから、人間より簡単ではある。

くすくす、と笑みが零れる。さあて、

「踊ろうか。ヴィスコンティエ候」

己の血を槍に変じる。刺し穿つべく一気に距離を詰め弾丸と化す。またもや人形を盾にしようとするがそんな小細工が何度も効くと思わないでほしい。いや、むしろアタシと“鏡”を同列に考えないでほしい。アタシには彼女たちがどうなるうが知ったことではないのだ。死ぬと言っただけならそれでもいい。リンちゃんは悲しむかもしれないけれど、その悲しみに暮れる表情もまた、アタシには愛しい。

——いつそのこと、このまま一息に貫いてやろうか？

そんな考えが浮かび、にい、と唇が吊り上がる。

けれど、そんな安直に過ぎる行動は取らない。アタシは槍の切っ先を少しだけ右に動かす。

狙うは、肺。骨と骨の隙間を綺麗に穿ってあげよう。

しゅっ——、という音と共に赤黒い槍がヴィスコンティエの身体に突き刺さり、貫き、槍は中ほどから分解し、体内に侵入する。

——さあ、隷従を強いられる屈辱。貴様も味わえ。

だが、

「——なっ」

ヴィスコンティエの身体は槍が分解した数秒後に崩壊し、塵となつてその場に山を作った。

「まったく、本当になんなんですよ!？」

驚愕に染められたヒステリックな声がかテドラルに響く。ああ、本当に耳障りだ。けれど、どこにいるかまったくわからない。

アタシの欠点はコレだ。どんなさやかな災いも敵意も、すぐに嗅ぎ付けられるが、その対象が近くに居るとまったく役に立たない。大雑把にしか特定できないのだ。これが“鏡”なら、また違ったかもしれないが……。せつかく久しぶりに表に出てこられたんだ。そう簡単に変わってやるわけにはいかない。

——それに、リンちゃんに逢いたいし。

けれど、どうしようか。この忌々しいカテドラルをぶち壊そうか。そうすれば嫌でも見つかるかもしれない。けれど、ここでは満足に力を行使できない。簡単な血の操作なら難なくできるが、大掛かりなものになると、ものすごい負担だ。

さて、どうしよう。

周りを見るが、当然見つかるはずも無い。さっきの人形——たしか、シオリだったかはその場に倒れている。ちょうどいいから、ここから血をもらうか。

——ヤ…………

弱々しいが、脳裏でそう響いた。起きるのが早い。もう少し寝ていればいいのに。

アタシはハア、と溜め息をつくと抱き上げようとしていた手を止めて、どうしようかな。と考える。

血を吸うかどうかではない。血は吸わないでよくと決めた。“鏡”が自分でやめると言うのなら、アタシも無理にやるうとは思わない。今はそれなりに満たされてもいるし。……まあ、それでも全然足りないのだが。

考えるはどうやって引きずり出すか。

ヴィスコンティエ侯家は、侯爵と言う位を得てはいるが、決定的な欠点がある。それは、圧倒的な肉体の脆弱性。ヴィスコンティエは徒人も鬼も関係なく隷従を強いる事ができる。極端な話しをすれば、ヴィスコンティエの位を頂上に位置すると、それこそ世界中の者に隷従を強いることができる。——実際には六四家ある侯爵家の一つでしかないわけだが。

それでも、その惑乱の力は強大であるため、単体の鬼としては圧倒的欠点である肉体の脆弱性を無視して侯爵の位を得ている。

と、そこまで考えて、おや？と思う。疑問が湧きあがる。

ヴィスコンティエは『惑乱候』という通り名を得ている。

惑乱とは何か。惑乱とは『心が乱れること』をさす。

『惑乱候』は他者の心を冷静な判断が出来ないほどにかき乱し、そこに付け込んで隷従を強制する。というものだったはずだ。……

あまり自信はないが。

だとすると、さっきのあれは何だ？

どう考えても『惑乱候』の名から外れていたぞ。

考えても答えは全くでない。

まあ、いいや。

とにかく今はどこにいるか、だ。

「出て来い、ヴィスコンティエ！つまらないぞ！！」

そう言つて怒鳴るが、声が空しく響くだけで全く意味が無い。なんとなく腹が立つ。近くにある長椅子を力いっぱい蹴りつける。するとそれは蹴りつけた部分だけが粉微塵に砕けた。その結果がまた苛つかせる。

「……本当に、どうなっているんですの？」

呆れと困惑をミックスさせた声が響く。上を向いたり左右をきよるきよると見渡したりするが、当然全く姿は見えない。声は反響して何処が発生源なのかわからない。

「まあ、ホントにずるいぞ！出てきてよ！！こんなつまらないのは

「アタシは嫌だっ!!」

「そう言っただけだが、出てきてくれない。せつかくのことなのに、と泣きたくなる。」

「……………貴女は一体誰ですの?」

「いぶかしむかのような声。」

「だれ?」

「雛罌粟力ガミだよ。茉莉会長。わすれたの?」

「ご冗談を」

「そう言っただけで笑う。アタシはむっとするが、どうにも出来ずに次の言葉を待つ。」

「貴女は鏡さんからは遠くかけ離れてますわ。いつもの鏡さんの面影が微塵もありませんわ!!」

「酷い言い様だが、事実だ。アタシはあいつとは違う。けれど、

「アタシが違うというのならそれもいいさ。それは事実だ。だが、どっちが本当だろうか?」

「いぶかしむような気配。無言。沈黙と言う返答。」

「“鏡”のほうが擬似人格で、アタシが主人格なら、アンタが真に狙うのはアタシだろうか?」

「そ、そうかもしれませんが……………」

「い、いいえ。違いますわ!わたくしが用があるのは鏡さんと鈴音さんなのですわ!!貴女が主人格であろうがなんだろうが、関係ありませんわ!!」

「突然慌てふためき色めき立つ。なんだ?なんだか、おかしい。どこかがずれている。アタシの認識と向こうの目的には齟齬があるのだろうか。」

「まあ、いいや。そんなことは些事だ。取るに足りないさ。どうしても気になるなら、あのきれいな顔を、身体を、完膚なきまでに凌辱の限りを尽くしながら、聞くとしよう。」

「くすくす。これでまた、楽しみが増えた。」

「さあ、もういいだろう。こんなかくれんぼは終わりにしよう。ア  
ンタが“鏡”に用があると言うなら、アタシを引ッ込ませるしかな  
いんだ」

どう考えたって、アタシが『惑乱候』如きにやられるわけが無い  
けどね。

「さあ、かかってこい、惑乱候！アタシに怖氣ついたわけじゃあな  
いんだろう？」

「……聞き捨てなりませんわね。いいでしょう。貴女を、わたくし  
に傳かすかせてさしあげますわ！！」

そう。それでいい。アタシそう思い内心でほくそえむ。

爵位なんかを気にしている貴族趣味者たちは、例外なくプライド  
が高い。ほんの少し叩くだけで、すぐに力ツとなる。まったく扱い  
やすい。

けれど、これでようやくまともに踊れるのだと思うと、胸が高鳴  
る。この気持ちは、あるいは恋に似ているかもしれない。

さあ、踊ろう。何が目的だろうが、どんな策謀が在ろうが関係無  
い。全力でぶち当たって来い。アタシはその全てにちゃんと答え  
てやるさ。

弾む心をそのままに、アタシは流れる血で身体を汚す。

## Their ways - 14

Their ways - 14

「さあ、かかつてきなさいな。『鮮血姫』」

何処からか姿をあらわした惑乱候は、口元に手を当て泰然とそう言い放つ。アタシはその言葉の通りに踊りかかる。能力だけの脆弱鬼に、アタシが負ける謂れは無い。

流れ滴る血を数本のナイフへと変じ、投擲する。奴の近辺に人形は一人も居ない。居たとしても、アタシの投げたナイフの方が、速く、疾い。

ナイフはいずれも狙い違わず惑乱候の心臓と顔以外に飛んでいく。ナイフの飛翔に合わせアタシも血を爪に纏わせて、斬りかかる。

「効きませんわよ?」

嘲笑しながら言う惑乱候に、アタシは笑いかけてやる。アレに効果が無いだろことはさっきのでアタシも承知している。だから?それがどうした。投擲のみなんでアタシの流儀じゃない。

ナイフが突き刺さる。右胸。首。左右の腕。足に脚。

爪で寸断する。右腕と手を切り、左腕と胴体を別離させる。流れに任せたままで右ひざを斜めに切りつけ、左足を縦に裂く。

一瞬。まさしく瞬きをするだけの間で惑乱候のきれいな肢体は無残な有様になった。それと同時に、人の身体をしていたそれは先ほどと同様、塵となりその場に空しい山を形成した。突き刺さったナイフが血へと戻る。

「貴女はよくよく、学習能力がありませんのね」

ふう、と溜め息がきこえる。あらぬ方向から。あらゆる方向から。まさしく縦横無尽。壁も床も天井も関係なくいたるところに惑乱候、メルデイスが立っていた。

「アンタ、惑乱候の名前捨てたら？」

アタシは呆れながらそう言い、再び踊りかかる。狙うのはどれでもいい。手近に居るそれを八つ裂く。砂になる。血が滴る。

「あら、なぜですか？ わたくしが正式な現在の惑乱候ですよね？」

「ハッ、どう考えたって、その名から外れてるだろ？ これはさ」

そう軽口をたたきながらもアタシは破壊を止めない。

血を撒き散らしながら縦横無尽に破壊して周るが、さすがに全くな数が減っていない気がしてきたので一時中断する。

——数もいい感じだしね。

「なあ、アンタ。メルデイス・ヴィスコンティエが正しい名前じゃないだろ？」

「あらあら。どうしてですか？」

そこかしこにメルデイスが居るため、どこを向けばいいのかわからない。とりあえず、一番本物っぽい気がしなくも無い、というアバウトな判断で天井にスカートを押さえて立っている奴のほうを向く。つまり上。

「ヴィスコンティエ候家は“惑乱の力にのみ極端に長けた”一族だ。こんな」

アタシは周りをぐるりと見渡す。

「——分身の術みたいなのは無いはずだろ？」

肩をすくめてそう言う。……まだ、時間はかかりそうだな。

「嬉しいですね。わたくしのことに詳しいだなんて」

僅かに朱に染めた頬に手を当て嬉しそうにそう言う。はつきり言うて、ものすごく不快で不愉快だ。

「別にアンタのことに詳しいわけじゃない。“ヴィスコンティエ候家”に詳しいだけだ」

「同じことですわ。それに、ヴィスコンティエの今の主はこのわたくしですもの。ヴィスコンティエに詳しい、それはつまり、わたくしのことに詳しいということですよ」

言い切った。

ああいえばこう言う。なんだって女つてのはこう口が達者なのだろう。アタシも女だが、あんなのは違うから別にいい。ああ、にしても首がいた――

「ところで、貴女。なぜこっちに視線を固定してますの？」

「スカートが捲れないかな、と思って」

アタシは正直にそう言った。実はさっきの一番本物っぽいとかどうとかは、どうでも良かったりする。ただ単に、スカートがいつか捲れないかなと期待してるだけだったりする。

それを聞きぽかん、とした後メルデイスは顔を耳まで真っ赤に染め上げ怒鳴りだした。耳まで真っ赤にする女性。これで二人目だ。一人目はリンちゃん。……もしかしたら他にもいたのかもしれないけれど、アタシの――“鏡”の記憶にはこの二人しか居ない。基本的に、アタシも“鏡”もリンちゃん以外は記憶することすらどうでもいい。

それでも、以前手に入れた情報はそう簡単に消えないし、消せない。まったく、鬱陶しい。

「なっ。あああ、貴女は何を考えてるんですの!？」

「よこしまなこと」

断言する。

さて、そろそろかな？

意識を沈ませ、命令を飛ばす。

――さあ、形を取れ。

その命令に従い、徐々に形を取る気配が伝わる。

――武装しろ。

取った形の一部分が次第に変化していく。

メルデイスはまだ気付いていないらしい、何かを言っているがアタシは気付かれないように、適当に相槌を打つ。あからさまに様子がおかしいと気付かれかねないが、まあ、大丈夫だろう。あの様子だと。

――さあ、動け。

「——聞いてるんですの！？　だいたいさつきから鏡さんの姿を——っ！？」

バガン、と言う音を立てて天井に立ってスカートを抑えていたメルディスクが粉碎する。

「ちえ、それも偽者か」

アタシは下唇突き出して不満をたれる。別に本物だと思っていたわけではないので構わない。だが、これで——

「壊すのが楽になった！」

凄烈な笑みを浮かべてそう宣言する。さすがに、カテドラル内にいないなんて事はないだろう。先ほどから壊すたびに増えている気がするが、それだって有限のはずだ。どんな力であれ、無限であるはずが無い。

「どういうことですか、それは……」

驚愕を顔に貼り付けてそう言う。ホントに、こいつはほとんど驚いてばかりだな。それほど自分の策に自信があったのか。それともアタシの事をしらなすぎるのか。あるいはその両方か。

まあ、いいさ。

——さあ、端から順に、破壊しろ。

命令すると同時、アタシ自信も動き出す。これ以上の血の無駄使いは避けるため、血は止めて、素手で殴り、蹴り碎く。

幾回にも及ぶ破壊でわかったのだが、この偽者たち。材質が液状ポーセリンとセルロイドがほとんどだ。アタシが少し力を込めれば楽に破壊できる。

なぜここまで本当に生きているかのように見え、振舞えるのか、疑問はあるが、どうせ、後でわかる。無理矢理に吐かせればいいし、わからないならそれでも構わない。

——とりあえず、そろそろ飽きた。

「くう——」

全メルディスクが後退する。

アタシはそれで一時破壊を中断する。作り上げた傀儡たちにも停

止命令を出す。

「なぜですか？」

「なにが？」

アタシは微笑んですつとぼける。

「その、傀儡ですわ！？」

「どう？ よくできてるでしょ？」

そう言つてアタシは模倣した傀儡たちの肩に手を置く。アタシと同じ姿のため、苦ではないが、ちよつと微妙だ。

「アンタは、アタシのことを何も知らないんだな」  
侮蔑と嘲笑を込めてそう吐き捨てる。

「なんですって？」

「アタシの事を知っていれば、こんなことができるくらい、容易に想像つくと思うけど？」

そう。アタシの事を正しく知っていれば、こんなこと、別段驚くことではない。だいたい血を撒き散らせながら戦うなんて、端から見て非合理的なことをしてる時点で怪しまないこと自体がバカだ。

アタシの能力は血の操作。それは都合よく手を加えること。他者の体内に侵入し、治癒力を高めるといふ操作ができるということは、混ぜれば自分の血以外でも操作可能だと想像できてしかるべきだ。

そう、混ざれば、他の物質でも。操作できる。

そうはいつても、血以外のモノとなると幾ら混ざっても血の量が少なすぎれば劣悪なゴミができるだけだが。

そのため、作り上げることが出来たのは、あれだけ血を撒き散らしてもこの二体だけだ。

「さあ、どうしたメルディス。さっきからまったく攻撃してこないじゃないか。いい加減、つまらないぞ？」

圧倒的優位を感じたが故の台詞ではない。ただ、本当につまらなくて、飽きてきたのだ。これ以上策が無いのなら、本当に一気に片をつける。

「うっふふふ。そうですわね。そろそろいいでしょう」

そう言つて、メルデイスは口元に手を当て上品に笑んだ。そこには先ほどまでの驚愕も狼狽も無い。

湖面のように静かに、泰然と言う。

「いいですね。見せて差し上げましょう。わたくし、メルデイス・クローチェ・ヴィスコンティエの——エストリエの力を！」

エストリエ！？

ここに来て告げられた目の前の存在の正体に、アタシは歓喜に震えた。あるいは、これは恐怖だったのかもしれないが……。

## Their ways - 15

Their ways - 15

一人を残して全ての惑乱候が塵と消える。その一人はアタシが無意識下で絶対に偽者だと信じ込み、無視していた奴だった。さすがエストリエ。やるのがせこい……。

同時に、無機的な殺気——いや、違う。殺気ですらない。それは違和感。

「ご紹介しますわ」

ひゅっ——という音と共にアタシの左腕が薄皮一枚分切りつけられた。ギリギリで避けきれなかったのだ。そう思うと同時に——

「っああー！」

その傷口に焼けるような痛みが走った。ほんの少し切られただけなのにものすごい激痛だ。溶ける限界まで加熱させた鉄を押し付けられたら、きつとこんな痛みを伴うのだろう。漠然とそう思った。

アタシのことなど構わず、淡々とメルデイスは喋る。

「剣担当、赤のルビラム」

メルデイスの前に一体の真っ赤なドレスを着たビスク・ドールが佇んでいた。その手には銀に煌く細かな装飾の施された一本の直剣。あれに切られたらしい。

そう思っている間に、今度は真上から奇襲された。今度は難なく避けきることが出来た。そのとき、青いモノが見えた。

「槍担当、青のスフィニア」

今度は青いドレスを着たビスク・ドール。その手には二メートルはあろうかと言う槍が握られていた。その槍にも細かな装飾が見られる。

今度は避ける必要は無かった。

「そして、盾担当。緑のエスメラルダ」

メルデイスの背後から自ら歩いて緑色のドレスを着たビクス・ドールが現れた。その手には自らの身体の三分の二程度の大きさの盾を、左右に装備していた。

「——以上三人が、今宵の歌劇のレジーナですわ」

その台詞にあわせて、三体のドール達はやけに人間臭い動作でスカートをつまみ、礼をした。

アタシはそれを傷口を手で押さえながら見ていた。心中は不快でたまらない。銀で切られた傷は全然治らないし、メルデイスの顔に今までとは違う落着きすぎた微笑が浮かんでいるのが気に食わない。「ちつ。今までののは芝居か」

メルデイスが自らの正体を明かした今になって、今までの全てが茶番だったことに気付かされた。

「芝居だなんて。どんなことにも、前戯は必要ですよ？」

そう。今までののは全て前戯。八雲と“鏡”が踊ったことも前戯。この人形劇をメルデイスが自分に都合よく行うための潤滑油。

——私の力を見、弱らせ、どう動くべきかはかるための。

だが、まあいい。アタシは次第に苛つく気持ちを落ち着けていく。そして、これからおこることに性交時と同様の興奮を覚える。確かに色々不快だが、奴はこれでやっと本気になるんだ。これで、最高のダンスが出来る。

—— エストリエなんて言う、最高のパートナーと！

「それでははじめましょうか、鮮血姫？ 『ブラッディナイオ』と呼ばれ畏怖されたわたくしの実力、その身で存分に堪能するといいですわ！」

それが合図となりドール達が動き出す。

『ブラッディナイオ』……人形遣いか。そのままだな。だが、惑乱させ他者を人形にし、エストリエとしてドールを使役するこいつには、『惑乱候』よりお似合いかもな。

一息に跳躍し袈裟に切りかかってくる赤。

地を這うように走り槍を突き出す青。

二体の背後に控える緑。

アタシは鮮血を二本の小剣へと変じそれらを受け止める。血を凝固させ血中の鉄を増幅させた剣が、純銀ごときに負けるはない。

——だが、

ガキッ——

アタシの剣に赤のドールの剣が食い込み、青のドールの槍の切っ先が突き刺さる。

それはありえないことだった。だが、それは異常が支配する場ではありえて然るべき事象だった。

「その子たちの武器は特別せいですの。幾ら貴女でも、そう簡単に壊せませんわよ？」

冷徹に嘲笑を含んだ声。その間にも二体のドールは力任せに押してくる。徐々に罅が入る。アタシは舌打ちと共にその罅を修復していく。ああくそつ。なんてバカ力だ。

信じられないことに身長七、八十センチ程度のドールたちに、アタシは力負けしていた。

アタシは純粋な力だけなら同種の中でもかなり上位に位置していると自負している。他の同種にはほとんど会ったことは無いが、それでも公爵家である雛罌粟を一夜で滅ぼしたんだ。弱いわけが無い。そのアタシが、力で負けている……。不快だった。不快だったが、愉快だった。

アタシは力で負けていることを素直に認め、これ以上の力比べを放棄しドールたちを蹴り飛ばした。

重たい音と共に赤と青はアタシから離れる。ドールたちは軽やかに着地すると、そのまま間髪いれずに突っ込んできた。

アタシは二本の剣を鮮血に戻しそのままハルバートへと変じる。二メートル弱のそれを、身体ごと回す勢いで薙ぐ。突っ込んでいる最中に急激に止まることは出来ないし、避けることも出来ないだろう。

だが、赤にも青にもハルバートは当たらなかった。

いつの間に現れたのか、緑のドールが両腕の盾でアタシの全力で薙いだハルバートを止めていた。どころか、盾に直撃した直後にハルバートが真つ二つに折れた。折れると同時に、ハルバートは血へともどる。

アタシは急いで後ろへ跳ぶ。足すれすれを青の槍が走り、赤の剣がアタシの銀髪を数本持つていく。

アタシは腕を振るい鮮血を飛ばす。散弾となったそれを緑のドールが両腕の盾で全て受ける。

そうしている間に左手から赤が、右手から青がそれぞれの武器で攻撃してくる。アタシはもう一度右腕を振るい散弾を放ち、左腕の血をナイフに変え投擲する。散弾は緑へ。ナイフは赤へ。青の薙ぐ槍を下からの蹴りですらし、拳を叩き込む。

しかし、

「クソツたれ!!」

そう吐き捨てずにいられない。

アタシの攻撃の全ては徒労に終わった。緑は当然のように全てを防ぎ、赤は全てのナイフを剣で切り落とした。青に至っては殴ったアタシのほうダメージを受けた感がある。

何なんだ、あのドールの異様な硬さは。

「言い忘れてましたわ。素手で攻撃すると、危ないですよ?」  
言うのが遅い。

右から赤の斬撃が繰り出される。それを左へのステップでかわすが、地を這うような勢いで青の広範囲の薙ぎが襲いくる。それを間一髪、鮮血を根に変え受け止めるが、それも一瞬。即席で形成した密度のたりない根は破碎された。だが、その一瞬で十分に避ける間は出来た。

根を蹴り後方へ跳躍。けれど、その直後に背後にものすごい衝撃が走り、床に叩きつけられる。いつの間にそこにいたのか、緑のドリルが両腕の盾でアタシの背を力任せに殴打したのだ。アタシは隙を作らないためにも右手一本で床を弾き、跳ぶ。半瞬の差でそこに槍が突き刺さる。宙では赤が斬撃を繰り出さんと剣を構えていた。宙での移動など、この不自然な格好では無理がある。アタシは瞬時に腰のナイフを取り出す。ナイフは赤の剣に触れると即座に力負けし切断される。その間に未だ治らない左腕の傷口を拡張。血を溢れ出させる。それを形なんか無視して血中の鉄だけを増幅。即席の防壁を形成する。それは盾と呼ぶには余りにもお粗末な、小さな壁。ガンッ！

という音と共に尋常ではない、異常の顕現とも言うべき力が防壁の外側から感じられる。

ピキリ、という小さな亀裂音が聞こえた。形成した防壁が崩壊しようとしている。アタシは崩壊する前に防壁の形状を変化させる。表面に突起を形成。それを赤へと伸ばす。突如の異様な攻撃に、赤は堪らず吹き飛ばされる。と同時に。防壁の形状が崩れ、血へともどる。

——やばいな。

カテドラルという聖域。足りない血。その状態での度重なる力の行使。純銀により負わされた傷。はつきり言って最悪だ。

それに加えて相手は『惑乱候』と『ブラッディナイオ』の二つの名を持つ存在。ここまで不利だといっそ気持ちがいい。

知らず、冷や汗が伝う。呼吸も、少し荒い。

そうしている間にも、ドールたちの猛攻は止まらない。疲れを知らない人形は、休むことを必要としない。

これ以上鮮血を使うことは出来ない。こんな状況で下手に使えばアタシは——どうなるんだろう？

赤の袈裟の斬撃を身を反らして避ける。そのまま腕を伸ばして赤のドレスを掴み、刺突を繰り返さんとする青めがけて力任せに投げる。ガクン、と一瞬バランスが崩れるがふんばって投げる。

——重いつ……

見かけを裏切りすぎている重量の赤と青のドールは互いにもつれるようにして長椅子に突っ込む。その重量と衝撃で長椅子が折れる。それを見もせずに控える緑へと肉薄。下から上へと螺旋を描きながらの後ろ回し蹴りを放つ。踵に不可がかかる。両腕の盾でガードしたらしい。それを無視し蹴り上げる。

赤や青と違いそこまで重くない緑は軽く宙へと浮き上がる。それでも重量はある。

一連の無意味な攻撃の後、アタシはドールやメルディスクから十分に距離をおいて一息つく。

一連の無意味な攻劇でわかったことが一つ。

——今のアタシじゃあのドールの撃破は無理！

邪魔な障害物と化している長椅子を破壊しながら態勢を立て直す、赤と青。

宙で軽やかに身を回し静かに着地する緑。

そのどれにも大した——いや全くダメージになっていない。

強い。速い。硬い。重い。それも、アタシより。

「あらあら、もう降参ですの？」

冷ややかな微笑を零しながらそんな馬鹿げたことを言う。降参？ 冗談じゃない。

「ふざけるなよ人形遣い。これから面白いんじゃないか」

笑いながら不敵にそう言うが、アタシに妙案なんてモノは無い。  
あの化け物ドールたちを撃破するには、どうしても徒手空拳では無理がある。鮮血でも無理だ。

——四花弁が使えたらな。

そう思うが、それは無いものねだりというものだ。アレはアタシには使えない。それに、仮に使えたとしてもこの血が足りていない状況では高が知れてる。精々がドール一体を動かなくする程度。それだって、上手く立ち回らないと出来ないだろう。

まったく、希望が薄い。どうするかな……。

「そうです？ では、一切の気遣い無く、いきますわよ？」

「ああ。こいよ。格の違いを教えてやる」

だというのに、アタシはこれ以上ないくらいに昂ぶっていて。これ以上ないくらいに満たされていて。これ以上ないくらいに強がっている。

本当に、愉快。

赤が走り、青が駆け、緑が跳んでくる。三色同時の突撃。アタシは後退に後退を重ねてそれらを避ける。そのまま、今度は走る。追ってくるドールたち。そして距離が詰ると赤や青が攻撃を仕掛ける。それも、走り、跳び、避ける。

アタシは床を蹴り、壁を蹴り縦横を無尽に躍る。速さはドールたちのほうが上なのですぐに追いつかれ、攻撃されるがその全てをギリギリでかわす。かわしきれなかった攻撃はドールを足場にして蹴りつけ、跳んでかわす。

メルデイスに近づいて直接攻撃を仕掛けようとしての試みだが、どうも近づけない。

せめて、一瞬、いや、半瞬でも隙があれば。

そう思うもそうそう都合よく隙なんかを作ってくれるわけがない。そう、アタシが攻撃をする隙なんかをこのドールたちが作るわけが無い。

ならば、どうする？ 簡単。

答えは即座。そのための今までの無駄に派手な追いかけっこ。

ドールとメルデイスの間には十分な間が開いている。アタシが何かをしようにも瞬時に阻まれるだろうが、アタシよりメルデイスに近いモノならギリギリでドールたちに邪魔されずに攻撃が可能な距離だ。

アタシは今一度床を蹴り、宙へと跳ぶという愚行を行う。好機とばかりにドールたちはアタシを追って宙へと飛ぶ。

——命令を下す。

アタシの出した命令を忠実に実行すべく、気配を隠し慎重にメルデイスへと近づいていたソレは獲物を狙う蛇のように凄まじい速度で地を這う。

ソレはアタシが模倣した二体の傀儡。大した能力は無いが、精々が常人より上程度の身体能力しか持たないメルデイスを殺すには十分な腕力を持つマーダドール。

アタシを追って跳んだドールたちはソレに対して即座の反応が来ない。

メルデイスは全くの無防備。完全なる不意打ち。

「——甘いですよ」

だが、メルデイスはそう冷やかに笑んだ。

メルデイスまで残り数メートル。

その僅かな距離で、アタシの傀儡は粉微塵と爆ぜた。

「ご紹介致しますわね？ わたくしの頼もしいカヴァリエーラ。白のオブディに黒のディムドウ。メイガス・クローチエ一族とビスコンティエ候家共同の叡智の結晶にして最高傑作。魔導機関を備えた至高のマリオネットですよ！」

陶酔感あらわな目で長口上を終えたメルデイスの横には、露出過多な純白のゴシックドレスを身に纏ったドールと、漆黒のマントと夜色のロングドレスを身に纏ったドールが無表情に立っていた。

アタシにあわせてあえて跳んできた三色のドールたちが、それぞれ

れ攻撃を繰り出してくる。

マズイ……。

咄嗟に、突き穿たんとする青の槍へ右足を振り上げる。ブーツの踵が運良く槍を蹴り上げた。同時に斬りつけられた赤の斬撃を、左腕を慌てて振り上げることで辛うじてガードする。間を置くことなく行われた緑の盾による打撃を、返すなんとかで右足を膝蹴りの容量で突き出して迎え撃つ。

一連の動作の後に着地。

同時。右足に激痛が走る。硬度の半端無く高い盾の打撃を膝で防いだのがまずかったらしい。左腕に溶けた鉄を押し当てられたのかと思うほどの熱を伴った灼けるような痛み。慌てていたとは言え、生身の腕でガードしたのは無謀すぎた。気をつけていたのだがよほど深く切りつけられたらしく、血が流れない。流れる前から灰になって落ちていく。正直、こうしていまだに身体にくっついてるのが不思議でしようがない。

堪らず、アタシ床に膝をついた。

荒く息をつきながら、メルデイスを睨みつける。

新たな二色の——白黒のドール。それは不気味なまでに精巧に出ていた。

全長160センチほど。それぞれ自分とは対極の色をした艶やかな髪。真偽の区別のつかない偽眼。完全な黄金率によって整えられた顔。人形特有のボール型関節の欠如。遠目からでも押せば返すのではないかと思えてしまう質感の肌。

それは人形と呼ぶにはあまりにも人に酷似すぎた、けれど明らかに存在しないはずの存在。生氣こそないがその決定的な欠如があつてなお、そんなわけが無いと頭で、理性で理解しようとも生きていると錯覚させられてしまう。

明らかな、矛盾と生物への冒瀆。

合計五色のドール。

鮮血操作を行えず、満身創痍と言っても過言ではない状態のアタ

シ。

狀況がアタシに不利なのは、火を見るより明らかだ。

絶望的過ぎる。希望的観測も、樂觀視も、強がることですら不能なこの狀況。

なのに、アタシは、

—— 哄っている。

## Interval Rent

さすがですね。

わたくしは内心、拍手と共に賞賛の言葉を贈りたい気持ちで一杯だった。

舞台は徐々にその力を失わせていく枢機卿付きのカテドラル。対極に位置する不浄、魔を浄化、覆滅する白鬼との戦闘。血を使わせることが目的だった前戯。

三色の宝石人形との戦闘。

そうして、結局わたくしの切り札である二体のマリオネットまで使わせた。

想定範囲内の出来事とは言え、ここまで期待通りだと惚れ惚れする。ホントに。

本来のわたくしの計画では、鏡さんと宝石人形を。鈴音さんと八雲さん及び可愛いお人形たちを当てる気でいた。

けれど、やってきたのは鏡さんだけ。いっしょに行動をすることをただにこの各個撃破のチャンスは喜ばしいことだった。戦力を割かずにその全てを一人ずつに向けられるのだから。

まあ、結局は八雲さんはやられてしまいましたけど。

八雲さんがあそこまで早くに退場するとは思わなかった。

鏡さんが負けるわけは無いのだから、八雲さんが敗れるのは問題ない。けれど、早すぎた。もう少し、やってくれると思いましたのに。とんだ期待はずれですね。まあ、ある程度は弱らすことが出来たみたいですから、赦して差し上げますけれども。

そう、弱らせること事態には六割方成功した。それでも、鏡さんは奮戦していた。

宝石人形達の武器はどれも銀製。それも芯にはダイヤモンドを使い、表面には抗魔処理を施し、さらには聖別まで行った特別製。

宝石人形達はそれぞれ、赤はルビーを、青はサファイアを、緑は

エメラルドを元に作成している。

宝石は既存の鉱物の中で最も魔力の通りがいい。それも純度が高ければ高いほどに。

宝石人形は現在のわたくしの、エストリエとしての全力を注いだ最高の作品。

おかげで、追加で魔術を行使することはほぼ不可能になってしまったが、それだけの価値も成果もあった。現に、生命の象徴である血を生命力と異能の因としているわたくしたちの中で、あえて鮮血を名に頂き、姫の称号まで持っている鏡さんにわたくしの人形達は勝っていた。

たとえそれが、幾つもの要素の重なりによる結果に後押しされているものだとしても、わたくしが現状において鏡さんを圧倒している事実は変わらない。

侯爵であるわたくしが、五家しか存在しない公爵の中でも最凶の呼び声高い雛罌粟の姫を、圧倒している事実。

この事実は誰がなんと言おうとも不動で確かなもの。

けれど、その事実を持ってしても鏡さんの心は屈していない。一計を案じ、わたくしに切り札を使わせた。

たしかに、この切り札を切りたかったというわたくし自身の欲が無かったといえばウソになる。それでも、切るに至らせたのが鏡さんであることに変わりはない。

流石と言える。

そして、当然とも。

こんな所で、この程度で終わるなんて言うのはわたくしが赦さない。

持てる力の全てでわたくしにぶつかり、その全てをわたくしが完膚なきまでに碎かないと。

そうでないという意味がない。生半可なものは要らないのですわ。

そう、正直なことを言えば鈴音さんなどどうでもいい。お父様も他の方々も、蟲の蔵たる鈴音さんを重要視していましたけれど、わ

たくしにはそんなものはどうでもいい。わたくしが欲しいのは鏡さんだけ。

だから、鏡さんには全力を出してもらわないといけない。

今の鏡さんは普段の鏡さんとはどうも様子が違う。

普段の冷静さも鋭さも聡明さもない。

ただ思いつきで行動する子供と大差がない。

わたくしは、そんな中途半端な鏡さんに用はない。

鏡さんは今、膝をつき肩で息をしながらわたくしを睨んできている。切れ長の蒼い瞳がわたくしを見ている。

たまらないですわ。

ゾクリ、と背筋が震える。

知らず、頬が熱くなる。

眩暈すら襲ってくる。

軽い陶酔感さえ覚える。

鏡さんの意思の全てがわたくしに向いている。

胸が熱い。

ああ、けれど。まだダメなんですわ。

いくら状況が不利であろうとも、噂に名高い鮮血姫の力。その半分も出していないことは明白。現に、鏡さんは四花弁を使っていない。鮮血の操作など、二次的なものでしかないことは、わたくしはよく知ってますのよ。

本気にならないのか、なれないのか。何れにしろ今のままではダメなのですわ。

本気に、なってもらいませんと……。

そのためにも二つ目の、即席のカードを切る必要がありますわね。かわいいかわいいお人形さんたちが到着するまで、鏡さんを休憩させてさし上げましょう。

笑みが零れる。

わたくしの圧倒的優位は変わらない。この舞台での今宵の歌劇、<sup>レジーナ</sup>最高の歌姫はルビラム、サフィニア、エスメラルダの三人。それを

裏から指揮する奏者はわたくし。そうして、そのわたくしを守護す

る至高の騎士はオブディとディムドウの二人。

今宵一晚限りの最高の歌劇。

出席予定者にはすべからく来ていただきませんと。欠席は認められないのですから。

存分にお楽しみあそばせ。

なにせ、まだまだ始まったばかりなのですから。

嗚呼。けれど、メインアクトまでは、あと僅か……。

幕が閉じたとき、貴女はどのような表情をわたくしに見せてくれるのかしら。

今から、とても楽しみですわ。

愉快だ。

素晴らしい。

かつての殺戮劇でもここまでの高揚は味わえなかった。

嗚呼、認めよう。非の打ち所もなく認め、賞賛しよう。

そして詫びよう。今まで侮っていたことを。見下していたことを。だから、虞姫という姓を頂きに持ち、封じることが目的とされた名を備えている自分も敬意を持って対応しようじゃないか。

膝をつき、力なく垂らした左腕は辛うじて骨だけで繋がっているような状態で、その傷口から出るはずの血は外気に触れると灰になり、さらさらと流れていく。良く見れば、傷口の周りには罅すら入っていた。床についた右膝は、白い肌が歪にどす黒く変色している。呼吸は荒く、苦痛と消耗から冷や汗が止まらない。

だというのに、雛罌粟 鏡は、あるいはカガミは哄っていた。

顔は目の前にいる敵を睨みつけている。

その表情は敵意と殺意。

けれど、そのココロはこれ以上ないくらいに悦ばしげに、哄っていた。

その敵——十条寺 茉莉、いや、メルデイス・クローチェ・ビスコンティエはそんな状態の鏡を見て、勝利を確信していた。自らの絶対優位が不動であると信じて疑っていなかった。

表情はどこか恍惚としており、頬も心なしか朱に染まっている。

傍らには人からかけ離れたが故に人により近づいた、二体の白黒の人形が静かに佇んでいた。

白黒の人形の前には、赤、青、緑の三色のビクスドールが各々の武器を手に、先ほどまで遊んでいた相手を眺めている。

メルデイスは待っていた。鏡が動けるようになるのを。そして、自らに心を乱された従順な人形が、無断欠席をした彼女を連れてく

るのを。

鈴音は自らの血がざわめくような、そんな不快感を感じ目を覚ました。

目を開くと視界が紅い。いや、自分の全身を紅いものが覆っているらしい。それはヴェールのように薄い、外と内側を完全に遮断するものだわかった。

それは、以前に見たことがあるものだった。

その紅いヴェールからは鉄錆のような臭いがする。

それは、知っている臭いだった。

——キョウ様の……、血。

また、血がざわついた。

その不快感に、鈴音は自らの身を掻き抱く。

「——っ」

しばらくすると、ウソのようにざわめきがやんだ。それでも、鈴音は自らの身を抱いたまま、顔を上げない。

——いや、上げられない。

このヴェールが鈴音は守っている意味は一つ、鏡が傍にいないから。

鈴音は、そのことに気付いた。気付いたら、一人であるという恐怖から、不安から、寂しさから、顔を上げられなくなった。

鈴音はそばに鏡がないという現実を拒否するかのように、自身を抱く。そうして、そのことを意識しないように別のことを考える。考えようとする。

しかし、無理だった。

一度認識してしまった現実を——鏡が傍にいないという不安と恐怖を、拭うことは出来なかった。

身体が震える。

裸でいることの寒さからではない。

一人だという心の寒さから。

震えは止まらない。

それでも、以前のように錯乱することがないのは、成長したからという物理的理由よりも、鏡の身体から流れ出たこの血が身を覆っているからか。

そつと、房に巻きつけてある紅いリボンに触れる。

鏡とお揃いのリボン。

元は一本だったリボン。

二人を結ぶ紅い糸。

——と、不意に鈴音は顔を上げた。表情は焦りを表している。

警鐘が鳴っている。自身の深いところから。

幾つもの無機的で虚無的な気配。それが近づいてくる。

肌が、あわ立つ。

血がざわめく。

ココロが、震える。

それを静めるように、抑えるように鈴音は自身を指が、爪が食い込むほどきつく抱く。

——イヤ！

近づいてくる。

あわ立ち、ざわめき、震える。

肌にはついに爪が食い込み、赤い雫が、一つまた一つと伝う。

けれどそんな痛みに、そんなことにすら気づかないほど、鈴音はより強く身を抑える。

とまらない。

やまない。

トマル。

ヤンデイク。

硬質的な、あるいは軟質的な破碎音がした。

それは粘つくような、零れ落ちるような響きを含んでいた。

鈴音はその音が入るのを認識することなく、意識を失った。

——あるいは、それは逃げるように。

直らない。

治らないのではない。これは、直らない。だ。

銀の凶器に傷つけられた腕が、どんなその機能を失っていく。もはや動かすことすら出来ないそれは、ただの飾りと変わらない。それでも、そんな状態になっても痛みは存在し、機能を失うにつれその痛みは気が狂いそうになるほど深いものになっていく。

銀による深いダメージにつられたのか、緑の盾に膝蹴りをした右足の膝の痛みも退きが遅い。とても遅々としているため、下手に立ち上がることも出来ずにいた。痛みは問題ではない。下手なことをして、動けなくなることを危惧しているためだ。

それでも、そんな隙をさらしていてもメルデイスが攻撃をしてこないことに、鮮血姫の名を持つ少女は内心で舌打ちしていた。つまり、と。

彼女はこんな絶望的な状況でも、この舞台を楽しみ愉しんでいた。だというのに、せつかくこんなにもいい状況だというのに何もしてこない。

それは彼女にとって、雛罌粟の姓を持つ彼女にとって酷い冒瀆だった。興奮めや不快よりも先に怒りが来る。

雛罌粟は自らの欲望のためなら、したいことなら何でも出来た。しかし、その自由が今はない。動きたくともほとんど動けない。したいことが出来ない。この束縛はとても新鮮で、愉快なものだった。なにより、自分がここまで追い込まれたということが、素晴らしいことだった。

何せ、今まで一度として味わったことがないのだから。

味わおうにも、そうなる前に皆壊れていたのだから。

それなのに、今回は、壊れるどころか、傷一つついていない。

なのに、こんなにもいいシチュエーションだというのに、何故ボ

ケツと突っ立っているんだ！

膝が十分に動かすのに過不足ない程度に回復していく中。彼女はそう激昂していた。

そんな激昂などしらず、ただただ彼女の意識が向いているという興奮に酔うメルデイスは、予定通りに招待された人物がつれてこられたのを感じた。

——メインアクトの始まりですわ。

メルデイスは、心中でそうほくそえんだ。

ああ。やつときた……。

こればかりはアタシだけで楽しむのはもったいない。

先ほどの激昂は、すでにカガミの中からは完全に消えていた。むしろ、その激昂はメルデイスへの恋にも似た、たまらない愛おしさへと変換された。嗅ぎ付けてあったこととは言え、ここまでその通りだと、いつそ清々しい。それに、無駄に裏切られるよりも、ドキドキ感やわくわく感があって、楽しめる。それでも、感情が昂ぶるとそんなことですら頭から消えてしまうのが難点ではあった。

なんにしる、カガミはようやく始まる“一つ目”に期待で胸躍らせていた。鼓動の高鳴りが痛いほどだ。

その気配は徐々に大きくなってくる。

カガミはあまり面識はないが、雛罌粟 鏡という名のこの身体が、“鏡”というもう一つの嗜好が、それをよく覚えていた。

さあ、“鏡”。起きなよ。右半分を使わせてあげるから。

消耗と、カガミの嗜好の大きさに潰されて眠っていた、眠っている“鏡”にそう声をかける。

ガクン、と右半身から一切の力が消えた。力の入らない右半身のせいで大きく身体全体のバランスを崩したが、何とか倒れるというみつともない醜態を晒すことだけは避けることが出来た。

右半身は、左半身に支えられるような状況にある。そのため、メルデイスの目にはその姿が不可解極まりないものに見えた。

どうしたんですの？

思い、眉をしかめる。

現状での十分な回復はなされた。それをメルデイスはなんとなくだが感じていたし、膝の歪な変色もひいていることは見えていた。あいかわらず左腕は酷い有様だが、おかしいことになっているらし

いのは右半身。そことは関係がないだろう。

左腕以上に力なく垂れ下がっている右腕。

地に足がついているだけの右足。

光がなく人形よりも人形みたいな瞳の右目。

系の切れた人形は身体のを猟奇的に投げ出すが、目の前のそれはそれとは質が違いすぎた。幾つもの人形を遣うメルデイスですら、こんな状態の者は見たことがなかった。

だというのに、それほどだというのに左側は活き活きとしており、目に見えて喜びに溢れている。

不快で奇怪で歪で醜悪だった。

見るに耐えない。

半分ずつ生氣と死気を放つ雛嬰粟 鏡という身体。

それに隠れるようにして、メルデイスとカガミのお目当ての少女が連れてこられるのが、あるいはやってくるのが、感じられる。

ひた、ひた。

と、裸足で歩くような音が、静謐なカテドラルに響く。  
ぎち、ぎち。

という何かの音が、清浄なカテドラルを汚していく。

徐々に、雛嬰粟 鏡という身体の半分に、生氣が溢れていく。力が入っていく。

カガミはその気配に歓喜した。

鈴音の近づいてくる気配。

鏡が起きる気配。

そのどちらにも歓喜していた。歓迎していた。ココロが震えた。

メルデイスは満足していた。

鈴音が予定通りつれてこられることに。

鈴音を人質として使うことで、鏡が本気になってくれるだろうということに。

そうして、それを完璧に自分が打ち砕く、そう遠くない未来に。鏡に隷従を強いた後で、鈴音のココロを壊して自分のおもちゃに

するもの、また面白いかもしれないなどと考えてすらいた。

裸足で床を踏む、適度な湿度と油分をもったものが、硬いものに張り付いては剥がれる音がする。

何かの音がする。幾つもの硬質的なモノが脈動するような、噛み合うような、そんなどこかで聞いたことのある不快な音がする。

——加えてもう一つ。

震えるような音がする。それは薄いものが一秒の間に幾百と往復運動をするような、それによって生じる、空気の振動する音。

完全に覚醒した鏡は、まず現状の理解に務めた。

半分だけ切り取られたような喪失感。それと同時に、鋭敏になった全感覚器官。

共有、か。

そう諦念めいた思いを、心中で唾棄する。

まだ惑乱候との決着はついていないのか、と自分の状況と目の前にいる少女を見てそう思う。なにやら五体ほどの色取り取りの人形がいるが、武器を手にしていたり異様な気配を放っているから、惑乱候の武器なのだろうと仮定する。

鏡とカガミは二重人格、と言う訳ではない。それぞれに肉体の優先権などないし。記憶の欠如だって、知ろうと思えば容易に知ることが出来る。こうして、互いが同時に肉体に現れる事だって可能だ。ならば、なんなのか。

それは、少なくとも鏡は知らないことだった。

ただ、わかつていることは、お互いに真逆に位置するということそれだけだった。

鏡は正しい現状認識のため、カガミの記録を見ようとした。けれど、そこで、気付いた。

明らかない異変に。異常に。

鏡がそれに気付いたことに気づかないふりをしながら、カガミはようやく気付いたか、と内心で楽しそうに笑った。

雛罌粟　鏡は歡喜の笑顔と驚愕に顔を染めた。

メルデイスは、ただこの理解できない状況に困惑していた。

——もしも、仮にここがカテドラルでなければ、メルデイスの力が——惑乱候の力が弱まっていなければ、もっと早くにその異常に気づけただろう。いまさら、だが。

カテドラルに現れたのは峰岬 鈴音だった。

——かろうじて、そう確認できた。

今の鈴音は、本当に鈴音なのかメルデイスには自信が持てなかった。

思っていた通りの鈴音の状態に、カガミは満足していた。

鏡は今の状況の理解の一切を放棄した。今すぐにも鈴音のもとに走りたかった。けれど、半身が、カガミがそれを赦さなかった。

鈴音は誰の目にも明らかに、異常だった。そもそも、人の形をしていなかった。

艶やかな黒い髪は、それぞれが絡まり別個の生物のように勝手に蠢いていた。

白磁の如き白い肌は、所々色が不気味な色彩に変色し、歪な光沢を放っていた。

背には蝶のような翅が一对、淡い鱗紛を放ちながらはばたいており、その下には、羽虫のような透明の薄い翅が空気を叩いていた。

右腕の上腕から手首にかけてまでに、甲虫の足のようなものがぎちぎちと厭な音を放ちながら蠢いていた。

左脚の太ももから爪先までと、右足の膝から足首は螺旋状の口吻や、ギザギザとした蟻のような口、他にも無数の虫の口蓋が厭な音を発しながら、開閉を繰り返していた。

そして、美しかった顔の左半分には幾種もの虫の複眼が混沌と張り付き、カテドラル内を睥睨していた。

人間だった部分は、ほとんど無かった。辛うじて、顔の右半分と左手だけは普段の鈴音の白いきれいな肌を残していた。

だが、逆にそれが歪で醜悪だった。

様々な音に埋もれながら、鈴音は歩きを進める。

——これが、蟲の蔵。その一部の顯現だった。

なんなんですか？

メルデイスの思考は纏まることなく同じ疑問が頭の中を何度も周る。

書き上げた台本は完璧だった。多少のアドリブはあったが、完全に台本通りの舞台などつまらないだけだし、予想の範疇を越えるものではなかった。

けれど、現状。圧倒的有利な局面。覆ることのない優位性。メインアクトを盛り上げるための最後の出席予定者の出現。あとは大切な人を人質にされ、ようやく本気になってくれるだろう鏡を、完膚なきまでに打ち砕くだけだった。——その筈だった。

つれてこられるはずだった鈴音は、自らの足でここまで来たようだった。お出迎えのために向かわせたお人形達の姿は、そこにはなかった。

なのに、全てとはいかなくとも数人のお人形達がいることは感じられる。操り糸が——惑乱の能力がすぐ傍に彼女らがいることを知らせている。

ではどこに？

見渡すも答えは何処にもなかった。

鈴音の歩みはゆっくりとしている。一步を踏み出すたびに、湿った貼りつくような音が響く。

硬質的な音や空気の振動する音。粘着質な湿っぽい音が、聖域を急速に汚していく。

鈴音の顔に現れている混沌とした複眼は、何かを探すように機械的にカテドラルを見回している。対して、鈴音自身の董色の瞳には光はなく、死人のそのように濁っている。

鏡はそんな状態の鈴音を、早く走りよって抱きしめてやりたかつ

た。今の彼女は、蟲たちに意識を奪われている。ココロを閉ざされている。自分が、鏡やカガミではなく、鈴音にとつてのみ存在するキョウが、彼女の意識を取り戻させねばならない。彼女は、今の状態を絶対に望んでなどいないのだから。

けれど、そんなつまらなくなることを、カガミが赦すわけがなかった。カガミは、動こうとする半身とは真逆に、たとえばんの僅かであろうとも動く気はなかった。幾度となく鏡からはそれに対する抗議の意思が感じられた。けれど、それを完全に無視するため、カガミは思考を、思うことを止めていた。カガミはただ哄っている。

唐突に、鈴音は歩みを止めた。まるで、電池が切れたかのように、せわしなくそれぞれがバラバラに動き回っていた複眼が、一人の人物に固定される。虫の目のことなど誰にもわからなかったが、それは凝視しているのだと、感覚的に理解できた。

——直後。

鈴音の姿は消えた。

いや、そう見えた。消えたように。けれど、それはただ視認不可能な意識の外に、認識できないだけの速さで移動しただけだった。

刹那。鈴音はメルデイスの目の前に移動していた。鈴音は——鈴音の複眼は、メルデイスを舐めるように、食い入るように至近で凝視する。

メルデイスはそれに対し咄嗟の反応が遅れた。息を飲み、口からはひっ、という小さな音が漏れた。それは、突然目の前に現れたからか。それとも恐怖からか。メルデイスにはわからなかった。

考える時間など与えられなかった。

いきなり、メルデイスの身体が吹き飛んだ。

思考が混乱し、全く理解できないうちに突如吹き飛ばされたメルデイスは、その速さのままに長椅子に突っ込み、長椅子を破壊し、壁にぶち当たると倒れた。

鏡はそれをただ見ているしかなかった。

カガミは哄ったまま。ただ、待っていた。

人間より多少強い程度の肉体強度しか持たぬはずのメルデイスは、ふらつきながらも立ち上がると、愕然と鈴音の形をした異形を見つめた。その、傍らには盾が砕け、両腕は破れて、豪華で上品なしつらえだった緑のドレスの引き千切れた、緑の人形、盾のエスメラルダが倒れていた。それは、まさしく糸の切れた人形。こわれたおもちや。動く気配はなかった。

メルデイスは、エスメラルダの盾と、白の人形オブディの壁衛魔術により、辛うじて軽傷ですんでいた。どちらか片方でも欠けていれば、見るも無残な死に様を晒していただろう。

愕然としていたメルデイスの表情に、怒りが表れる。

「ルビーム、サフィニア鈴音さんを殺しなさい！ オブディは二人の援護及び防衛を！ ディムドウは鈴音さんが動けぬよう書に登録されている全ての魔術を持って拘束に当たりなさい！」

顔を怒りから真っ赤に染め、思念だけで事足りるはずの命令をメルデイスはあえて口頭により行なった。

それを受け、それぞれ命じられた任を果すべく行動を開始する。

剣と槍を構え、斬り、貫かんとする赤と青。それを、補助魔術により援護する白。自らの魔導機関に登録されている魔術から、最も早く強いモノを検索し複数同時の擬似詠唱を開始する黒。

鏡はそれを見て、やめる！ と叫ぼうとした。

鈴音の身を危惧してというのも勿論ある。けれど、それ以上に、その行為に意味がないということをよく知っているからだ。いや、無意味ですめばまだいい。状況がより悪くなる可能性すらあった。——その可能性のほうが圧倒的に高かった。

けれど、鏡の口から声は出なかった。出せなかった。

カガミが、出さなかった。

雛罌粟 鏡という肉体の優先権を得る方法の一つ。

一方よりももう一方が、より強い欲望を持つこと。

現状において、鏡よりも、カガミの愉しみたいたいというシンプルな

欲望と狂気の方が、遙かに勝っていた。

かといって、鏡の鈴音に対する思いが弱いわけではない。その思いは筆舌に尽くしがたいほどに強く、重い。けれど、狂気に抗う鏡と、狂気に浸されているカガミ。その差は尋常じゃなく深い。

そもそも、雛罌粟の一族は狂気の一族。その血は鏡にも流れており、それはとても濃い。矛盾した鏡よりも、血に忠実なカガミが優先されるのは当たり前だった。

ただ、傍観するしかない鏡。右半分は自由になるといつても、それだけでは意味がなかった。

カガミは哄い、ただ待っていた。

そうしている間にも、人形達と鈴音の戦闘は始まっていた。

物質強化の魔術により、精度と硬度を格段に上げた己と武器を持つて、鈴音に斬りかかる赤と青。物質強化と並行して、赤と青に防御用の障壁を即時展開できるようにしている白。両腕に光輪——疑似詠唱用の術式を展開し、異なる二つの攻性魔術を同時に行使する黒。

鈴音は右腕の幾つもの甲虫の足で赤と青の攻撃を受けている。強化された武器によりそのほとんどが切り落とされていくが、鈴音にそれが効いた様子まったくない。どころか、切り落とされた足は新たに生え変わり、その数が減っている様子はない。

黒の放つ水系魔術と光輝系魔術による拘束と攻撃の魔術が、幾つもの水飛沫や光を放ちながら鈴音を襲うが、全ての水は足に現れた幾つもの口が呑み込み、光は蝶のような翅から舞上る鱗紛に遮られ、全く意味をなしていなかった。

メルデイスは目の前のその現実が信じられなかった。

およそ信じられるものではなかった。

冗談にしても、悪夢にしてもありえないことだった。

物質的なものも、魔術的なものも、一切効かないというそんな外れたモノが存在していることが、信じられなかった。絶対にありえないことだった。

異形と人形は動きつづけている。

蟲の蔵とは、幾匹もの蟲を従えるゆえの名である。

蟲とは、使役するために意図的に生み出された虫のことである。

峰岬 鈴音は“蟲使い”という人間達の宗家の娘で、現在では唯一の蟲使いである。

それが、メルデイスの持ちえている峰岬 鈴音の情報の全てである。

メルデイスがこれを知ったときの感想は「ふう〜ん」という心底どうでもよさげなモノだった。実際、メルデイスにはホントにどうでもいい。どうしてそれだけの、そんなつまらない存在に父や他の者たちが興味を持っているのが、重要視しているのが本気でわからなかった。

そうだろう。

要約すれば、鈴音は特殊な使い魔を使役する人間であるというだけなのだから。

そんな存在は、幾らでもいる。そして、それだけの存在など、伯爵階級未満。侯爵位である自分よりも明らかに格下。何故そんなものに、興味を惹かれる謂れがあるだろう。

実際、それを知り彼女にあつてからも大した力など感じなかった。特有の匂いも薄かった。

だから、軽視した。いや、実際は姫に対する人質程度にしか考えていなかった。

鏡がなぜそんな脆弱な存在にご執心なのかも理解できなかった。

他者の趣味などそれぞれだと、考えることを放棄していた。

そうして、実際は。現実は。

それを目にして。メルデイスは己の過ちを認めた。悔いた。自らの知った情報などほんの一部も一部。瑣末なことだと知った。けれ

ど、だからと言ってどうにかできるとも思えなくなっていた。

物理的攻撃も魔術的攻撃も一切効かない。

出鱈目すぎた。

魔術とは“魔を持つて魔を滅する術”のことだ。

本来の源は古く存在する魔法と呼ばれる、世界の法そのものを捻じ曲げる奇跡のことだったが、教会がそれを扱う者の全てと、それに関する一切の情報を葬ってしまった。

そのため、“法を改する法”と呼ばれ人間の扱えた究極の神秘が存在したにも関わらず、人を害する存在が現れた時、人はそれら魔に抗うことが出来なかった。

それでも人は諦めず、極々微小な情報の断片から魔術という、魔を倒すために魔と同じ方法を用いるという愚術を創った。

それは、究極の神秘である魔法をほんの僅かだけ扱える微小な力。それでも人はそれに縋り、確立させ、術として研究し、実践と実戦を重ねてようやく魔に抗うだけのモノにした。

今では、人であっても魔と同等に渡り合えるだけのものになった。爵位すら持たぬ魔であれば、容易に滅ぼせる。爵位を持っていても、容易とは行かないまでも、術者次第では十分に滅ぼすことの可能なものとなった。

そして、クローチエという、協会の術者——メイガスの血を引き、尚且つヴィスコンティエという侯爵位の血をも引くエストリエたるメルデイスは、魔としても術者としても上位の存在。

それなのに、そのメルデイスの攻撃の一切は、蟲の蔵という存在の前では無意味。

信じられない。ありえない。非現実的。

メルデイスは、ここにきてようやく、

——恐怖した。

戦闘は相も変らぬものだった。

攻撃を行う人形達。

それを防ぐだけの鈴音。

斬る人形と、それを再生していく鈴音。

意味がなかった。

いや、疲れは知らなくともそれを操るのはメルデイスという生きた者。無尽蔵とは行かない。

赤や青を巧妙に操るのはメルデイスのブラッディナイオとしての魔術と、惑乱候としての異能。

鏡が血を操作するのに力を消耗していくように、メルデイスもまた、その力を使えば使うほどに消耗していく。たとえ、事前に多くの血と精を飲んでいたとしても、使えば減るし、減りつづければ底をつく。

白や黒は自立型で宝石人形よりは自由に動くし、魔術の行使もメルデイスを介する必要があるが、事前に蓄えていた魔力がそこをつけば、文字通りの糸のきれた人形となる。

かといって、メルデイスが魔術を使い加勢すれば今度は赤と青を操れなくなる。惑乱の力を使おうにも、あんな心などないとは思えない状態の鈴音に効くとは思えない。

ジリ貧だった。

それは鏡にもメルデイスにも十分に理解できた。

鏡には、この状況を打破する方法があった。

けれど、カガミがそれを赦さない。

鏡の思いは、カガミの欲望にはいまだ勝てなかった。

鏡は歯噛みする。何も出来ない今の自分が、救いたくとも救えない自分が、たまらなく悔しい。

リンを助けない。救いたい。抱きしめて大丈夫だよと言ってあげたい。唇を重ね互いを求め合いたい。

あの時と同じ事にはだけはしたくない。

そう思うも、カガミがそれを赦す気配はない。

カガミは映っていた。

そうして、ここでようやく思った。

――揃った。

と。

あまりの異常な気配に、八雲はようやく目が覚めた。

頭がぼーっとして。上手く思考が纏まらない。けれど、厭な存在感がする。白い自分とは相容れないくせに、白の自分では絶対に敵わないと思わせる――いや、理解させる気配。存在感。

八雲は鏡に敗れたことを思い出した。それに対して、別段思うところはない。負けようが勝とうがどうでもいい。ようは、あのいけ好かない自治会長から都香を取り戻せればそれでいい。契約の内容は鏡とあるいは鈴音と戦うこと。勝敗に関する一切言われてはいない。あるいは負けることなどわかっていたのだろう。

八雲は思うと、溜め息をついた。

なんでイヤで逃げ出したのに、巻き込むんだ。と。

思おうとも考えようともしないことだが、誰かに愚痴りたくもなる。

けれど、そうもいかならしい。と、ようやくまともに動くようになった頭で思い、立ち上がる。

そうして、気付いた。痛みや怪我が存在しないことに。

白の八雲にとっては猛毒の鏡の、魔の血液。それによって引き起こされた損傷が何処にもない。どころか完治している。

感謝すべきか、当たり前だと開き直るべきか。

鏡たちの友人の八雲として、そんなことを考える。

「さて、現実と向き合うか……」

八雲はそう呟くと、先ほどから聞こえる音と、感じる存在感に――  
――現実を意識を向けた。

辛うじて人の姿をしている異形と、可愛らしいくせに凶器なんぞ

を持って勝てに動く人形と、ぴかぴか光を放ったり水を出したり火を出したりしている人形が戦っていた。いや、はたから見るとそれは、遊んでいるようにも見えた。

（ねえ“ボク”？）

今までずっと無視を決め込んでいたカガミから鏡に、そんな声がかけられら。

いつもの自分と同じ口調だが、そこに込められた真逆のものに不快感が募る。

（はやくボクに身体を明け渡せ！）

鏡はカガミと会話なんかする気は微塵もなかった。だから、そう怒鳴りつけた。

（話の後にね）

対して、カガミはそう言って笑う。カガミはどうしても会話をする気らしい。

結局は同じ“鏡”。鏡は会話をしないと先に進まないとさっさと理解し、それを早期に終わらせることに努めることにした。

（ねえ。“ボク”。リンちゃんのためなんでもする？）

カガミは鏡との会話の時だけ、鏡をボクと呼ぶ。そこにどれだけの意味があるのか、鏡は知らないしどうでもいい。

（当たり前だ！）

（本当に？ 何でもだよ？ 彼女との誓いを破ることすら入ってるんだよ？ それでも？）

愚問だった。

鏡に——いやキョウウにとって、もっとも大切なのはリンだ。彼女のためならなんでもする。二度と起こさないと誓った“ヒトゴロシ”以外は。

（そう。じゃあさ、お友達の血を飲む？ さっきアタシがしようとした時に無意識下で止めたよね。それでも、出来る？ リンちゃんとの誓いの、約束の一つである“リンちゃん以外の血の摂取はし

ない”。それを破れる？)

カガミは自らの記録——記憶の大前提たる源——から、他者の血を吸った事実を忘却している。だから、鏡はカガミがとうの昔にリンとの約束を破ったことを知らない。

だから、一瞬考えた。

けれど、

(当たり前だ！今のボクには力が全然ない。こんな状態で蟲を降せるわけがない。誰でもいい。血が必要だ。だから、飲む。その結果、リンに嫌われ、ても……)

その時のことを思い、鏡の言葉は最後、血を吐くようであり、とても弱々しいものになった。けれど、その意思は強かった。本当に、リンのためならなんでもするだろう。

カガミはニヤリと哄うと、自らの意識を深層まで引っ込め、身体を鏡に明け渡した。

半分だったが故に鋭敏化していた全感覚が、徐々に元に戻っていく。その力が霧のように広がる奇妙な感覚に、鏡は目を細める。それは胸のむかつくような不快感を耐えるためでもある。

「おい、鏡」

不意に、背後からそう声をかけられた。

振り向けば、いつのまにか八雲がたっていた。もはや敵対する意思はないようで、いつもの彼女らしい気さくな態度だ。それでも、目には陰がある。

「何突っ立ってんの？ あれ、よく見たら鈴音ちゃんだろ？」

「そうだよ。だから、止めなきや。邪魔、しないでよ」

鏡はそれだけを言うと八雲から目を外し、鈴音のほうへと駆ける事すら出来ずに歩いていった。徐々に力の消えていく脱力感と倦怠感を引き摺りながら。

八雲はそれを、やれやれと腕を組みながら黙ってみていた。自分の口出しすることではないと。それでも、八雲は鏡の力の低下と薄さを感じ取っていたので、頼まれたら手助けくらいはしてやろうと思っていた。

それまで、とりあえずは見物。

徐々にメルディスは冷静さを欠いていっていた。

思考は混乱し、頭は纏まらないと言っても惑乱候でありブラッディナイオ。人形を操る集中力は欠いていなかった。けれど、幾度斬ろうとも、魔術を使おうともいつこうに効いている気配はないのだ。焦燥も疲労もつのる。そうしてそれは次第に冷静さを奪っていく。

鈴音はいつこうに攻撃をしてくる気配はない。だが、先ほどまで

のただ防戦するだけではなくなっていた。

赤が背後に回り剣を振るう。

鈴音はそれを、髪が絡まり出来た幾本かの触手で迎撃する。腕に生えた甲虫の脚のとは違い、触手は赤の斬撃を弾き返した。それにより隙が出来た所へ、他の触手が攻撃を加える。赤の人形はそれによつて大きく吹き飛ばされるが、白の防衛魔術により損傷は受けていない。床へ着地すると、再度攻撃を仕掛ける。

青の刺突が鈴音の人の部分である左手を狙う。

鈴音はそれを左腕で弾く。左手は人でも左腕は歪な光沢の不気味な色彩になっており、そこはまるで鋼のように、いやそれよりも硬く補助魔術のかけられた槍の切っ先を跳ね返した。

槍はそのリーチが長い分、一度梳きが出来ると容易に次の行動に移れない。そうして生じた隙に、槍を掴むと引き寄せ、鈴音は青の人形を振り飛ばした。

黒の人形の放った光へ向けて。

間一髪、なのか白の防衛魔術が働き、青の人形は味方の攻撃を受けることはなかった。

黒の人形の放つ魔術が幾度となく鈴音を襲うが、鈴音はそれを遮断する異様な麟紛を蝶のような翅の羽ばたきにより舞上らせ防ぐ。あるいは、先ほどのように赤や青を投げて防ぐ。

鈴音は自分からの攻撃はしない。

だが、攻撃をされれば反撃をするようになっていた。

そして、それもメルデイスの冷静さを欠く要因の一つだった。

攻撃はしてこない。だが、攻撃をすれば反撃される。だからと攻撃を仕掛けなければ、何をされるかわからない。

この恐怖から生まれた迷宮が、徐々にそして確実にメルデイスの冷静さ、集中力を奪っていく。

そして、それが、ついに戦力を欠くことになる。

青が放つ槍による連の刺突。それは鈴音の身体を余すことなく貫かんとい度も繰り返されるが、鈴音はその全てを蠢く髪の触手で、

幾度も生える右腕の甲虫の脚で、異常な硬度の歪な肌で、脚に現れた無数の口で、防いでいく。

そして、

「——っ!？」

メルデイスはその異常をによる自らの力の否定によって、完全にココロを乱した。

芯にダイヤモンドを使い。抗魔処理を施し、補助魔術まで架けた銀の槍が、鈴音の脚に現れた虫のような口により、折られ、碎かれ、喰われた。

そして無手になった青の人形は蠢く髪の毛の触手に捕らえられ、槍と共に脚の口に腕から喰われていく。

白の人形が防衛魔術により口と青の人形の間には障壁を展開するも、その障壁ごと喰われていく。

右腕と、左足と、空のような青さの長い髪が、ギチギチと鳴る虫の口に喰われた。

赤の人形が、青の人形の長い髪をショートカットに切り、触手に捕らわれた部分とそうでない部分を切り離す。

八つのパーツに分解された青の人形は、白の人形の物質移動魔術によりメルデイスの前へと移動される。

けれど、そこで限界だった。

まず、緑のエスメラルダがやられた。物理攻撃の一切を防がれ、魔術攻撃のこと如くを無効化され、対魔用の銀槍を喰われて青のサフィニアも腕と脚が喰われた。

メルデイスは、打ち砕くはずだったのに、逆に打ち砕かれた。自身を。プライドを。それも当初の狙いの公爵にして鮮血姫の忌み名を持つ鏡ではなく、軽視していた峰岬 鈴音に。その名をした異形に。

残った赤、白、黒が攻撃、魔術を止めメルデイスの元へと戻る。

メルデイスは壊された人形を抱きしめ、俯いてしまった。

メルデイスは、惑乱候にしてブラッディナイオの名を持ち、候爵位

をもつ魔でありメイガスであるエストリエの少女は、

――全てを否定された。

「リン！」

鏡は、いや。キヨウは最愛にして唯一の少女の名を叫ぶ。

その少女は反応しない。いや、顔を声の方向に動かし、ただ眺めやるだけの動きを反応と呼ぶなら、反応はあった。

鈴音は動かない。ただ、虫のような複眼に、死人のような濁った目に、鏡の姿を映すだけ。

「リン！」

もう一度、キヨウは叫んだ。呼んだ。

身体は思うように動かない。カガミの安易な行動により致命傷を負った罅割れた左腕は、全く回復しない。その傷に引き摺られるかのように、力は徐々に失われていく。傷から流れる血は外気に触れる先から灰になり、生じた罅は徐々にその範囲を広げていく。

襲い掛かってくる脱力感と倦怠感。血を望む本能。渇き。

それら全てを無視して、キヨウは鈴音を、リンを呼ぶ。

護ると誓った。

一緒にいると約束した。

二度とあの時のようなことにはさせないと。  
声を大にして呼び叫ぶ。

「――リン！」

私は、泣いている。

いつかと同じように。

膝を抱えて。丸くなって。

耳をふさいで。

目を瞑って。

恐いから。

寂しいから。

ココロを殺すようにして。

そうすれば、恐くないから。寂しくないから。

けれど、ココロは、死ぬことは、無くて――。

「リン！」

ようよう鈴音のもとまで、身体を引きずるようにしながらも辿り付いたキヨウは、その異様な姿に一切構うことなく鈴音を抱きしめた。

「リン。大丈夫だから」

鈴音はそんなキヨウを敵と認識したらしく、髪の毛の触手や右腕の脚で攻撃をする。

それに対して、キヨウはただ、鈴音の名を呼び、大丈夫だよ、と優しく声をかけながら抱きしめつつける。

そうしている間にも、髪の毛の触手や虫の脚はキヨウの肌に穴を穿ち、傷つけていく。それでも、キヨウは鈴音の身体を抱きしめたまま、離さない。

触手が腕を貫く。

脚がキヨウの左腕の傷を抉る。

触手が首を刺す。

脚が腹を刺し貫く。

それでも、ただ、優しく呼びかける。抱きしめたまま離さない。貫かれた腕からは、穴があき、血が流れ、そこがまた回復し、また貫かれる。それが何度も、違う場所で、あるいは同じ箇所で行われる。

抉られた傷口からは、流れる血が、罅割れた腕の欠片が、灰となり零れ落ちる。そこから筆舌尽くしがたい灼けるような痛み、気を失いそうな苦しみが幾度となく襲いくる。

刺された首から、血が流れ、気道をから口に血が逆流する。息が出来なくなるのも数瞬。そこもまた、回復していく。けれど、その度刺されていく。

刺し貫かれた腹を通して、胃や肺、内部の臓物が幾度も傷つけられる。かき回される。不快感、こみ上げる吐き気、痛みに苦しみが襲い、頭が徐々にぼやけていく。

それでも、抱きしめて、優しく声をかける。

ただ、戻って来れるように。

こんな状態をリンも望んでいないと知っているから。

ただ、リンと一緒にいたいから。蟲に、リンを穢されたくないから。

ココロを殺した気になっても、そんなことは、私にはできない。

——サビシイ

——ダレカ

——イヤ

——ホシイ

ヤメテ！ お願い。

内側から叫ばれる悲痛な声。  
知らないけど知っている声。  
自分じゃないけど自分の声。

耳をふさぐ。

目を瞑る。

幼子が駄々をこねるように、首を振る。

そうすれば、何もなくなると信じて。そう思い込むようにして。

何も無い？

それがイヤで、こうしているのに？

それを望む？

わからない。いやだ。

——ン

耳をふさいでも、声が聞こえる。

——ン

目を瞑っても、何かが目に入る。

——リン！

それは——

「——キヨ、ウさま？」

絡まって出来た触手が、髪が解けて元に戻る。

僅かに蠢いているが、それは風に揺れているようなもの。

脚の動きがやみ、死した虫のそれと同じように、固まる。

ギチギチと音を放ちながら開閉を繰り返していた口が止まり、止む。

はばたき煌く鱗紛を舞上らせていた蝶のような翅が止まる。

空気を叩いていた羽虫のような透明な翅が止まる。

無機質に動き回り見つめていた複眼が、濁り何も映さなくなる。

死人のように濁っていた瞳には、光が灯っていた。

キヨウは、はっ、として顔を上げた。

「リン？ リン！ よかった」

キヨウは動かない左手の分まで、右腕で意識を取り戻したらしい  
鈴音を——リンを強く抱きしめる。

「大丈夫だから。ゴメン。一人にして。すぐ、終わらせる気だったんだ。ううん。言い訳だ。ゴメン。ホントに。一人にしないっていったのに」

ゴメン、とキヨウは泣きそうな声で、強く抱きしめたままのリンに話し掛ける。

リンはなにがあつたのかいまだよくわかっていないのか、どこか呆としている。

けれど、キヨウが抱きしめてくれていることはわかったので、とりあえず抱きしめ返してみた。

——けれど、

——カガミがそうとわかるほど、深層から、表層に届くまで声を張り上げて、狂ったように、禍ったように、哄いだした……。

鼻腔を、強烈な血の匂いが刺激する。

それは、抱きしめている、抱きしめてくれているキヨウから。

それは、自分の髪から。

それは、異形と化した右腕の、そこに生えた脚から。

それは、異常な口の生えた自分の両足から。

それは、自分の身体のことごとくから。

それは、すべて、キヨウの、血。

「——あ。あ、ああ、あああああああつあああああああ！  
やああつあああつあああつあああつあああつあああつ……！」

空気が振動するほどの悲鳴。

泣声。

かなきり声。

思い出される、腕を、脚を、切られ、もがれ、穿たれた自分。  
燃える家。

目の前で殺される父や母。

無気味な音を立てる何か。

哄笑。

凌辱されるイタミ。

自分が、自分じゃなくなる感覚。

紅い血。

赤い血。

朱い血。

アカイチ。

「大丈夫、だから！ 違うんだ！ これは、違う！ そうじゃない！ 落ち着いてリン！ これは違う！ あの時とは違う！ あれはもう終わったんだ！ リンじゃない！ 違う！ もう、終わってるから！」

顔を覆い、切り裂けるようなイタミの悲鳴を上げるリンを、キヨウはそう叫びながら強く抱きしめる。

けれど、悲鳴は止まず、抱きしめていたキヨウを、何か強い力が引き剥がし、突き飛ばす。

受身すら取れず床に叩きつけられたキヨウは、それでも叫ぶ。

けれど、止まないイタミの悲鳴に、その病んでいく響きにかき消されていく。

そこに、小さな、音が混じる。

イタミの悲鳴の響きにかき消されずに、空気に乗って、音が混じる。

肉が裂けるような音。

粘着しつな滑ったモノが零れ落ちる音。

空気が叩かれる音。

何かが這いずる音。

蠢くような音。

開閉を繰り返すような音。

およそ、虫が放つだろうと想像できる限りの全ての音。  
それが、無数。

幾箇所から。

いつの間にか、悲鳴は止んでいた。

変わりに、音が響きつつける。

例えば、風に舞うかのようにふわりふわりと飛ぶそれは、蝶のようだった。

例えば、幾つもの足をせわしなく動かせカサカサと動くそれは、百足のようだった。

例えば、両前足の鋭い鎌を磨ぐように擦りあわせ首を動かすそれは、蠮螋のようだった。

例えば、透明な翅を目に見えぬほどの速さで空に打ち付け滞空するそれは、蜂のようだった。

それら何処から現れたのかわからない虫たちが、まさしく文字通りに無数、それぞれの動きをしながらそこに存在していた。

鈴音は、膝を尽き顔を天に向けたまま、死んだかのように動く気配が無い。

虫たちは、そんな鈴音を護るかのように、その周りから動く気配を見せない。

鏡は回避できなかった、いや。こうなるように仕向けられたことに、それに気付けなかったことに齒噛みした。

今の状況は、なんとしても避けねばならなかったものだった。

「おい、鏡！　なんだよ、あれ。鈴音ちゃんは大丈夫なのか！？」

静観することを決め込んでいた八雲も、さすがの異常に鏡に問う。

鏡は、ゆつくりと立ち上がりながらそんな八雲を、無表情に見る。

そう、無表情。顔には表情らしいものがない。心配や焦燥。恐怖や歓喜。不安や疲労。そのどれもが表情に表れていない。

「……およそ80万。この数が、何を意味しているかわかるか？」

ぼつり、と無感情な声が鏡の口から漏れ出た。

いきなりのその呟くような、独り言のような問いかけに、八雲は眉をひそめる。

そんな八雲に構わず、鏡は喋る続ける。

「この数は、現在確認されている虫の種数だ。未確認なものを合わせると、100万を超えと言われる。だが、それは昆虫と言う括りに纏められているものの数でしかない」

「おい、そんなことより……」

「虫と言う文字は、蟲という文字の省略形であり、本来は蟲という表記が正しい。そもそも、虫というのはマムシを象った象形文字で、小動物全体をさしていた」

暗く、静かなカテドラル。

本来であれば静謐であり聖域であるそこは、今や三人の人外と、一人の化け物。そして無数の虫により支配され、聖域としての清浄さは薄れていた。

虫の蠢く音をバックコーラスに、鏡の言葉は続く。

「それに対し、蟲は生物全体を指す文字だ。『羽蟲』は鳥。『毛蟲』は獣。『甲蟲』は亀。『鱗蟲』は魚。『裸蟲』は人間を指す。これら本来の意味で蟲、あるいは虫という単語を使い、そこに内包された種の数を表すと、膨大な数字になる。そこへ蟲と虫。この二つを同意として区別することなくあわせて使用すると、そこに含まれるのは即ち地球上に存在する全ての種の数と言うことになる」

「だから、それがなんだって言うんだ！？ そんなお喋りをしている間に、鈴音ちゃんをどうにかするのが先だろうが！ お前の大切な人だろう？」

イライラと、長口上を続ける鏡に、八雲はそう怒鳴る。

八雲は鏡が何を言っているかは理解できなかった。なぜここでそんなことをダラダラと喋っているのか、全く理解できない。そんなことをしている間にも、すべきことがあるだろう。それをするのは、鏡の役目だ。

そう八雲は考えていた。自分なら、そうすると。

八雲は、先の戦いで鏡の強さを理解した。その能力の異質さと有用さも。アレを使えば、簡単にことは済むのではないか。なのに何

故それをしない。

それでも、鏡は喋るのをやめない。

「地球上に存在する種の総数。そんなのはボクは知らないが、それは億では利かないだろう。ともかく、蟲を動物の総称たる『蟲』と、小動物の総称たる『虫』の合わさったものと考えたと、それはそのまま全生物、種の総称となる。――八雲」

「なに？」

「リンの――峰岬 鈴音という個体の異名、知ってる？」

「『蟲の蔵』だったか？」

「そう。『蟲の蔵』。蟲はさっき言った意味で、蔵は内包するという意味で使っと、『蟲の蔵』とは、どんな存在を表すと思う？」

「ちよ……。まってよ。それって……」

鏡の言わんとしている言葉の意味に気付いて、八雲はその信じられない意味に戦慄した。

なぜならそれは――

「そう。その考え通りだ。『蟲の蔵』とは全種をその身に内包した存在を指す名だ」

「ありえない！ ふざけるのも大概にしろ！ そんなのは幾らなんでも一つの存在には大きすぎる！ 存在という器は、そこまで大きくない。個体差はあるとは言え、仮にもそれだけの数が入るわけが無い！ 入ったとしても、その存在はすぐに壊れる！ 存在できるはずが無い！」

その通りだ。

存在という器は精々一つの、個人というものを入れる分の容量しかない。全種などという膨大な量が入るわけが無い。

キロバイトしか容量の入らないコンピュータに、テラバイトという膨大な容量のデータは入らない。無理をすればそのコンピュータは焼ききれ、壊れる。それと同じだ。

「そう。その通り。だから、これは少し違う。『蟲の蔵』。この名

は本来の名を隠すために雛罌粟が用意した仮の名だ。本来の峰岬鈴音という個体——いや、存在を指す名は『外蟲』。全ての群から外れ、完全に孤立したそれぞれの種の固体ならぬ孤体。峰岬 鈴音はその全てであり、峰岬 鈴音という人を模したモノは、人という種の群からも完全に外れた孤だ。それも、そのうちの一つでしかない」

「はあ？　なんだそれ？　そんな——」

八雲は、思わず馬鹿にしたかのように笑いながら言う。それで、鏡の言った台詞は荒唐無稽であり、信じられるはずのないものだ。た。

けれど、その顔も目も、真剣そのもの。冗談やうそを言っていない。少なくとも、本人はそんなことを言っていない大マジメなもの。わかった。仮にそうだとして、それでもやっぱりありえないだろ」「よく聞いていたか？　全てから外れているんだぞ？　その外れた存在を、何故外れていないものの常識で縛って考えているんだ？　いいか？　『外蟲』と言う存在は全ての種であり、その全ての群から外れた、全ての種と群とは異なる存在だ。それを、外れていないものの常識で縛って考える方がどうかしている」

暴論。

荒唐無稽。

けれど、鏡の顔は真剣そのもの。

鏡は、嘘は言っていなかった。

それを裏打ちするかのように、見れば鈴音を護るようにしている虫たちのその全ては、一匹として同じモノが居らず、また、八雲の知りえているどの虫とも外見や大きさ、色など視覚的特徴が一致しない。すべて、似ているから虫だと思える程度。

「峰岬 鈴音があの状態になった今。現状でボクに出来ることは何も無い」

鏡は、やはり無感情にそう言った。

「ふ、ふざけんな！ 出来ることは何も無いって、」

「最後まで話は聞くべきだよ。八雲」

無感情に発せられた鏡の台詞に、八雲は対象的に感情を剥き出しにして噛み付く。だが、それも鏡は無感情にゆるりと遮る。

「幸いにも、峰岬 鈴音が孕んでいる種のうち、今は虫種しか顕現していない。虫種はその数こそ膨大で、姿形も一定しないから面倒だが、それだけだ。他の種が顕現する前に全ての虫種を峰岬 鈴音と言う器に戻し、峰岬 鈴音をボクのリンに戻す」

無感情だった鏡の台詞。その最後の部分にだけ、感情が灯っていた。

「なんだよ。できるじゃん。出来ることあるじゃん」

八雲は激化した感情を沈め軽い口調で言うが、鏡は首を振ってそれを否定した。

鏡が言ったことは正しい。

全ての種から孤立したそれぞれの種の孤体。その群の正体が峰岬 鈴音であり、それぞれの種の器であるなら、漏れ出た内容物は器に戻してやればいい。

だが、はたしてそうだろうか。

鏡は言った。

『外れたモノを外れていないモノの常識で縛るな』と。

だったら、鏡の言う方法は外れているものに当てはまるのか？

八雲は思っても、それを口にしない。

自分が知っていることなど無いに等しいのだ。なら、よく知っているだろう鏡の言葉を信じる他ない。

八雲にとって、一番大事なのは都香だが、鈴音も大切な友達だ。

八雲は彼女をもとの彼女に戻す手伝いくらいはしようと思っていた。鏡が口を開く。

「そう、できることはある。けれど、それは現状の、今の状態のボクには出来ない」

そう言って鏡は八雲にもよく見えるよう、自分の左腕を示す。

そこにあつたのはマネキンの腕のように無機的で、およそ生物のパーツであるとは思えないほど罅割れ、硬質化したもはやモノ。そこから血の代わりに灰が零れ落ちている。触るだけで、崩れてしまいそうだった。

それを見た八雲は息を飲んだ。

色鬼の現宗主とは言えまだ17歳の少女であり、他の色鬼のように戦闘などしたことのほとんど無い八雲にとってそれは、初めて見る人外の、魔である拭い去れない証。それも、最凶と呼ばれる種族の。

ざわ、と八雲の魔を浄化し滅する白鬼の血が騒いだ。今なら、簡単に打ち滅ぼせると。

八雲は囁きかけてくる血の声に抗するべく、頭を振ると切り替えるように口を開く。

「……つまり。力が、血が必要なんだな？」

「そう」

鏡は短く一言だけを簡潔に言い領いた。

鏡やメルデイスのような種族は複雑に見えてその実はとてもシンプルな構成になっている。

力を、異能を行使するために必要なのは生命の象徴とも言える生液で、食事などもそれで事足り、異常なまでの回復を誇るその源も、やはり生命の象徴。

つまり、命と言うおおまかなカテゴリに類するモノを取り込むと言ったただそれだけで、およそ必要と言える全てをまかなえる。

だからこそ、ここまで強く、長く、彼女たちの種族は圧倒的なまでの強さを誇る。最悪、彼女たちは敵からそれを啜ればいい。そうすれば、自らの餓えを凌ぎ、力は回復し、敵を殺すことすら出来る。だが、今はそのことは取り立てて重要なことではない。

「私の血でも大丈夫なの？」

八雲は自らが最も危惧する事柄を問う。

そう。八雲にとって鏡の血が猛毒であったように、やはり鏡にも自分の血は猛毒になりうるのではないかと考えたのだ。

互いに、相反する属性だからこそ。

「うん。ボク 능력は血の操作だよ？ 一度ボクの支配下においてしまえば、それがどんな血であろうとも操作し、ボクに都合のよいものになる」

だが、鏡はその危惧を簡単に、あっさりと否定する。

反則臭い……。と八雲はうんざりしながら呟くと肩をすくめた。

だが、これでとりあえずの問題は解決した。さすがは鮮血の姫。血を扱うと言うことに関してはまさに反則。なんでもありらしい。

「じゃあ、私の血を吸って、力が戻れば、鈴音ちゃんをもとに戻せるんだな？」

「そうだよ」

鏡はなんでもないことのように軽く頷く。先ほどから無感情だった鏡だが、いつの間にかそこにはいつもの鏡らしさがあつた。それは、鈴音を元に戻せるということへの悦びゆえか。それとも、内で哄笑をあげていた“カガミ”が沈黙し、感情を殺す必要がなくなつたからか。

ともかく。

「じゃあ。さつさと私の血を吸え。鈴音ちゃんあんな姿、いつまでも見ていたくない。それに……」

「そうだよ。八雲。考えている通り、今は鈴音の周りにいるだけだけど、そのうち、孤独の寂しさを埋めるためにアレらは活性化する。そうなるとボクでも多分、ちよつと苦しくなる」

八雲の危惧は鏡も考えていた。

だが、そんなことを考えている暇など無い。そう言った危惧があるからこそ、今はことを急ぐ必要がある。

それに、こうしている間にも鏡の左腕の罅は欠けていき、その傷

口からは灰が止めどなく零れ落ちている。

鏡はそう言ったそぶりを見せていないが、徐々に、けれど確実に鏡はその力を失っている。それも、このままでは鈴音をどうにかする前に、鏡がその力について死んでしまってもおかしくない。

そうなった場合、鈴音がどうなるのか……。

それは誰にもわからない。

「最後に確認するよ。本当に、いいんだな？」

「くどいって」

「今のボクは力が枯渇していて、本当に血に餓えてるから、過って吸いすぎるかも」

「それでも死ぬことは無いだろ？」

「わからないよ」

「わかるさ。殺しちゃうと、鈴音ちゃんは泣きながら怒るんだろ？」

苦笑しながら発せられたその台詞に、鏡は笑いながら答えた。

「そうだね。と。」

八雲に不安が無いわけではない。死ぬかもしれないなどと思っているわけではない。

ただ、流布されている伝承。その中にある最も有名なもの。それは誰もが知っており、それこそが魔でありながらも数々の創作物に様々な形で存在し、畏怖と共に憧れを抱かせるもの。それは、たまらない魅力を孕んだ……。

けれど、それを今さら訊いたところで、その答えがどんなものであれ、八雲が取れる最善の行動は鏡に血を捧げることだけ。

八雲は自分の白鬼の力に自信が無いわけではない。ただ、最初に感じた異様な威圧感。そして存在感。それが、八雲では絶対に鈴音をどうにかすることなど出来ない、と、確信的に今も告げている。

八雲は、それを拭いきることが出来なかった。

だから、鏡に血を捧げる。それしかできることがない。

都香のこともあるが、それは何があるうとも自分の手で片付け、笑顔で抱きしめると決めていた。

だから、八雲は思う。

まあ、大丈夫だろう。

――と。

ゆっくりと、鏡が八雲に近づく。

引き摺るように歩くその足取りは弱々しく、顔色も悪い。見れば、汗が玉とはりつき息も荒い。

そんな鏡を見かねて、八雲の方から鏡に近づいてやる。

鏡は、倒れこむようにして八雲に抱きつくと、そのまま餓えた獣のように服をはだけさせるのももどかしく、引き裂いて、首筋に犬歯を突き立てる。

ぷつり、と八雲の健康的な肌に鏡の犬歯が食い込み、小さな穴を穿つ。

「――っ！ く、うぁ」

痛みは感じなかったが、それに代わるようにして言いようの無い快感が押し寄せてくる。

突然の不意打ちに、八雲の口から押し殺すような声が零れる。

鏡、八雲ともに頬は朱に染まっている。

長身の八雲に縋るようにして抱きついて首筋に唇をつける鏡。二人とも意味合いは違えど美しい容姿をしているのため、それは一種の絵画のようであり、カテドラルという場所で行われるそれは、とても背徳的だ。

鏡は穿った穴から血を一気に吸うような真似はしない。それは、急激な血の消費によるショック死を防ぐためであり、時間をかけて啜ることにより餓えを誤魔化すためである。

ぴちゃり、ぴちゃりとぬめった、湿った音が響く。

穿った穴から流れ出る血を、鏡は舌で舐めとるようにして啜る。

「つつ…… ああく」

熱い吐息が八雲の口から漏れ出る。

八雲の精神力は弱くはない。それでも、波のように引き押しを繰り返すその快感は、八雲の精神を弄り、その口からは快感が耐え切

れずにもれて出る。

鏡は貪欲に、ただ流れ出る血に舌を這わせ、時にキスをするように唇をつけ、血を啜る。

その鏡の口からも、時折熱い息がでる。

コクリ、コクリと鏡の喉が鳴る。

「う、ああ……っ」

耐え切れなくなったらしく、八雲は床に膝をついた。止めどなく襲いくる快感に、ついに立っていられなくなったのだ。

くずおれたように座り込んだ八雲にあわせて、鏡も膝をつき座り込み、肌に舌を這わせ血を啜りつづける。

ただ、飢えを癒すかのように貪欲に。

じつくりと、丹念に、ちよつとづつ血を啜ると、鏡はようやく満  
足したのか八雲の首筋から口を離れた。その際、熱い吐息が首に吹  
きかかり何度目かの、そして最後の、背筋を撫でるような微妙な感  
覚を八雲に与える。

八雲の顔は朱に染まり額には汗が玉となり浮かんでいる。その息  
もどこか熱く荒い。それは鏡も同じで、朱に染まった頬に熱くて荒  
い息をついている。

それだけを見ると、禁じられたまぐわいを終えた少女たちの姿にも  
見える。

ただ、八雲は腰が抜けたようにぐったりと座り込んでいるが、鏡は  
対照的に、血を啜り終えると力強く立ちあがった。先ほどまでの疲  
労困憊したような状態が嘘のように健康的に。

「ふふふ。あはは。あはははははは」

不意に、鏡は口に手を当てて静かに笑い出した。

八雲はそんな鏡を、目を細めながら恨みがましく睨んでいる。

「……何がそんなに楽しいか知らないけどね。この、あー……なん  
だ。えつと、変な感じはどうにかならないの？」

「ははは。気持ちよかったでしょ？ とても。感じなかった？」

より一層顔を赤くしてごによごによと文句を言う八雲に、鏡は笑  
いながらストレートにそう問い返す。その顔は何故だか本当に楽し  
そうである。

口をぱくぱくと開閉させて、結局何も言わずに赤くなった顔を俯  
ける八雲。その以外にもウブな反応に、鏡はさらに楽しそうに笑う。  
くすくすと。

「八雲つて、以外とカワイイところがあるんだね。くすす」

「……ほっとけ」

笑みを浮かべたままそう感想を漏らす鏡に、八雲は蚊の鳴くよう

な小さな声で憎々しげに吐き捨てる。それがまた妙なギャップを醸し出して、鏡はまったくすくすと笑う。

「ボクたちの吸血行為ってね。その際に生じる苦痛なんかを快感に変えるんだ。だから、こんな忌むべき行為をされたのに感じてしまった、それも腰が抜けるほどに感じてしまった自分を、嫌悪することも恥ずかしいが、これも無いよ」

仕方のないことだから、と慰めるように、鏡はまだ俯いたままの八雲にそう言う。気を使ってか、淡々と。

「蚊かよ」

そうは言っても恥ずかしいものは恥ずかしいし、それをそうとあからさまにするのも嫌らしく、八雲は鼻で笑いながらそう言う。だが、朱色になった顔は俯けたままだし、腰が抜けて立てないのもそのまゝ。

「いい喻えだね。ただ、逆だけど。……蚊は血を吸った後効果を、ボクたちはその行為中に効果を」

鏡は、笑みを消しマジメな顔で吸血行為というモノを説明しだした。そんな余裕などないというのに。

けれど、そんな余裕があるなら早く行動しろと思っても、それを口に出せない。八雲はその奇妙な感覚に疑問を感じながらも、鏡の説明を黙って聞く。

「血は命の象徴でありそのもの。それを啜られ利用されるといのは酷い冒瀆だ。だから、ボクらは常に命の尊厳なんて幻想を掲げる人間達の敵だ。人間だって、他の生物の生命を、どこか自由すらも容易に踏み躪るくせに」

そう言う鏡の顔がかすかに歪んだことを、八雲は見逃さなかった。それは怒りと嘲笑。傲慢で自分勝手な人間に対する否定の意思。八雲が始めて見る表情。それは八雲は考えもしなかった、常識というものに括られた矛盾。

八雲はそれに対して咄嗟に否定を放ちたくなかったが、結局何も言わなかった。言えなかった。それはどう言い繕おうとも否定しきれ

ないものだったから。

鏡は、軽く溜め息をついた。その顔はいつもの鏡のそれ。

「——まあ、それはいいとして。ボクらは別に人間を殺したいわけじゃない。殺す必要も無い——人間と違ってね。命を啜り利用するが、それはそうするしか生命を維持する方法が無いからだ。代替行為が存在しない。だから吸血行為をする度に人間に死なれると困る。六十数億なんて数、ボクらが毎日啜りつづけて、そのたびに死んでたらずぐに底を尽く。ボクらはそんなこと承知の上なのだから殺すようなことしない。けれど、されている側はそうじゃない。命の尊厳を叫ぶ者は耐えられずに自害する者もいる」

まさかと思わないでもないが、それは事実であり納得できるものであった。

世界で最も多いキリスト教信者。彼らにとって鏡たちのような存在はもつとも忌避すべき存在で、昔から忌み嫌う悪そのもの。そんなものに肌を穿たれ命を利用される。それはどれほどの辱めか。

「そうならないために、させないためにボクらの吸血行為には常に快樂が伴う。それは、性的行為では絶対に味わえぬ禁忌と蹂躪の快樂。苦痛であれば人間は死に逃げるが、快樂には流される。そして、それに身をゆだね、その味を覚えてしまうと、それを求めずにはいられなくなる。そうなるようになっていくんだ。それは逃れようと思つて逃れられるような容易なものじゃあない」

そこまで言くと、鏡は八雲に向けて微笑んで見せた。

「……ようやく、傷が完全に修復した」

そう言つて鏡は銀の凶器により癒せず、罅割れ、流れる血ですら灰となつて零れ落ちていた左腕を、胸のあたりまで上げて軽く動かす。歪な傷跡こそ残っているものの、それは完全に回復していた。罅はなく、灰が零れるようなことも無い。

「さすがに、傷跡までは治らないみたいだけど、まあ、しかたないよね」

そう言つて自らの白く綺麗な肌に刻まれた、歪な傷跡をなぞるよ

うに触る。

どうやら、さっきまでの長口上は傷が回復するまでの暇つぶしの  
ようなものだったらしい。

それにしても、と鏡は押し殺すように、再びくすくすと笑い出す。  
「ずいぶんと余裕があるみたいだな」

そんな鏡に不審げな表情をしながらも八雲は呆れたように呟く。  
八雲の顔からはすでに朱色に染まっておらず、いつも通りだが……  
座り込んだままだ。どうやらまだ立てないらしい。

鏡はそんな八雲の呟きなど聞こえていない風に忍び笑いを続ける。  
「八雲つてさ。まだ処女だったんだね。おかげで美味しい血は飲め  
たし、思った以上に渴きは癒せたし……」

「んなつ——」

くすくすと笑いながら言われた言葉に、八雲は再び、今度は耳ま  
で真っ赤にする。

何かを言おうと口をぱくぱくと開閉させるが声は出ず、身をわな  
わなと震えさせている。

鏡はそんな八雲に首を傾げるが、すぐに言い直した。

「ごめんごめん。違うんだ。そうじゃない。肉体的な意味——破瓜  
していないということじゃなくて、精神的な——ココロの意味での  
ことだよ」

「わけわからん！　んなことよりもさっさと鈴音ちゃんをどうにか  
してやれ！」

八雲は顔を赤くして震えながらそう怒鳴る。

それでも座り込んだままなのでどうにも間抜けだ。

「まあ、聞きなよ。それに、今はまだダメなんだよ。あの虫種はま  
だ顕現し続けている。このまま何をしても意味がないんだ」

見ると、確かに虫の数が明らかに増えている。それは鈴音の姿が  
隠れるほどで、何故今まで気付かなかったのか、カテドラル内には  
それらの放つ異様で異常な音が溢れていた。

それは虫の放つであろう音という音の大コーラス。それぞれの音

が自分以外の音を消し、蝕み、喰らい、混ざり合う。音の混沌。

「ボクの言う処女は、ココロを何ものにも捕らわれていないという意味だよ」

そんな中で、鏡はなんでもなしのように話を戻し、続ける。

「八雲。キミのココロはね。キミの正体同様真つ白だ。色をもっていない。侵されていない。他者に向くだけ。そこから先に向かつていない」

「なにを言って……。てか、お前。なんでこれを聞いてて平気なんだ？」

「平気じゃないよ。こうして話していないと気が狂いそうだ。だから、後少しはボクの話に付き合って」

そう言う鏡の顔は常の通りで、僅かに笑みを浮かべているように見える。だが、よく見ると冷や汗が流れているのがわかる。

今までの意味があるようでないような話は全て、気を紛らわすためのものだったらしい。

音に気付いた八雲も気をそらさなければ音に吞まれそうだった。なぜ、これほどの音に今まで気付かなかったのだろう。

八雲はそう疑問に思っていたが、それは鏡の話の内容の全てが八雲にとっても大きな関心のあるものであり、それを聞くことは、意識の全てをそちらに向けることになっていたからだった。

八雲が気付いているかどうかはわからないが、八雲がいまだに立てないのは快樂により腰が砕けたからではない。鏡が加減を誤り、血を多く飲みすぎたからだ。そのため、満足に立つことですら一時的に難しくなっている。

だから、それが多少回復するまで。鏡は意識をそらすために、音に飲まれないようにするために、無意味でない無駄話を続ける。

「八雲。キミは、確か妹がいたよね？ えっと……」

「都香のこと？」

八雲は気をそらすために鏡の話に付き合う。そうせざるを得ない。「そう、その子。八雲はその子のことを好きだと思っているかもしれない」

れない。けれど、それは何かがあればすぐに捨てられる程度のもんだ」

「そんわけ」

「最後まで聴きなよ。……例えば、常識や倫理という堅牢強固な壁が目の前に立ちはだかった時、キミは都香ちゃんへの想いを殺すだろう。それが、どういう理由しろ。それが、キミが精神的に処女――誰にもココロを侵されていないということだ。つまりね？ まともだ、ということだよ」

「……………」

八雲は押し黙ったまま口を開かない。

意味を量りかねているのだ。

鏡は言った。まともだということだと。常識や倫理によりその想いを殺すことになる。

「まあ。キミの好きが、ボクやリンのそれと違うと言っのなら、それが普通なんだけどね」

そう言っつと鏡は、話は終わりだ、とでも言っつ風に八雲に背を向けた。

音が、今まで以上に活発に、大きく煩くなっている。

目算で万。それほどの虫が宙を飛び、地を這っている。虫たちは鈴音を護るように、隠すようにしている。そのため、鏡たちの場所からは既に鈴音の姿は見えない。

「な、なにあの数……。鈴音ちゃんは無事なの？」

「それは大丈夫。あれらは今のところ鈴音を母であり居場所としているから、現状で鈴音に危害を加えることはしない。けれど……」

鏡はそこで言いよどむ。

八雲が見ると、鏡はめずらしく緊張しているような面持ち。傷は治っているというのに、冷や汗を掻いている。

「けど、なに？」

「……ボクの予想が裏切られた。あの虫たち、既に活性化してる」

確かに、見れば虫たちは数分前とは違い活発に動き回っている。

それでも、鈴音の周りからはなれないので、鏡が言うまで八雲は気付かなかった。

「これ以上は無駄話できないから、よく聞いて。これから、ボクはボクの本当の異能を使う。だから、すぐにメルデイス——茉莉会長の所まで下がって。下手すると、巻き込みかねない」

「……いいのか？ 私が手伝わなくて。あれだけの数なのに」

「必要ない。むしろ、今の八雲は足でまとい。それに、リンをどうにかしていいのはボクだけ。他の誰にも譲る気も、手を出させる気も無い」

それは、つい数日前と同じ台詞。

鏡が笑みを見せると、八雲は苦笑しながら肩をすくめ、ようやく立てるようになった身体を引き摺りながら、壁際で俯いているメルデイスのところまで下がった。

鏡は八雲が壁際まで下がったのを確認すると、自らの首に爪を立

て勢いよく引き裂いた。

ドロリ、と本来ではありえないコールドールのような流れ方をしながら、首から血が流れ出る。

そのまま、今度は肩から中指の先までを、左、右、ともに首同様勢いよく引き裂く。

やはり、ドロリ、と血が流れ出る。

それを、鏡は鎖骨の下から臍まで。足の付け根から膝まで同じように行う。

ドロリ、とゆっくりと流れ出ていた血が、今度は水のように、それも全て同じ速度で流れていく。それらは重力を無視して鏡の首の下から膝の上までを余すことなく紅く染め上げると、血が武器類になったのと同様、変化しだした。ただ、それは武器とは明らかに違い薄く、鏡の身体を覆うようにして変化していく。

変化が終わると、そこにいたのは、先ほどまでの所々擦り切れ血で汚れたノースリーブにホツとパンツ姿の、露出度の高い少年のような格好の鏡ではなく、深紅のドレスを身に纏った鏡だった。

鏡は銀髪を括っていた紅いリボンはずし、それをチョーカーのように首に巻くと、深紅のドレスに手を当て、すくうようにして深紅のドレスの血を両手に取る。そして、それを自らの髪に流すと、まるで元からそうであったかのように長い深紅の髪に変化した。

そうしてそこにいたのは、少年のような容姿をした鏡ではなく。怖氣がするほどに凄烈な美しさの、鮮血を纏った姫だった。

これが、雛罌粟 鏡の本来の戦闘スタイル。血化粧。

本来であれば一度操作した血は、その鮮度を落とすために使い捨てなければならなかった。

しかし、この状態では身体から常に鮮度の高い血が流れ、流れた血は毛穴や別の傷口から戻り、循環するため捨てる必要は無くなる。これを今まで使用しなかったのは単に血が足りなかったからではない。これは大前提として、本来の身体の血の三分の一を常に身体から出しておく必要がある。人間であれば三分の一も出血すれば

死んでしまいが、血を扱うことを主とする雛嚙粟において、その心配は無い。最大でも三分の二までなら出血しても絶命することなく生命活動を続けることができる。

だが、今までの鏡は鈴音からしか吸血をせず、その量も自分が死なない程度の最低限の量であつたために、そこまで使うことはできなかった。

けれど、鏡の言うところの処女である八雲の血を、八雲が立つことが難しくなるほどの量を摂取したため、容易にこの血化粧を行うことが可能となつた。

鏡は、一步を軽やかに踏み出す。

二歩目は躍るように優雅に。

そして、三歩目。床が抜けるほどに蹴りつけ、一息で蠢く異形の虫へと突進する。

鉄錆の香りを撒き散らせながらの深紅の颯風<sup>くふう</sup>に異形の虫たちは反応し、自らの器を護るためにその颯風へ、およそ万の位にある虫たちが突つ込む。

黄緑、青、黒、黄色。

深紅の颯風へとぶち当たり、その結果引き千切れ、擦り潰れ、肉片へと化していく虫たちから、それら異様な色彩の体液が飛び散っていく。それは、色彩同様、毒々しいまでの臭気を放ちながら。

それらはただ、鏡が疾走しながら殴り、蹴り、鮮血の操作で切り刻んでいるだけ。それだけで、虫たちは檻褸のように脆く死していくが、鏡はこのまま一氣に進めるなどと短絡的なことは考えていない。

数秒。颯風は万の異形の力と、膨大なその数に耐え切れずその威力を弱め、ついに止まる。

鏡は停止と同時に鮮血ドレスの随所を婉曲した刃へと変換。

停止は半瞬。喰らいつこうと、切り刻もうと飛び、這い寄る虫たちを巻き込みながら螺旋を描くように旋回。

鮮血色の婉曲刃に、虫たちはその身を切り刻まれ寸断される。

飛び散る色とりどりの体液。

撒き散る毒々しい臭気。

円舞のように旋回を続ける鮮血の姫は、優雅に、軽やかに、異形へ死を振り撒く。

だが、程なくしてそれですらも虫たちに止められる。

婉曲の刃を止めたのは地を這う百足のように見えるだけの、五十センチほどの長さの蟻のような大顎を持つ赤い虫と、螳螂のような鎌を四対八本の足全てに持つ十センチ程度の青い虫、そして、甲殻類のようにも見える革質の堅い翅の蝶のような虫。

異形の百足は鏡の足に絡みつき、ブーツに包まれた足を皮製のブーツごと噛み付く。

婉曲の刃を、飛行する異形の螳螂と、甲殻の翅を持つ蝶が受け止める。

異形の百足は、振りほどこうとしても釘で打ち付けられたかのようにピクリとも動かず。

異形の螳螂と蝶はまるで鋼鉄のように、力押しで斬ろうとしても斬れず、微動だにしない。

再びの停止。その隙を異形の虫たちは逃さずに鏡へと一気に群がる。

ほんの数瞬。それだけの僅かばかりの時間で鏡は虫たちに身体を覆われ、虫たちは鏡の身体に張り付き蠢きながら敵か、仲間かの識別をする。

人の形をした何かの表面が蠢き脈動するそれは、どこまでも歪で醜悪。

虫が放つだろう音の混沌に、それらが擦りぶつかり合う不協和音が追加される。

人形劇から異形の交響曲へと変じた宵の歌劇は、始まったばかり。

虫——いや。蟲の、群から外れた孤体たる蟲の欲は唯一つ。

それは、欲とも言えぬ本能。たとえ外れた存在になろうとも唯一、決して外れることは無かったモノ。群から外れ孤となってしまうたが故に、群の中にいる個よりも強いモノ。

それは、群——仲間。群から外れた存在は、それが故に群を、仲間を求める。

人間は社会的動物だと言われている。そのため、他との接触を絶たれると不安になり精神的問題が生じる。これは、別に人間に限ったことではなく情動を有する社会的動物に普遍的に見出される、言わば習性。

だが、これは人間が外から見てそうと決めつけた生物習性の外枠ではない。

これは社会的動物にのみ見られるものではない。これは、存在として確立した全てに必然的に備わる習性にして欲望にして本能。

どのような存在でされ、群を形成することなく唯一の孤としてのみ存在することなどではしない。

それは、峰岬 鈴音という器の中にある蟲にも共通する。

虫種は動きを止めた鏡を覆っている。識別している。仲間なのかどうか。仲間となりうるのかどうか。自分の寂寥感を癒してくれる存在かどうか。

鏡の耳には先ほどから至近でダイレクトに、虫の放つ間接音が、顎の噛みあう音が、それぞれの身のぶつかり擦れ合う音が、その湿った音が、滑った音が、硬質的な音が。防ぎようも無く耳朶を打つ耳に入り脳を掻き乱し侵してくる。

その音に、ざわ、とした音が混ざる。

それは虫が放つ音とは違う異音。次第にその音は大きくなる。そ

の異常に、蠢いていた虫が停止する。それは識別から異常への対応に変化する前触れ。それは僅かばかりの停止。

だが、それで十分。

直後に、空気が強く打たれ音が爆ぜる。

鏡を覆っていた虫は離れ、飛べるものは宙を飛び、そうでないものは地へと落ちていく。

鏡はもとのノースリーブとホットパンツという出で立ちに戻っていた。その手には深紅の大きな布——のようなもの。

虫は鏡を覆っていた。だが、それをより正確に言うのであれば、虫は鏡の纏う深紅のドレス、化粧を覆っていた。だから、鏡は深紅のドレスを血液に戻すことなく、ドレスの状態のまま脱ぎ放ち、勢いよく振るつたのだ。

布は強くはたけかなりの強さで空を打つ。その振動に、虫は耐えることができずに離れざるを得なかった。

これが人間の力で行われたのなら、異形の虫が離れるに足る振動ではなかっただろう。だが、鏡は魔——鬼である。それも、最凶と称される種。その膂力にたとえ異形の虫でも耐えることはできなかった。

それでも、剥き出しの顔や膝とブーツに包まれた脛の間の肌には、いまだ虫が張り付いている。

鏡は顔についている虫を苦も無く力任せに手で引き離していく。

肌に食い込んだ脚が深い傷を離れる際に刻んでいくが、十分に血を得た鏡の身体はそれを間髪いれずに修復していく。

「……気持ち悪い」

ぼつり、と鏡は手につまんだ、蟻のような身体に蝶のような翅を三対持つ手の平ほどの虫をみて呟く。よく見ると、その翅には毒々しい色彩の模様がびっしりと描かれている。見ただけで、毒か何かを持っていると思わせる。だが、鏡はそれを無表情に握りつぶした。湿り滑った潰れる音。その手には、黄色い液体と虫であった残骸。それは、徐々にその姿を消していく。

数秒ほどで、その残骸は幻のように完全に消失した。

鏡が知っている、識っている蟲の情報は多くない。その多くない情報の一つに、『死の概念』が無いというものがある。蟲たちは幾ら殺そうともある程度時間が経過すれば、すぐに復活する。たしかに、他の生物のような絶命状態にすることはできる。今の握りつぶされた虫がそうだ。あれはもう死んでいると言ってもいい。その証拠にもはや動くことは無かった。けれど、直後にその姿は消失する。死骸と言う物が残らない。

殺せば消失する、ならばそれは死ではないのか？ そう思うが、そうではない。

鏡の推測では、蟲は殺すと消失する。その消失は一時的なもので、器に戻るという意味でしかない。その証拠として、今顕現している虫種の中には、鏡が過去に殺したはずのものが存在している。いや——鏡は過去すでに虫種の大半を殺したのだ。全てではないにしても、それはほぼ全てと言っても過言ではない。なのに、現在顕現している虫種は万。それは一や二ではなく、十数から数十。

蟲はそれぞれの種から外れた存在であるため、そのそれぞれの種の数を越えることは無い。そして、それらは孤であるため一つの種に一匹。だから、虫種であれば八十万から百万強。そして、鏡が過去に殺したのは大半——最低でも四十万強。器が完全に開いていない状況で、十数から数十が、四十万強も失っているにもかかわらず顕現できるはずが無いのだ。

それに、峰岬 鈴音は蟲の器であると同時にそのもの。構成するそれが一つでも欠ければ、存在が崩れる。

蟲は死なない。蟲は生と死が閉じた輪として廻り続ける。生が死であり死が生。生きていてもそれは脆く死に易い。けれど死ねば器に戻りまた生まれる。これが、鏡の推測。

過去にも、鈴音は今と同じ状況になったことがあった。

その時は顕現している蟲の大半を殺し、器に戻すことによって一時的に器としての機能が止まった。

生という器から出る事象と、死という器に戻る事象。鏡が器に戻す行為を急激に行ったため、器は生という出る事象を行うことが滞り、一時的に戻すことしかできなくなった。

鏡が知り、識っていることは多くない。精々がこの程度。

これですら、絶対に正しいとは言えない。これも、やはり外れていない者の考え方だからだ。外れたものに通用するとは限らない。それでも、鏡にできることはこれしかない。

鏡はマントを羽織るように多きな布と化している血を身体に纏う。同時に、それはドレスへと戻り、鏡を飾る。

鮮血のドレスを纏い直した鏡は、虫を殺し尽くすべく行動を再開する。

顕現している異形の虫は万。

控えめかつ樂觀及び希望的に計算してそれは十数万。

現実的かつ悲觀及び絶望的に計算してそれは数十万強。

これらを、鏡一人で全て殺す。

過去の経験上、蟲の中でも虫種は数だけで極めて脆弱な存在。他の種に比べて殺し易い。しかし、その数が異常なまでに膨大なので、器の機能を鈍らせるまでに殺しても殺しても復活する。

もっとも早い方法は鈴音を起こすことなのだが、それは流石の鏡にも無理だった。増えつづける膨大な数の虫の防壁を突破することは、鏡にも不可能だった。

だから、残った方法は一つ。

やるならば、一つの動作で、最低でも十分の一を殺す必要がある。つまりは、現実的に見て数万を。

鏡の、雛罌粟 鏡の能力は鮮血の操作。その本来の能力名は『四花卉』。四つの色を持つ力。その四つの内、この大量の虫に有効なのは二つ。

場はカテドラルという聖域だが、峰岬 鈴音という圧倒的な異常存在と、最凶の鬼である鏡、エストリエという二重異のメルデイス、白鬼という鬼でありながら魔を滅する八雲。これら四つの異常に侵され、その清浄さはいまや薄れ霞み、まったく問題にはならない。

能力の源たる血も十分。

四花卉を使うのに問題は一つもない。

そう、問題は無い。無いだけ。

使用するに当たり、問題とはいかないまでも不確定な事項が幾つがある。

それでも、鏡は悩まず考えない。方法は一つしかないのだから悩もうとも考えようとも意味は無い。

「八雲！ あとメルデイス！ これから十秒間だけ、絶対に息をす  
るな！」

鏡はそちらを見ずに八雲とメルデイスにそう命令する。

「十秒でいいのか？」

八雲は、ただ、それだけを訊ねる。何故とも訊かない。訊くだけ  
時間の無駄で、そうすることが今できることだとわかつているから。  
そしてそうせねばきっと自分にも被害来るのだから、漠然と  
想像はつく。

「そうだ。十秒。それだけでいい」

「はいよ」

八雲はそう軽く返事をする、となりで俯いているメルデイスを  
――生徒自治会会長の茉莉を見る。

喩え人形と言えども、いや、なまじ人の姿に――それも子供に似  
せて作つてあるからこそ凄惨な壊れた人形の残骸。茉莉はそれらを  
抱いて俯いたまま動かない。いや、よく見ればかすかに肩が震えて  
いた。

他者を人形のように扱うことは厭わなくせに、人形に対しては  
人と同等の価値を見出すんだな。コイツは。

八雲は冷めた眼差しで見下ろしながら、冷えた感情でそんなこと  
を思った。

が、それは今はどうでもいい。

人とは違うものに人としての常識や倫理を求める方がどうかして  
いる。

八雲は茉莉に対する感想をそう切り捨てた。

「おい、聞こえてたろ？ 息を止めとけっさ」

内心ではこんな奴、死んだところで別に構わないと考えていたが、  
今死なれると都香の居場所がわからないままになってしまふ。それ  
ならそれで、八雲は死ぬ気で捜し出すだけだが、そうしている間に  
も都香が衰弱していくかもしれない。

そう考えると、茉莉にここで死んでもらうのは具合が良くない。

それに、鏡は八雲だけでなく、こうなった原因である茉莉にも息をするなといった。それはつまり、ここで死ぬことを良しとしないということだろう。

なら、それに従っておくべきだ。

鏡がこの後、茉莉を直に、巻き込む形でなく直接的に殺すのか。殺さず、罪の償いをさせるのか。どうでもいいと切り捨てるのか。それは八雲にもわからないし、正直どうでもいい。

とりあえず、八雲にとって茉莉は、ここで死なれると困る。こんな状態の奴をどうこうする気もない。只、その二つだけだった。

八雲の言葉に、茉莉は反応しない。

八雲としても別にリアクションなんか望んでいない。これから鏡がする何かに対して、ただ息を止めておいてくれればそれでいい。だから、茉莉に向けていた気を、幾万の異形の虫と対峙する鏡に向ける。

鏡は久しぶりに使う感覚に、意識を集中していた。

操作は鏡が思うように反応する。そのため、ほんの少しの雑念が入り混じればそれすら作用し、歪で無様な使い物にならないモノになってしまう。

特に、これから使う四花弁というモノはそれが顕著に表れる。

だが、それだけに強力だ。

虫たちに動きは無い。おそらく、目の前の鏡を敵と認識していることは確かだが、それでもアクションが無いのは、今のただ己が内にのみ意識を向けて集中している鏡に害意を感じられなくなったからだろう。

たとえ自分達に有害な植物だとわかっていても、虫はそれを排除するような動きは見せない。ないものとして扱っただけだ。手を出さなければ、有害であろうとも問題は無い。

虫たちに動きは無い。だが、虫たちの気配が一つ、また一つと増えていくのがわかる。

そして、その気配の増加に半比例して鈴音の気配、存在感が希薄になっていくのも。

鏡が、深呼吸をするように大きく息を吸った。

――刹那。

深紅の鮮血ドレスが霧消した。

(四花卉――白花羽<sup>シカバネ</sup>)

小さく、鏡は心中で四花卉のうちの色の一つ、白の花卉の真名<sup>まな</sup>を呟く。

ドレスは霧消した。その言葉の示す通り、だがその意味とは真逆に。

霧が晴れたかのように消えたのではなく、霧のようになって消えた。

カテドラルを満たすように、微かに、僅かに、埃のように、鉄錆びの匂いが咽ぶ。

鮮血の深紅はどこにも見えない。

だが、確かに存在し感じられる悪寒に、薄く蔓延る危険に、虫がにわかに鳴動する。

(――咲き乱れる)

目を閉じて、軽く念じる。いや、それは念じるなんて仰々しいものじゃない。ただ、そうなければいいな程度に思っただけ。

それで十分。

突如、虫たちが破裂した。

一切の例外なく幾万と鳴動していた虫たちが、大小の間抜けな音を放ちながら破裂した。一瞬で。一斉に。

――まるで、一つ一つが花のように。

びちゃびちゃという不快な音共に、幾万の虫の破裂した残骸が床に落ちていく。

そして、それだけだった。

そこには、鮮血を纏う姫の姿はなく、何れにも当てはまらない明らかに異常な存在も無い。

ただ、赤く黒く汚れた露出の多い服を着た少年のような銀髪の少女が、突っ立っていただけ。そして、存在が希薄になりすぎた、少女——のようなモノ。

鏡の使った雛罌粟の異能『白花羽』。

それは己の任意の血液を霧のようにナノ単位まで小さく分裂させることで空气中に蔓延させ、広域の対象に自らの血液を強制的に摂取させることで、対象そのものの血液を自らの意識化に置くもの。

あたかも、花が花粉を飛ばし受粉させるように。——ただ、それより幾らか悪辣であるが。

本来ならば幾ら雛罌粟が公爵位であり、血の操作に長け、自らの血で対象を操作可能だといっても、極少量では無理がある。精々、侵入口である口腔や鼻腔、あるいは傷口などを多少傷ませる程度だけれど、それは通常であればの話。

今回において対象となるのは虫。異形と言えどその大きさは人間などの生物に比べると小さい。通常必要な量のほんの数パーセントで十分だ。

さらに、『白花羽』は血の内包情報すらも操作する。たとえ顕微鏡サイズの血液であろうとも、そこに含まれる雛罌粟の血であるという悪性情報、毒素は、そのサイズの数十乗。呼吸時に吸い込む量がほんの僅かでも、十二分な毒であり、一滴だけ吸収するわけでもないのだから、それは吸い込んだ時点で死が確定する。

あとは、体内を廻れば勝手に毒素が回り、死ぬ。花のように瞬きの栄華となつて。

ただ、この『白花羽』には幾つかの問題点がある。その一つが耐久性だ。鏡が八雲たち二人に十秒だけ呼吸を止めるといったのにも、そこに理由がある。

それが十秒。幾ら異常で毒性が強いといっても血液であることには変わりなく。液体であれば気化し、その圧倒的な微小性と維持に必要な精神力の半端無い集中により、持っても精々が十秒。

気化したところで毒が毒であることには変わらないが、その毒素

も操作したがゆえのもの。維持に必要な集中力が途切れ、一度使用済みとなってしまうと、通常の鮮血操作と同じく使い物にならなくなる。

それでも、一度使えば、その力を向けられたものは何が起きたかを理解する間もなく死ぬ。

強力。そして凶悪。だが、それだけに持続力が無い。

風に流されるだけの花粉が、風が途切れれば力尽きると同じように。

鏡は、虫が、蟲が顕現しないことを暫くの内に判断すると、ちらりと背後に目を向ける。一瞬の出来事に呆気にとられているような気配が感じられるが、それだけだ。問題なく無事であるらしい。

それだけ確認すると、鏡は鈴音の元に駆けた。

距離は近く、ほんの十歩ほどの位置。

其処に居たのは鈴音という名の少女の形を辛うじて留めている、形容しがたい何か。

それは、顔の左半分がごっそりと無くなっていた。

それは、右腕が虫に喰われた葉っぱのように穴だらけだった。

それは、左腕が肘の先から無かった。

それは、乳房の一つが、腹を臍まで一緒に無かった。

それは、右足が齧り取られたかのように欠けていた。

それは、左足が脚の付け根から脛にかけてまで消失していた。

それは、およそ生きてとは思えないほどに狂った壊れ方をした、只の肉の塊だった。

けれど、鏡はその姿に構うことなく抱きついた。

「ああ、リン……リン………」

きらきらと煌く涙を零しながら、鏡は最愛の少女の名を囁く。

蟲は、存在そのものが鈴音であり、鈴音が蟲そのものという閉じた輪だ。

そのために、蟲が顕現する時、それは現在姿を持っているモノを使うことになる。この場合は、それが鈴音だ。

たとえば、大海を群れをなして泳ぐことで大魚のような姿に擬態する魚を思い浮かべればいい。

蟲は群れから外れた孤。如何なる存在も孤として存在しつづけることは出来ない。

それは、全てから外れた蟲も同様だ。

そのため、蟲は孤となったそれぞれで一様の群れを作った。だが、それだけではやはり孤であることに変わりはない。なぜなら、それだけなら孤が大量に其処にあるだけと変わらないからだ。

それは、群れとはいえない。

群れは、同じものたちと共に在って始めて群れとなる。

だから、蟲たちは大海を泳ぐ大量の魚の用に、寄り集まって一つの形に擬態した。

それが峰岬 鈴音という人間の少女。

すなわち、現状の支配者である霊長。

支配者と同じ姿に擬態することで、淘汰される危険性を減らし、より完璧に擬態するためにそれぞれでネットワークを形成し、擬態した形に意思を持たせた。

それが峰岬 鈴音。

そのため、峰岬 鈴音も外れた存在だ。人から、霊長から外れたという意味ではなく——そもそも生物、蟲ですらないという意味で存在ではなく擬態という現象である鈴音はどれだけの傷を負ったところで死なない。

そして、生物としての断わりから外れ独自に生と死の輪廻の閉じた輪を持つ蟲が群れをなす限り、鈴音という現象は続く。

雛罌粟が手を加えて改竄し流布した『蟲の蔵』という存在は、『無死の庫』という真実の側面だけを取ったものだ。

死んだ虫たちが再び生を取り戻し、鈴音という群れに戻れば、峰岬 鈴音という現象は再び続く。

鏡はただ、愛しい少女を抱きしめて名を囁く。  
機能不全を起こした器が正常作動し、鈴音が意識を取り戻して尚。

これで、一様の幕引きとなる。

## The act shuts .

納得がいかない。

劇中においての被害者にして共犯者。

生徒会所属の二年生、杜若 八雲。役職は副会長。

その正体は『色鬼』という極東のこの地、日本にのみ存在する魔鬼を狩る異端の鬼の現宗主たる白鬼だ。その異能は一切の不浄の浄化。

いい加減な感じが表出しすぎているが、実は下級生から慕われていて、さらに実は初心<sup>うぶ</sup>な部分もあったり、加えて実は結構偉い彼女は、怒っていた。

ぶんぶんという擬音がとても似合うような感じの怒りなのだが……いかんせん。長身でかつこい部類に入る容姿の彼女に、ぶんぶんなどという可愛らしいものは非常に合わない。違和感の塊だ。

そんなことにも気付かず、彼女は怒りながら寮の階段を上っていた。

途中、何人かの生徒達に出会い、そのたびに声をかけられあいさつされ、それに一々受け答える彼女は、人としても偉いのではないだろうか。

ともかく。そうしているうちに階段が終わった。目的地に着いたのだ。

八雲はノブを回し、勢いよく扉を開け——ようとして作りのきうならないようになっていた扉を普通に開けた。

「納得がいかない!」

扉を開けるなり、彼女は大声を出して、そう怒りを露わにした。

「騒々しいですわよ、八雲さん」

額に手を当て、はあ、などと優雅に溜め息をつきながら、机に向かっていた金髪の美少女がたしなめた。

「うるさいばーかつ。なんなんだよコンチクショウ！　納得がいかない！」

まるで子供の駄々だ。

金髪は眉をひそめて呆れたように頭を振ると、紅茶のカップに手を伸ばした。

くすくすという、押し殺してたけど無理です笑っちゃいました。みたいな笑い声に役もがそちらに目を向けると、少年のような容姿の少女が、背を向けて肩を震わせていた。

「あ、え、えーと……」

その横にいた長い黒髪の少女と目があうと、その少女は苦く笑いながら目をそらした。

場所は生徒自治会室。

会室ないには今、先の三人に八雲を加えた四人しか居ない。どうやら他の自治会委員は出払っているらしい。

「私は説明を要求する！」

金髪のいる机の前まで歩いていくと、八雲は机に手を叩きつけて声高にそう主張した。机の上のソーサーがその振動で僅かに跳ねた。コトリ、と上品な音を立ててカップをソーサーに置くと、金髪はちらり、と横を窺う。

其処にいた二人の少女は、まるで他人事のようにこちらを完全に無視して、軽くいちやついていた。

それを見て、整った顔を僅かに怒りに歪めながら、金髪は口を開いた。

「なんのですの？」

ブチィ、とか言う擬音が聞こえた——気がした。

「わかってるだろ？」

八雲は怒りの余りに笑顔だ。表情筋が壊れたのかもしれない。声も震えていた。

「存じませんわね」

冷やかに金髪は言い捨てた。

ぶるぶると身体を震わせながらも、何とか冷静でいようとする。  
とりあえず、会話できる程度には。

「まず、アンタはどうしてケロっとしてるんだ？」

八雲は一つずつ聞いていく方法に変更した。

「終わってしまえば、意外とすつきりしてしまうものですわ」

「次。何でまだ学院内に居るんだ？」

「わたくしはまだここの在校生ですもの」

「……都香。実は帰省中なんだってね？」

「ええ。そうらしいですわね」

いけしやあしやあと金髪は言った。

今度こそ、幻聴でもなんでもなく、ブウッチィ！ という擬音が聞こえた。

「ふざけんなあーっ！ それじゃあなに？ 私ってただのピエロ！？」

「実に御し易かったですわ」

心の底からの悲痛な怒りの咆哮は、いつそ清々しいまでに傲岸不遜の極みにある台詞によって、見事なまでに流された。

空気の抜けた風船のように愉快に膝をつく八雲。

あの後、今回の劇の主犯であり、生徒会自治会長を務めていた三年生、十条寺 茉莉こと、メルデイス・クローチェ・ビスコンティ工は無関係な生徒九人を巻き込み、カテドラルをこれでもかと破壊した——実際、大半は八雲と鏡だが——にも関わらず、なんのお咎めもなく今まで通りに普通に学生生活に戻っていた。

巻き込まれた生徒九人は、軽い打撲と貧血こそあったものの無事だった。

メルデイスこと『惑乱候』の惑乱に支配されたものは一時的な記憶障害になるらしく、それはメルデイスのもう一つの属性、『エストリエ』として、魔術を使い偽装記憶処置をして、うやむやになった。

蔓延っていた噂も、気付けば消えていた。

カテドラルは次の日には劇そのものがウソだったかのように元通りに直っていた。

そして、八雲が共犯にさせられたネター人質である都香は、あの生徒会室での夜の翌日、祖母の急死のため急遽帰省していたらしい。それを知っていておかしくないだろう。お二人の台詞。

曰く、「一学生に一学生のこみいった事情が知らされるわけ無いだろう」

曰く、「わたくしは『都香さんを人質にした』などとは一言も言っ  
てませんわ」

ということらしい。

つまり、八雲は全く関係無いのに付き合わされ、全く関係無いのに疲労して、全く関係無いのに戦った。

骨折り損、とはよく言ったものである。

「お前ら皆私の敵だ！」

うわーん、と泣きながら八雲は自治会室を出て行った。

台風のように八雲が去った後、会室内を静寂が支配する。

「……本当に、よろしいんですの？」

暫く静寂に場を支配させた後、茉莉がどこか震えるような声で呟いた。

「不満？」

少年のような容姿の少女、鏡が、それに対して短くそれだけを答えた。

それは、無感情な声だった。ただ、問われたから問い返しただけ。そんな響きだった。

茉莉は、その無感情な声になかならず安堵した。もしも……。という考えがあったから。

「……いえ」

短く答えを言うと、茉莉は立ち上がり、

「本当に、ごめんなさい」  
頭を下げた。

軽い金髪が舞い零れる。日の光り受けて煌くその髪は、どこか幻想的だった。

「しつこいよ。あと何回やったら気が済むの？」

鏡の呆れたような声。

鏡の言う通り、茉莉はこれまでに何度も今回の劇のことで謝罪をしてきた。そして、赦されたことに。

茉莉は、まだ頭を上げない。

上位階級の者に剣を向けた者は、殺さなければ殺される。

それが爵位を持つ者たちの間にある絶対ルール。

離罌粟 鏡は公爵位で、茉莉——メルデイス・クローチェ・ビスコンティエは候爵位だ。

当然、今回の件で鏡を殺す、あるいは自らの僕まで墜とせなかったメルデイスは、ルール通り鏡に殺されるはずだった。

けれど、鏡はそれをしなかった。

興味の有無の問題ではない。

シンプルに、鈴音との約束があるからだ。

だから、殺さなかった。

けれど、ルールは絶対。死を持って償いをしようとしたメルデイスを鈴音は止めた。そして、鈴音にせがまれた鏡は、しかたなくもう一つのルール、

「剣を折られし者は服従を」

というものに従い、メルデイスを『惑乱候』と『ブラッディナイオ』という二つの異名を持ち、エストリエという属性まで持つメルデイスを、自らの僕とすることにした。

ルール絶対。

爵位を持つ者にとって、爵位を持つからこそ存在するルールに逆らう、あるいは従えないのは自己という存在の凌辱に等しい。

そのため、メルデイスは素直にそれに従った。

配下に下った者は主の命無しに勝手に異能を使えない。なぜなら、それがルール、契約だからだ。

そのため、今回だけはメルデイスの起こした劇——事件は目を瞑ってもらえた。そこには、雛罌粟 鏡という『鮮血姫』としての学院上層部への発言力も手伝っている。学院側にとつて、『鮮血姫』は重要な存在。ご機嫌取りをしておくにこしたことは無い。

けれど、それも今回だけだが。

「茉莉会長。頭を上げてください」

黒髪の少女、鈴音が、いまだ頭を下げたままの茉莉に聖母のような優しさで声をかける。

今回、一番の被害者は彼女だろう。

だから、茉莉は顔を上げられない。

茉莉は、本来プライドは高いがけして悪人ではないのだ。

今回の事件。原因はビスコンティエという侯爵位の家と、メルデイス自身の歪んだ想いによるものだ。

ともすれば全ての生物を支配下における。だと言うのにいまだ侯爵位止まりのビスコンティエ侯家。

爵位を上げるためには邪魔な公爵位を滅ぼす他ないという、地位を持つが故の欲によって狂気に取り付かれた『惑乱』の家は、その実、欲望によって自ら惑乱していた。

そうして作られた、魔であるにもかかわらず、魔を滅ぼす技術を持った二重異。『エストリエ』という与太話の顕現。

彼女もまた、その欲の強さゆえに狂った方向を選んでしまった。戦闘中の様子からもわかるように、メルデイスは鏡に特別な思いを抱いていた。

けれど、鏡はそれに気付かず、むしろ眼中にすら入っていないなかった。

プライドの高い彼女はそれが許せなかった。

だから、死ぬところまで追い詰め墜として、自分の僕にしようとした。

結果は真逆になったが、彼女は満足している。

「知ってますか？ キョウ様は、しつこいことをされるのが嫌いなんですよ？」

鈴音の言葉に、茉莉は勢いよく顔を上げた。

その表情はどこか鬼気迫るようなものがあつた。

あちゃ、ちよつとダメだった？

鈴音は内心で、言葉を間違えたかな、と思つたが、ちらりと窺つた鏡は微笑んでいたので、気にしないことにした。

そのかわり、悪戯っぽく微笑んだ。

その二人の微笑を見て、茉莉はからかわれたと知つた。

「も、もう！ ひどいですわ……」

思わず取り乱してしまった恥ずかしさから、顔を朱に染めてふくれた。

「こついうのも、悪くないですね」

鈴音が楽しそうに言う。

鈴音と茉莉は仲が悪かつたはずだが、何故だか仲が良くなつていくようだった。そのことに、鏡は内心で何故だろう、などと首を捻つていたが答えは見つからず。まあ、リンがたのしそうだからいいや、と気にしないことにしていた。

鈴音が友達という、他人との関りを欲していることを知っているから尚更。

だから、鏡は鈴音に答えた。

「そうだね」

それは、どこか楽しそうだった。

結局、今回の劇は、誰も死ぬことが無い、平和なものだった。

## Backstage

「——で、あなたは結局出張ったっていうのに、その役目を果さずに終わりですか？」

嘲るでもない、丁寧な、ただ疑問に思っているだけの口調。

「まさか！ アタシは禍を加える蛇だよ？ そのアタシが出張れば必ず禍がもれなくついてくるさ」

癪に障るような愉快げな口調。

「キミこそどうなのさ。結局、肝心な部分は記録できなかったんだろっ？」

「ええ。まったく、なんともつまらない終わり方でしたから」

ふう……、と嘆息。

「そもそも、あなたがもう少し突付いてくれば、動きはあったはずなんですよ」

恨みがましいような台詞。

「ハハ。アタシは楽しみたいんだから、その要求は聞けないよそれに、と続ける。

「結果に至るまでの過程部分も重要だよ。いつどこで分岐するかわからないんだからね」

「まあ、確かにその通りですけど……」

「不満かい？」

「はい。だって、分岐先が崩壊だったら、目も当てられないじゃないですか」

「フン。記録者は大変だね」

「はあ。あなたは楽でいいですね」

「そりゃ、アタシは——我等は怠惰と欲の顕現だからね」

「……ところで、結局どーしようか迷ったんですけど」

そう言えば、と首を傾げて

「あなたたちのこと、なんて記録すればいいんです？」

「血を吸うんだ。吸血鬼でいいんじゃない？」

「随分と『吸血鬼』から逸脱してますよね」

「まあね。けどま、その疑問は彼女たちとこれからもキミが関り続けるなら、答えが出るさ——割とすぐにね」

「そんなもんですか」

「そんなもんさ」

時間ですね、と愉快に告げ、一人が姿を消した。  
空を見上げた後、もう一人も消えた。

見上げた空。

真ん丸い月が、狂ったような笑みを浮かべていた。

.....

.....

.....

## **B a c k s t a g e (後書き)**

続編が出ております。

是非そちらも読んでいただければ、幸せです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1518b/>

---

S h e i s

2010年10月8日11時58分発行